

---

**風が吹いたら恋をしよう。**

虹色

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風が吹いたら恋をしよう。

### 【Zコード】

Z9926X

### 【作者名】

虹色

### 【あらすじ】

恋人に裏切られて傷つき、「もう恋なんてしない！」と決心している紫苑<sup>しづかん</sup>と、紫苑に幸せな恋をもたらす使命を持つ“恋風”<sup>こいかぜ</sup>のユウ。人を好きになることが怖くて、仕事も友人関係も充実していることに満足している紫苑に、ユウが新たに出会わせたのは、笑顔のカワイイ優斗。優斗の登場で、同僚の龍之介との関係も動き出し。。。恋も手先も不器用な紫苑は、こんどこそ幸せな恋にたどりつくことができるのか？ そのときユウは・・・？ ほんのり甘くて、ちょっとぴりせつない、紫苑と誰かさんのおはなしです。毎日

更新の予定です。

# 1 ノウ

紫苑。紫苑。泣かないで。

「・・・誰？」

僕だよ。今、生まれた。

「生まれた？」

そうだよ。僕たちは、人間が悲しい恋をしたときに生まれる。

「どうして？ 何のために？」

その人間を幸せにするために。

「幸せに？」

うん。幸せな恋をしてもうのが、僕たちの仕事。僕は紫苑  
が幸せな恋をするための手伝いをするよ。

「幸せな恋・・・」

そうだよ。だから、泣かないで。

「もひ、恋なんてできない。」

そんなことない。僕には分かってる。

「つか。信じられない。」

紫苑。幸せな恋の相手はたった一人だけじゃないんだよ。

「え？」

人間には幸せになれる相手は、けっこつたくさんいるんだ。  
でも、気付かないだけ。

「それじゃ……“運命の人”っていうのは、『テタラメ』？」

気が付いたことが運命だって考えれば、『テタラメ』とは言えない  
けど。

「ああ……そうだね。」

僕は紫苑が幸せになれる相手と出会いつきつかけを作るのが仕  
事。

「きっかけ？」

そう。チャンスを作る。

「チャンス……。」

それを活かすかどうかは紫苑次第だよ。

「……これがチャンスだ」って分かるの？」

それも紫苑次第。

「じゃあ、いつも気を付けていなくちゃいけないの？」

たぶん、無理。

「どうして？」

僕たちが人間と話せるのは夢の中に限られているし、その夢も、人間が目を覚ましたら忘れてしまうことになっているから。

「……じゃあ、何もないのと同じだね。」

紫苑の頭の中ではね。だけど、僕がついているから、幸せな恋のチャンスはほかの人間よりも多くなるよ。

「ふふ。なんだかキューピッドみたい。」

笑ったね、紫苑。その方がいいよ。でも、僕はキューピッドではないよ。人間の心に影響を与えることはできないから。

「じゃあ、あなたはなあに？ 守護霊……とか？」

そんなに強力な力もないよ。まあ、ちょっととした風みたいなものかな。僕たちは自分たちを『恋風』<sup>こいかぜ</sup>って呼んでる。

「『恋風』……。」

うん。きっかけを作るときに、風を使うことが多いから。そ

れからね、僕たちを生んだ人間に名前を付けてもらひつんだよ。

「名前？　じゃあ、あなたにはあたしが付けるの？」

そう。

「名前・・・・・」

紫苑の心の中に浮かんだ名前。

「あなたの名前は・・・・・ユウ。」

「ユウ・・・・好きだな、この名前。ふんわりして、優しい。ありがとうございます。」

「よかったです。ユウはどんな人・・・どんな恋風なの？」

僕たちは、自分たちを生んだ人間に幸せになつてほしいと思うだけの存在。

「子ども？」

一緒にいる人間に合わせて変わって行くよ。いつも紫苑と同じくらいと思つてて。

「じゃあ、中学生だね。・・・」これからずっと、あたしに付いててくれるの？

紫苑が幸せになることが確実になるまで。

「でも、あたしはコウのことは覚えていない？」

夢の中で会つたら思い出せるけど、僕もいつでも自由に夢に入り込めるわけじゃないんだ。

「え？ ……。でも、一緒にいてくれるんだね？」

そうだよ。紫苑が幸せになるまで。

「じゃあ、一人じゃないんだ……。」

うん。紫苑は一人じゃないよ。

「ありがとう、コウ……。」

・・・・・

あれ？

寝ちゃってた？

机に突っ伏して……泣いたまま寝ちゃったんだ。

泣いたまま……。

隆くんがあんなこと言つから。

内緒で話があるついで、からドキドキして行ったのに、隆くんが言ったのは

「俺、三崎のこと好きなんだ。頼む！ 協力してくれよ！」

だった。

三崎真由ちゃん。

おとなしくて女の子らしい、あたしの親友。

幼馴染みの隆くんのこと、ずっと好きだったのに。あたしの気持ちには気付かないで、真由を選んだ。

「いいよ。」

つて言つことしかできなかつた。

それだけじゃなくて、

「真由を選ぶなんて、田が高いね！」

なんて、冷やかしてみたりして。

隆くんと真由なら、きっとうまく行くだらうな。

スポーツなら何でも得意な隆くんと、手芸部で女の子らしい真由。お似合いだ。

二人とも優しくて、思いやりがあるし。

あたしは気が強いだけで、いいところなんてない。

だけど・・・。

幼稚園のときから一緒にいた隆くん。  
一緒にいるのが当たり前だと思つてた。

好きだつて気付いたのは6年生のとき。  
あのときから、バレンタインのチョコは本命だつたのに。  
男の子は子どもっぽいから、あたしの気持ちに気付かないんだと思つてたのに  
いつの間にか、真由のことを見ていたんだね。

なんとか家まで泣くのを我慢して帰つて来た。  
みんなと笑いながら話して帰つて来たつて、すぐない?

家についてからは、玄関から自分の部屋に直行して、そのまま泣いた。

たくさん、たくさん。

タオルが涙と鼻水でぐちゃぐちゃになるほど。

絶対に夕飯なんか食べられないし、明日は学校に行きたくない。そう思つた・・・のに。

今はなんだか落ち着いてる。  
お腹も空いた。

たくさん泣いたから?

それとも、眠つたのがよかつたのかな?

隆くんのことは仕方ない。

人の心を操ることなんてできないんだから。

それに、あたしは嫌われたわけじゃない。

隆くんがあたしに協力を頼んだのは、あたしのことを信用してるから。  
・・・幼馴染みの友達として。

大好きな隆くん。それに、大好きな真由。

二人が仲良くなれるように協力するよ。

あたしは・・・次に誰かを好きになつたときには、その人に自分を選んでもらえるような、ステキな女の子になるよ!

1 ニウ（後書き）

お楽しみいただけたら嬉しいです。  
どうぞよろしくお願いします。

## 2 紫苑（1）

紫苑。高校の制服、よく似合ひよ。紫苑のために、僕、がんばるよ。

・・・さて。

この学校で紫苑が幸せになれる相手は、今のところ一、2、3・・・  
・16人か。

出会うタイミングも重要だよね。  
それに、お互いに“この人だ！”って気付くかどうかわからな  
いし。

とりあえず、一番最初は・・・だ、れ、に、し、よ、う、か、な？

うーん、彼か。

親切が服着て歩いているみたいな男の子だね。  
同じクラスだし、入学した日にちょっととしたきっかけがあるのはい  
いかも。

「ええと、・・・谷村さん、だけ？」

「あ、はい、それですか？」

「髪に葉っぱが絡まってるよ。」

そつそつ、いい感じ。

柔らかくて長い紫苑の髪は、いつもみんなに褒められてるもんね。

「え？ 「うわ。何でこんなこと？ しかも、葉っぱがいっぱい、草？」

「草むしりしているといふを通りたりした？ それが、原っぱでぐるぐる返しをしてきたとか？」

「じたなこよ！ やだ～、取れない！」

うん。  
それを一緒にとつながら仲良くな。

「やひここやー。」のまま帰るー。

え？

「え？」

「お腹空いたし、どうせ歩いて15分だから。田中くん、教えてくれてありがとう。じゃあね。」

ああ・・・。

彼、自分が嫌がられたんじゃないかと思つてゐる・・・。  
もう少し愛想よくできなかつたのかな。

それとも、髪にくっつけた草が大量すぎた？

・・・・・

高校生活にも慣れてきたし、そろそろ次のきっかけがあつてもいいよね。

なんだか沈んだ顔をしてるし。

飛んで行つたものを拾つてくれた人つていうシチュエーションはどう?

紫苑の手に持つているそれ。

「あー」

「・・・?」

やつた! うまく拾つてくれたよ。

これでお互いに視線を合わせて・・・。

「見ないでっ!」

え?

「ふ。」

彼、笑い出した?

「谷村紫苑さん？」

「ダメっ！」

紫苑、ひつたくつたりしたら失礼なのに。  
でも、彼、笑いっぱなし・・・?  
あ、お礼も言わないので走り出すなんて。

「やだ、もー！ 名前まで見られたしー！」

うーん。

15点のテストじゃ、相手を観察する余裕なんてないか・・・。

・・・・・

どうもうまく行かないな。

僕がまだ経験が浅いせいかもしれないけど。

あ。

よくあるパターンだけど、転がつて来たボールを渡すっていうのは  
どう？

ほら紫苑、このサッカーボール。

取りに走つて来た彼は、候補者の中では一番の運動神経の持ち主・・  
・そんなに近付いてから蹴っちゃダメだよ！

「！」

「あ。」

倒れちゃつた・・・。

顔面直撃だもんね。

しゃがむのが面倒だからって、いきなり蹴るなんて。

彼、無防備な状態だったから、避けられなかつたんだよ。

あーあ。

鼻血出しちゃつてるし、みんなの前でやられたってといひで、もう紫苑にいいイメージを持つてもひらは無理だね・・・。

・・・・・

よし、今度こそ！

タオルなら、ぶつけられても怪我しないし。  
球技大会で活躍してる彼の・・・。

「あの、タオル落としましたよ。」「よし、うまく行つた！」

「ああ、あつがとう。」「ああ、あつがとう。」

うん、いい感じ。

そのままにっこりと・・・って、紫苑、そっちの彼じゃないよ！  
どうして隣にいる方に見とれてるの？！

もつー

紫苑がそんなに見た目重視だとは思わなかつたよ・・・。

・・・・・

紫苑。がっかりしないで。

「・・・誰？」

僕。ユウ。

「ユウ？」

覚えてない？ 紫苑に名前を付けもらつた恋風。

「・・・・・あ、そういえば。」

失恋しちやつたね。

「あの人、あんなに浮氣者だつたなんて。・・・そういうえば、ユウつて、あたしの恋のきっかけを作ってくれるんじゃなかつた?」

「うう。

「全然仕事してないよね?」

「そんなことないよ。

「でも、ちつともチャンスなんて巡つて来ないし、今日なんか失恋しちやつたよ。」

チャンスは何度か作つたよ。それに、今回のはそもそも紫苑が間違えたんだよ。

「間違えた?」

僕が選んだ相手の隣にいた人を紫苑が好きになつちやつたんだから。

「ええ? そんな! ちゃんと分かるようにしてくれないと。」

無理だつて。普段、紫苑は僕のことは忘れてるし、僕たちは人間の心に影響を与えることはできないんだから。

「役に立たないなあ。」

「失礼な!」

「ねえ、チャンスを作ってくれた相手つて、誰?」

それを訊いてどうするつもり？

「その相手となら、幸せになれるんでしょう。今度は自分で頑張つてみる。」

無理だよ。田が覚めたら忘れてるんだから。

「やうか・・・。でも、誰？ 知りたい。」

がっかりするかもよ。

「それでもいいよ。」

同じクラスの田中くん。

「え？！ ものすくい人だけぞ。」

「そうだよ。初口に紫苑の髪に葉っぱがついてるのを教えてくれただろ？」

「もしかして、あれがユウの？ 葉っぱじゃなくて、草があんなに・  
・・。」

「うん。紫苑は面倒くさがつてしゃべと歸っちゃつたけど。

「初日でどんな人が分からなかつたからなあ。もつたいないことをした・・・。それだけ？」

2年の寺田聴つていう・・・。

「その名前、聞いたことがある……。」

「うーん、勉強ができる人だよ。数学の全国大会とかに出たつて。

「そんな人と接点なんか……。」

作ったんだよ。紫苑の答収用紙を飛ばして。

「ん・・・? まさか、あの15点の?...」

「うん、そう。もう少し落ち着いてお礼を言つてれば、勉強を教えてもらえたかもしないのに。」

「無理でしうね、そんな」とは。呆れられただけだと思つ。」

あとは、サッカー部の・・・、

「まさかあのとき? ! あたしが蹴ったボールで鼻血出しちゃった。・・?」

「そりだよ。紫苑がちゃんと手で持つて渡してあげてねばね。」

「・・・そんなことへりこで仲良くなれるとは思えないけど。」

まあ、あくまでも “きつかけ” だから。

「なんだか、小さすぎるような・・・。インパクトで震えさせ、あたしの反応の方がよっぽど・・・。」

じゃあ、相手に強い印象を与えるつていづ役には立つてゐるじゃないか。きっと、紫苑のこと忘れられないよ。

「意味が違う……。」

大丈夫だよ、紫苑。まだ何人もいるから。

「本当に？」

うん。それに、僕もだんだんチャンスを作るのが上手くなるから期待してて。

「期待って言つたって、忘れちゃうんでしょう?」

ああ、そうだった。

「まあ、いいや。なんだか、失恋したことでも気にならなくなってきた。」

よかつた。紫苑は元気に笑つてるのが一番いいよ。

「ありがとう。ユウ。」

・・・・・

「紫苑先輩。今までありがとうございました。」

「やだ、あたしが泣いてないのに、みんなが泣こちやうなんて変だよ。」

「だつて、先輩が卒業しちゃうと思つたら淋しくて・・・。」

「何言つてんの。部活を引退してからずいぶん経つのに、今さら淋しいなんて言わないでよ。」

「凹んだボウルや歪んだ泡立て器たちを見る度に先輩を思い出します。」

「ああ・・・。女の子らしくなれるかと思つて家庭科部に入つたけど、あれほど向いてないとは思わなかつたわ・・・。」

「でも、とても楽しかつたです!」

「たしかに見ている人は楽しかつたでしょうね。」

あつといつ間の三年間だつたね、紫苑。

入学初日に同じクラスの男の子ときつかけを作つてあげてから僕もだいぶ成長したと思うけど、未だに紫苑は幸せになる相手とまともないまま、今日、高校を卒業する。

紫苑は入学したころに比べると、ずいぶん落ち着いて、しつかり者になつたよね。

不器用なのはビビリにもならなかつたみたいだけビ。

僕は紫苑をずっと見て來た。

紫苑が友達関係や勉強、部活をがんばってきたことを、僕はちゃんと知つてゐる。

だから、紫苑に幸せになつてほしいつて、前よりもずっとずっと強く思つてゐる。

だけど・・・紫苑は恋についてはあんまり敏感じやないね。

僕が選んだ相手が紫苑に興味を持つていたこともあつたし、僕とは関係なく紫苑のこと好きになつた子もいたのに、紫苑は気付かないか、失敗するかで、どれもうまくいかなかつた。

僕が慰めるために紫苑の夢に入り込んだのは2回だつけ？

まあ、まだ18歳なんだから、これからいくらでも相手は見つかるからね。

一緒に頑張つて行こう、紫苑。

### 3 紫苑（2）

紫苑。心配いらないよ。大丈夫だよ。

「・・・」「ウ？」

そうだよ。お母さんの病気、ちゃんと治るから。

「本当に？」

少し時間がかかるかもしだれだけど、大丈夫。

「・・・よかつた。」

紫苑は大学の勉強と家事で、忙しくなるね。

「でも、お母さんが元気になるなら頑張れる。妹と弟も手伝ってくれると思うし。」

僕は見守ることしかできない。

「それでもいいよ。一緒にいてくれれば。」

いつも一緒にいるよ。

「ありがとう。」「ウ。」

・・・・・

いつも頑張り屋の紫苑。

お母さんが倒れてから1か月。

家事も早起きも得意じゃないのに、妹の椿ちゃんと弟の蓮くんのお弁当を作つて。

お母さんの病院に毎日のように通つて。

きみの心の支えになるような人と出会わせてあげたいけれど、今はそれどころじゃないね。

紫苑？

きみ、もしかして桜井先生を・・・?

あの人はだめなのに。

ああ、どうしよう?

お母さんの主治医だから会うのをやめさせないとせきない。

それに、優秀で優しい人だよ。

だけど・・・紫苑の相手じゃないんだよ。

の人とは幸せになれないよ・・・。

ねえ、紫苑。

ほかの人を見て。

・・・・・

「谷村花江さん、退院おめでとうござります。」

「桜井先生・・・。たいへんお世話になりました。」

「一週間後に外来の予約が入っていますから、忘れずにいらしてください。」

「はい。ありがとうございます。」

「それから、あのう・・・。」

「はい、何でしょう?」

「お嬢さんを・・・紫苑さんを食事にお誘いしてもいいですか?」

え?

「は? 紫苑を・・・?」

「や・・・桜井先生?」

「はー。紫苑さんとお付き合っていただきたいのですが。」

「・・・紫苑?」

「あの・・・はー、お母さん。わたしも先生が・・・。」

「あ、お母さん! だめだつて言つてー。」

「まあまあ、こんな子がいいだなんてわたしには分かりませんけど。  
・・ふふ。桜井先生でしたら、喜んで。ふつつか者ですが、よろ  
しくお願ひします。」

「お母さん!! だめ!

「あつがといれこます。」

・・・・・

紫苑。

僕はどうしたらいい?

どうしたらきみを傷つけずに、桜井先生と別れさせない事ができる  
んだか?」

僕がきっかけをつくっても、きみの周りにいるほかの相手は、きみの目には入らない。

僕はただ、きみを見ている」としかできない……。

・・・・・

「紫苑が大学を卒業したら結婚しよう。」

「・・・本当に?」

「うん。あと一年後。今の仕事が一段落したら、指輪を買って、両方の家にあいさつをしよう。」

「ありがとうございます。とても幸せです。」

・・・・・

紫苑。紫苑。泣かないで。

「いや！ 誰とも話したくない！」

紫苑。・・・ごめん。

「・・・だれ？ デウして謝るの？ 謝らなくちゃいけないのは、  
あの人だけ。なのに・・・。」

紫苑。僕は・・・そばにいたのに、何もできなかつた。

「そばにいた・・・。コウ？」

そうだよ。僕はいつもきみのそばに。

「あの人は・・・。」

紫苑。きみはあの人とは・・・桜井先生とは幸せになれない  
つて決まっていたんだ。あの人は愛情で結婚する人じやないって・・・。

「決まつていた・・・。」

だから僕は、きみとほかの誰かを引き合わせようとしたんだ  
けど・・・。

「あたしは、あの人だけしか見ていなかつた・・・。」

うん・・・。

「あの人、あの話が来たら、すぐに心を変えてしまった。」

「…そうだね。

「あたしより、医者としての将来を取った。それとも、院長先生のお嬢さんって魅力的な人？」

「全然。わがままなお嬢様だよ。紫苑の方がずっと可愛くて魅力的だよ。」

「…・・・ユウ。いつの間にお世辞なんか覚えたの？」

紫苑。僕は紫苑と一緒に成長してるんだよ。僕の成長は、紫苑の成長と同じ。

「あたしと一緒に・・・。ユウ。」

なに？

「ずっと一緒にいてくれる？」

うん。紫苑の幸せが絶対確実になるまで。

「あたし、もう誰も好きにならない。」

え？

「心変わりする人間なんて、いない。ユウが一緒にいてくれればいい。」

そんな・・・。

「あたしが誰とも幸せにならなければ、ユウはずっと一緒にいてくれるんでしょう?」

「・・・そうだよ。」

「だったら、それでいい。ユウだけいてくれれば。」

紫苑。僕はここでしか会えない。それに、目が覚めているときには紫苑は僕のことは知らないんだよ。」

「それでいい。・・・ユウ。」

なに?」

「あたしの幸せが確実になつたら、ユウはどうなるの?」

僕は・・・消える。」

「消える?」

「うん。いなくなる。」

「ダメ!」

でも。

「ダメ。いや。ユウがいなくなつたら、一人になっちゃう。」

ならないよ。そのときは紫苑は誰かと幸せにならなくて。

「そんな人、いない。人間の愛情なんて、信じない。」

紫苑。

「ユウがいればいい。ずっと一緒にいて。」

・・・・ずっと一緒にいるよ。紫苑が誰かの愛情を信じられるようになるまで。

「それはきっと、あたしの一生涯と同じ・・・。」

・・・・・

紫苑。

きみの悲しい気持ちが僕に流れ込んでくる。

誰も信じられないという、今のきみの気持ちはよくわかる。

誰のことも好きにならないといつ決心も。

だけど。

僕はきみの現実ではないんだよ。

目覚めているときには話すこと、触れることもできない存在。

・・・存在することすら忘れている。

だから、紫苑、一人ぼっちと同じなんだよ。

それには、紫苑。

僕たちはあんまり長く一緒にいない方がいいみたい。  
あんまり長く一緒にいると、僕たち恋風が・・・その人間を愛する  
ようになってしまふから。

そうなると、僕たちは仕事をするのが辛くなってしまう。自分がそ  
の人に離れたくなくなつて。

その人間が相手を見つけられなければ僕たちは一緒にいることがで  
きるけど、その人間の現実は・・・淋しいよ。

もちろん、世の中には一生一人の人もいる。

だけど、紫苑はそれを今、愛情が信じられないからと言つて決めて  
しまつてはダメだよ。

紫苑。

僕はこれからも、紫苑が幸せになれるように、仕事をするよ。  
きみの心の傷がふさがるまで、ちょっと時間がかかるかもしない。  
でも、僕が慎重に計画を練る時間があつた方がいいから、きっとち  
ょうどいいね。

それまでは、紫苑が淋しいときに、夢の中に会いに行くよ。

紫苑。待つて。

#### 4 秋のかおり

ふわ、と、少し甘い清々しい香りが風に乗って通り過ぎる。

あ。

何だつけ、これ？

ほら、毎年、秋の最初に香る花。  
いつの間にか咲いて、一週間くらいで、あつといつ間に終わってしまう。

朝の交差点。

信号待ちで先頭に並んだまま、懸命に窓に出でたりとする。

あれだよね、オレンジ色の小さく花がいっぱい咲くやつ。

雨が降るとその花が一気に落ちて、木の下がオレンジ色に。。。

「金木犀きんもくせい・・・。」

それだ！

・・・・・あれ？

あたしの疑問に答えるよつい右上からやつと聞こえた声は、自分の中であるはずはない。

隣の男の人・・・？

！

やばい！

目が合っちゃった！

慌てて下を向きながら、ほんの一瞬目に映った相手の顔が、ビル群の隙間から覗く青空を背景に頭の中で再生される。

きれいな弓なりの眉と一重瞼の目、あまり高くない鼻と気まずそうに唇を噛むように結んだ口。セットしていないうようなふわふわした髪型で、どちらかというと可愛い感じ？

そつと窺うような様子は、たぶん、あたしも同じだったはず。

その直後、信号が青に変わり、その人の脚が先に動き出す。ダークブルーのスース姿は、あつという間に同じような後ろ姿の波に紛れてしまう。

・・・びっくりした。

あんなにピッタリのタイミングで聞こえるんだもの。  
まるで、あたしが考えていたことが分かつたみたいに。  
だけど、独り言だったんだよね？ あんなに気まずそうな顔をして。  
見たりして、悪いことしちゃった。

勤務先のビルに着くまで、その人の顔を何度も思い出してしまひ。

若い人だから、独り言を聞かれたりして、すじぐ恥ずかしかつただろうな。

でも、隣で同じことを考えていたなんて、なんとなく可笑しい。

くすっと笑いそうになつて、慌てて顔を引き締める。  
思い出し笑いつて恥ずかしいよね。

「おはよひ〜や〜こます。」

「おはよう。」

それぞれの部屋に向かう廊下で女子社員たちが明るくあ〜さつを交わす声が、朝らしい雰囲気を醸し出す。

「谷村さん、そのカーディガン、綺麗な色ですね。」

パソコンのスイッチを入れたあたしに話しかけて来たのは、右隣の席の金子美乃里さん。

2年後輩で、今年の春に就職したばかり。  
よく気が付く明るい人で、あたしはとても助かっている。

「ありがと！ 気に入つて衝動買いしちゃつたの。」

薄紫と水色の中間くらいの色。淡い青紫？

今日は白いブラウスとチャコールグレイのスカートに合わせてみた。

「谷村さんの雰囲気にピッタリですよ。そのせいですか、楽しそうなのは？ それとも、何かいいことありました？」

「いいことって言つか、面白こと」がね・・・。」

交差点での「お〜」話を話し始めると、またもや「金木犀」という言

葉が出てこなくて焦る。

あたしの頭、すでに老化が始まっているのでは……？

「えー・・・と、あの、ほら・・・金木犀！　あー、よかつた！」

ほつとしたら、またあの男の人の顔が浮かんできて、思わず「ふつ。」と笑ってしまった。

「谷村さん、面白い話つて、話す本人が笑つてたら、聞く人はあんまり面白くなくなっちゃうんですよ。」

ちよつとつまらなそうに拗ねた顔をする金子さんはとても可愛い。色白で、少し尻の下がった大きな目に小さな鼻と口、柔らかいクセのある髪を背中の中ほどまで伸ばしている。

仕事中は一つにまとめているこの髪は、ほどくと肩から下のあたりがくるくると巻いて縦ロールみたいになるのだ。

今はショートボブにしているあたしの真っ直ぐなコシのない髪とは大違い。

大違いいといえば髪だけじゃない。

あたしはあごのどがつた小さめの顔に、端がきゅっと上を向いた口元がチャームポイントだつて言われたことがある。

でも、それがきつぱりして頑固な性格を表してるとて言う人の方が多い。

金子さんは柔らかい印象どおり、穏やかで素直な性格だ。

それに体型も、金子さんは緩やかなカーブを描く女らしい体型だけど、あたしは痩せ型で全体的に真っ直ぐな感じ。

「本当にびっくりしたよ、あんまりタイミングがよかつたから。もしかして、自分が声に出して『ええと、ほら。』とか言ってたんじ

やないかって、慌てて思い出してみたりしてね。」「

「谷村さん、声に出さなくとも、そんな顔をしていたんじゃないですか？」

「え？ まさか、そんな・・・。」

人がいっぱいの交差点で、自分がジエスチャー混じりに首をひねっている姿が目に浮かんでくる。

「やだ！ いくら何でも、それはないよ！」

「うふふ。冗談です。でも、相手の男の人、どんな人でした？」

「どんなって・・・普通の。」

「普通？」

「あたしに独り言を聞かれたから何とも言えない表情をしていたけど、短い髪でスーツ着た若い男の人だった。」

「・・・たくさんいらっしゃですね。」

「うん。あつという間に人込みに紛れちゃった。」

「なんだ、残念。」

「どうして？」

「もしかしたら、谷村さんの運命の出会いだったかもしれないのに。」

ただの“普通”的印象だなんて。」

ギュウッと心臓をつかまれたような気がした。  
あたし、おかしな表情をしてないだろうか？

「そんな・・・」ことが、その辺に転がってるわけないでしょ？  
さあ、仕事仕事。今日も忙しくよ。」

パソコンに向かいながら、胸がドキドキしている。  
気付かれないように深い呼吸を何度も繰り返して、自分を落ち着かせる。  
歯を食いしばりそうになるのをいはると、じわじわと頭が熱くなる。

・・・あれから3年も経ったのに。

大学時代の桜井先生とのことは、自分の中すでに解決済み。  
だけど、あれ以来、あたしは恋をすることをやめた。  
やめた、というよりも、怖いのだ。

誰かを好きになると考えただけで、桜井先生に裏切られたときの記憶がよみがえつてしまつ。

記憶・・・というか、そのときの状態。

胸が痛くなつて、動悸が激しくなつて、目まいがして、涙が出そつになつて、手が震えて・・・。

こんな状態では、万が一、誰かに恋をしても、その間中ずっとその記憶につきまとわれることになる。

うまく行つても、自分がいつ捨てられるかとビクビクしながら過ご

すことになる。

精神的にも、身体的にもキツ過ぎる。

だから・・・もう、誰のことも好きにならない。

すつきりして、いいじゃない？

嫉妬とか、三角関係とか、面倒なことは何もない。

仕事は面白いし、友人には男女を問わず恵まれている。今的生活に大満足！

恋ができる人はすればいい。

でも、あたしには無理。あたしは恋なんてしない。

午前中に急ぎの仕事が入つて、仕上がったのがお昼休みが終わると同時にだつた。

課長が「悪いね。」と労つてくれて、急がないで昼休みを取つていよいよ言つてくれた。

・・・どうに行こうかな。

お昼休みを過ぎた時間帯だから、いつもは混んでいる店でもOKだ。秋のさわやかな晴天が気持ちよくて、まわり道をして公園の中を抜けていく。

オフィス街のまん中だけど、緩やかな起伏のある芝生の原っぱとちよつとした林、無造作に咲いているような季節の花に囲まれた遊歩道があるかなり大きな公園。

コンビニで買つて、ベンチで食べるのはどうかな？  
うーん、一人じゃちょっと恥ずかしいか・・・。

遊歩道をぶらぶらと歩きながら考える。

気持ちが良くて、足取りはゆっくり、視線は空へ

。

あ！

こんなにのんびりしてたら、お昼を食べる時間がなくなっちゃう。  
行かなくちゃ。

いつも混んでいて入れないカフェに決めて、足を速める。

前を歩く男の人を追い抜いた瞬間。

「紫苑。」

「え？ は、はい！」

つぶやくよつと後ろから名前を呼ばれて振り向くと、そこで田丸を丸くして立っていたのは“金木犀”的男の人だった。

今朝の人に間違いないよね？

知り合いだつたんだ。

でも、・・・誰だろう？

大急ぎで記憶をたどる。

顔では分からない。年は同じくらいだと思つけど。  
今朝見たとおり、普通のスーツ。

学校時代の知り合いでは・・・ないと思つ。  
持つてている黒いビジネスバッグも普通によく見かける感じだけど、  
もう一つの大きな薄いケースは、何か図面が入つていてる？ ってこ  
とは、設計とか、不動産関係・・・なの？

だめ。

思い出せない！

慌てているあたしの前のその人は、目をぱちくりさせたまま、あた  
しを見ている。

こんなに驚いてるつてことは、ものすごく久しぶりつてこと？  
それとも、ここで会つことが予想外だつたから？  
でも、こんなに一瞬で、あたしのことがわかつたなんて・・・。  
もう、訊いちゃつた方がいいや！

「あのう・・・『めんなさい』。どうでも会つしたのか思い出せな

いんですか？・・・。

「え？」

あたしの質問にハツとして、その人は何度も瞬きをした。

「え、ええと、・・・今朝？」

・・・今朝？

え？

つてことは、やっぱり初対面・・・だよね？

「え？ あれ？ あの、名前を今・・・？」

しかも、下の名前だよ？！  
なに？！

もしかして、ストーカー・・・？

「名前？」

あれ？

首をかしげてる？

・・・やだ！

もしかして、聞きちがい？！  
みつともない！

「うう、じめんなさい！ わたしの聞き違い・・・。

そのとき、その人はふとあたしから目を離し、あたしの肩の後ろの方を見て、何かを了解したように明るい表情をした。  
それからもう一度、あたしを見て。

「紫苑さん？」

今度は聞きたがいじゃない・・・よね。

「・・・はい。」

うなずきながら返事をする。

間違いなくあたしの名前だけど、何故知っているのか納得できない。  
やつぱリストーカーでは・・・？

爽やかな普通のサラリーマンに見えるけど、見た目だけじゃ、どんな人かはわからないもんね。

もう少し距離を取ろうと足を動かしかけたところで、その人がにこにこしながら、もう一度、あたしの肩越しに何かを見たことに気付いて振り向くと

紫苑の花が揺れていた。

遊歩道から少し下がったところにたくさん。

細い緑の茎の先に薄紫色の花びらの小さな花をいっぱい咲かせて、ゆらゆらと風に吹かれて、

「驚かせてすみません。僕、独り言を言つクセがあつて。」

恥ずかしそうに頭をかきながら、その人は下を向いてそんなことを

言つ。

独り言・・・。

つまり、名前を呼ばれたと勘違いしたのはあたし?

恥ずかしい!

しかも、ストーカーの疑いまでかけたりして!

「あのひ、」  
「おひがひ、すみません! ただの独り言に反応したり  
して・・・!」

慌てたあたしは不用意に「ただの独り言」なんて言つてしまい、そ  
の人はまた今朝みたいな気まずい顔をする。

ああ、もひ!

あたしつつて、どうしてこうなんだろ?!

他人に聞こえるような独り言つて、恥ずかしいに決まってるのに、  
わざわざ声に出して言つちやうなんて。

「あ、あ、あ、あの、」  
「めんなさい! 失礼しました!」

もひ! れ以上は無理!

「めんなさい!」

頭を下げて、振り向いて走り出す。

「めんなさい!」

一日に2回も気まずい思いをさせたりして!  
きっと、もひ会こませんから大丈夫です!

「……といつわけで、ダッシュで逃げて来たの。」

「はははー！ 紫苑らしくて笑えるー！」

社内の友人たちと来ている居酒屋。  
テーブルの向かい側で龍之介が大きな声で笑う。

「紫苑って、感覚器官と口が直結してゐみたいだもんな。」

「・・・何よ、それ？」

「つまり、見えたり聞こえたりしたことに対して、脳を通さないで  
口が動くってこと。」

「何言つてんの？ ちゃんと返事とか会話になるんだから、脳で反  
応してゐに決まってるじゃん！ むしろ、反応が速いってことでし  
ょ。」

「紫苑の場合、ちょっと惜しいんだな。反応する前に、 “言つて  
いいことかどうか考える” っていうのがないと、大人とは言えな  
いよなあ。」

「ふん！ 龍之介だつて、自慢できるのは体力だけのくせにー。」

龍之介 高木龍之介は同期入社の友人。  
入社時から不思議と気が合つて、お互に遠慮なく何でも言い合え  
る間柄。

なぜか最初から、あたしのことを前で呼んでくる。だから、あたしもそうしている。

“龍之介”なんて文豪と同じ名前でありながら、まるっきり体育会系人間で、忙しい毎日でも筋トレやジョギングを欠かさないらしい。

背が高いし、今みたいにワイシャツ姿になつていると、がつちりした体格であることがよくわかる。

ツンツン立てた短い髪と、切れ長な目のかよつと精悍な顔つきは、サバサバした性格とよく合つてゐると思つ。

「わたしは谷村さんに『運命の出会い』じゃないかつて言つてゐんですけど、谷村さんは笑い飛ばすだけなんですよ。」

午後にあたしから話を聞いていた金子さんは、隣で不満げな口調。肩からくるくると胸元にかかる長い髪と、からし色のリボンブラウスが女の子らしくとても可愛い。

「紫苑にはそんなのあり得ないな！　あつたとしても、紫苑の性格じゃ、出合つた途端に、相手がびっくりして逃げて行くだけだろ。」

「

ガハハ、と豪快に笑つて否定されたことに「失礼な！」「なんて怒つたようなふりをしながら、心中でほつとする。

普通の女の子の金子さんがロマンティックなシチュエーションに憧れるのは当然で、あたしもある程度は普通の女の子の反応をしなくちゃいけない。

でも、本当にそんなことが起るのはイヤ。怖い。

考えただけで、ドキドキして、手が震えそうになる。

だから龍之介が、あたしにはあり得ないと保証してくれたことが、あたしにはとても有難いのだ。

「だけど、珍しいね、男で植物に気が付くの?」

斜め向かいで一年先輩の真鍋さんが口を開く。

「俺なんか、チューリップとかひまわりとか、ありきたりの花しかわからないよ。だいたい、紫苑っていうのが花の名前だつてことも、今さら気が付いたくらいだから。」

「まあ、花屋さんでメインになるような花じゃないですか。」

「谷村さんのこのカーディガンみたいな色の花なんですよ。ああ・・・・きつと、金木犀さんには、紫苑の花を背景に立っている谷村さんの「」が、花の精みたいに見えたに違いません!」

金子さん・・・。

夢見る女の子全開! って感じ?

胸の前で手を握り合わせて目をキラキラさせると、あなたの方が妖精みたい。

あんまり可愛らしくて、あたしも思わず微笑んでしまう。一緒に来た男性陣も見惚れてぼんやりしちゃってるし。

だけど。

「“金木犀さん” ?」

「はい! あたしが名付けました。また会いそつた気がするので、その時のために。」

「ふうん。」

いへり何でも、そんなに偶然は重ならないでしょうね。

「あ。この通りだよ。ほら、金木犀。」

あたしの住むマンションへの道を歩きながら、龍之介に教えてあげる。

「え？ ビー？」

鼻をくんくんさせながら左右に顔を向ける龍之介の様子が可笑しい。

「龍之介、しかめつ面になつてるよー。」

あたしが笑つても、龍之介は平氣な顔で「全然わからないな。」と  
言った。

飲み会で一緒になると、龍之介は必ずあたしを送ってくれる。  
これは、ちょうど2年前にあたしが一人暮らしを始めてから、ずつ  
と習慣になつていてのこと。

2年前、引っ越しして半月ほど経ったころの飲み会がたまたまいつも  
より長くなり、電車の中で、あたしはつづかりしていた自分を心の  
中で叱つていた。

その何日か前に、残業で駅に着くのが10時過ぎになつたとき、途中で男にあとをつけられたのだ。

気が強いあたしでも、さすがにそういうのは恐い。

住宅街のそのあたりはその時間帯になると人通りが少なくて、塀に囲まれた家が続いている道は、逃げ場所がない気がした。

マンションまでついて来られるのが恐くて、少し手前の街灯の下で勇気を出して振り向いたら相手が逃げ出してくれたので、その隙にあたしも走って帰つたのだった。

これからは残業も早めに切り上げようと思っていたのに、その日は先輩の瑠璃子さんの結婚話とこいつおめでたい話題で盛り上がり、遅くなってしまった。

振り返られて慌てて逃げるような相手だからもう出るわけないよと自分を励ましているときに、乗り換え駅で、龍之介が一緒に帰ると言つたのだった。

「この時間だとバスの本数が少ないから、そつちから歩いて帰つた方が早いんだ。」

どれほどほつとしたことか。

引っ越し先がその部屋に決まつたとき、龍之介が近くに住んでいたとは聞かされていた。

そのときは「ふうん」「へらいしか思わなかつたけど、こいついう状況になつてみると、本当にありがたい。

龍之介はあたしのマンションよりも少し奥まつたところに家族と住んでいて、こっちの駅からだと、あたしのところをまわつて徒步20分くらいだということだった。

通勤では、一つ先の乗り換え駅までバスで一直線に出ているけれど、大学まではこちらの路線を使うことが普通だったそうで、このあた

りの地理には詳しい。

その日、ほっとしたあたしは、龍之介に対するいつもの気安さで、  
帰り道であとをつけられたことをペラペラとしゃべってしまった。  
それからずっと、お酒の会で一緒になったときには、龍之介はあた  
しを送る役割を引き受けている。

何度か、もう大丈夫だからと断ろうとしたけど、

「何かあつたら寝覚めが悪いし、ビリせ通り道だから。」

と言つて、本当は少しまわり道らしいのだけれど。

はじめは、龍之介に期待されてたりしたらちよつと困るな、と思つ  
たこともあつた。

でも、何度も送つてもらつたあとも龍之介の態度が変わらなかつた  
から、あたしは龍之介の親切をありがたく受けることにした。

龍之介があたしを送るのを知つた職場の人たちがそれを当然のこと  
と受け止めていて、変に気を遣つてきたりしなかつたので、大人の  
世界ではこれが当たり前なんだと納得した。

そして、2年。

送つてもらうのは、いつたい何回目だろう？

いつもとおり、マンションの前で、あたしが2重のガラスドアを  
通り抜けるのを見届けてから、軽く手を上げて龍之介は帰つて行く。

そういえば、まだ龍之介には好きな人はできないのかな？  
彼女ができたら、さすがにこれはお終いにしなくちゃね。



## 6 波紋（前書き）

サブタイトルが単語一つの回は、ユウガ登場します。

紫苑。

今日、僕はきみの人生の池に小さな小さな石を投げた。

紫苑の小指の爪くらい小さな石だけど、それは小さな波を作つて、だんだん大きくなる輪を何重にも描きながら広がっていく。

桜井先生のことがあつてから今までの間にも何度か試してみたけど、紫苑は気付かないか、気付いてもずっと無視してきたね。

紫苑が“誰のことも好きにならない”って、固い決心をしていたから。

だけど

。

時間は悲しみを抱えた心に優しい。

それに、紫苑はいつも優しい人たちの中にいただろう？  
そういう日々の中で、紫苑は少しずつ変わってきている。

今は、誰かを愛せるはず。  
その人を信じることができるはず。

紫苑はそれに気付かないだけ。

僕は紫苑のことをずっと見ていた。

家族を心配させないために悲しい心を隠して、お母さんを手伝つて  
いた紫苑。

大学でも笑顔を絶やさなかつた紫苑。

・・・大学の友達はみんな、紫苑と桜井先生のことを知つていたか  
ら辛かつたよね。

就職して、紫苑の過去を知らない人たちに囲まれるようになつたと  
きには僕もほつとしたよ。

お母さんが健康に太鼓判を押されて、一人暮らしを始めた紫苑。

職場の同僚からの何気ない「彼氏は?」という質問に、辛い気持ち  
を隠して、明るく返事をしていた紫苑。

はきはきした受け答えで、電話の応対ではいつも褒められている紫  
苑。

苦手だった事務機械の扱いも頑張つて、今ではみんなに頼られるほ  
どになつたもんね。

素直で、親切で、他人の苦手なことをわかつてあげることができる  
優しい紫苑。

たくさんたくさんいいところがあつて、素敵な女の子になつた紫苑。

僕が投げ込んだ小石。

波紋が広がっていくよ。とても小さいけれど、何重にもなって。  
今までに投げ込んだ小石にもその波がぶつかって、また新しい波も  
生まれるはず。

僕はもう少し頑張るつもり。

紫苑がちゃんと気付くよう

ちゃんと気付いて、選べるよう

頑張るって言つても、昔みたいに闇雲ではなく、慎重にな。  
僕だって、紫苑と一緒に成長しているんだよ。

紫苑。

僕の大切な紫苑。

僕はこれを最後のプレゼントにしたいんだよ。  
最後で最高の。

そつじやないと、僕は・・・。

だから、紫苑。

ちゃんと気付いて。

人を愛することを怖がらないで。

僕の、大切な、大切な紫苑。

紫苑が幸せになる日まで、僕はずつとそばにいるよ。  
そして、紫苑が淋しい日には、夢の中に会いに行くよ。

朝の通勤時間帯の駅は、人の流れに乗るのがたいへん。もう2年半も同じ駅で降りているのに、未だに人とぶつかったり、前の人への踵を踏んでしまったりする。

自分がそういう人間だつて分かつてているから気を付けてはいるんだけど、それが却つてよくないのかな？

それとも、そういう運を持つて生まれて来ているんだろうか？

改札を通るために、バッグからパスケースを取り出したところで、前を横切つた男の人の腕が勢いよく手にぶつかつた。その勢いで、パスケースが手から離れて飛んでいく。

「あ。」

急いで振り向いて地面を見たら・・・ない？

落としてもすぐに目に付くように、鮮やかな水色を選んだのに？どうしよう？！ 改札から出られない？！

混雑する改札口の前で邪魔になっていることが分かつているから、頭の中が軽いパニックを起こしかける。

そのとき。

「はい、どうぞ。」

声とともに、差し出された水色のバスケース。

「よかつた！　ありがとうございます！」

差し出されたバスケースを握りしめ、心からお礼を言って顔を上げると・・・金木犀さんが微笑んでいた。

あれ？

あれから何日か経つてのに、あたし、しつかり覚えてる・・・。

「おはようござります、紫苑さん。」

金木犀さんの声は、きつきりと引き絞った弓のようなイメージ。ちよつと軋んだように硬い、それでいて軽やかな明るい声。  
くすくす笑つて、改札口を並んで抜けながら、金木犀さんが続ける。

「ぼーんと飛んで来たんです。ちょうど僕のところへ。ナイスキャッチ、でしたよ。名前が見えて、紫苑さんがきょろきょろしているのが見えたので。」

あらら・・・。

けつこうな勢いで当たつて行つたもんね、あの人。  
それにしても、なんていう偶然なの。

「ありがとうございました。」

もう一度、あたしがお礼を言つと、金木犀さんは「いえいえ。」と爽やかに笑つた。

目尻に笑い皺ができるその笑顔に親近感を覚えて、心の中がほっこ

りする。

前方の信号が点滅するのを見て、金木犀さんは「じゃあ、お先に。」と、横断歩道を走つて渡つて行つた。

その後ろ姿を見ながら、なんとなく楽しい気分になつてゐる自分に気付く。

何人かの頭を越えて宙を舞う水色のパスケースが目に浮かんで、笑いそうになつた。

本当に、なんていう偶然！

職場に着いてから、金子さんに「今朝ね、」と、いつもの失敗談を話すのと同じように話し始めてから気が付いた。

彼女のことだから、また“運命の出会い”を持ち出すに違ひない。

でも、金木犀さんのことば、そんな風に言われたくない。

だから、拾つてくれたのは知らない男の人つてことにした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

傘を持つて出歩くのは得意じゃない。

階段でひっかけたり、お買い物をするときこそ、傘を気にして小銭を落としたりしてしまひ。

他人の傘も気になる。

たまに傘を横向きに握つて持つてている人がいて、階段でそういう人の後ろを歩いていて、顔をつつかれそうになることがあるから。それに、混んでいる電車の中で、隣の人が床に立てたつもりの傘があたしの足の上だつたつていうこともあった。

すぐに謝ってくれたけど、パンプスを履いていて、足が靴に覆われていらない部分だったから、ものすごく痛かった！

だから、傘を持ち歩かなくちゃいけない日は嫌い。

雨のお昼休み。

金子さんと外でお昼を食べたあと、一人で銀行のATMコーナーに寄つた。

いつものとおり、やっぱり傘の扱いがギクシャクして、操作する間、ATMに立て掛けたいた傘が倒れそうになつたりする。お財布にお金を入れるのに気を取られて忘れた傘を、次に並んでいた人に呼び止められて渡された。

あーあ、もう。

雨の日に、銀行なんか寄るんじゃなかつた。

濡れている床で滑つて転びそつになつたことを思い出して、足元を見ながら慎重に出入口に向かう。

と。

数歩前に立っていた人のステッツの足元に、はらはらと一万円札が何

枚か・・・。

あれ？

あたしみたいな人つて、ほかにもいるんだ。

その人はすぐにしゃがんでおれに手を伸ばす・・・と、今度はしゃがんだせいで、腕にかけていた傘がはずれて倒れた。あたしの前に。

あらら、気の毒に。

いうことって、よくあるよね。

こっちを気にしていると、あっちがダメ、ってね。

自分と重ね合わせながら、転ばないよう気に付けて、倒れた傘を拾い上げる。

「あ、すみません。」

という声でその人に目を向けたら、

「「あ。」」

・・・金木犀さんだつた。

お互に顔を見合させて、少し驚きながら立ち上がる。  
またしても、こんな偶然。

「あの、どうぞ先にお金をしまつてください。」

「あ、はい。」

金木犀さんが大きな封筒を腕にはさんで一万円札をお財布に入れながら、

「傘を持つてると、どうもうまく動けなくて。」

なんて、恥ずかしそうに言い訳して。それから荷物を持ち直して、

「ありがとうございました。」

と、あたしから傘を受け取った。

「わたしも雨の日は、よくお金を落としそうになります。スーパーで小銭をまき散らしたこともあるし。」

金木犀さんの照れた様子に楽しい気分になり、ポンと、そんな言葉が出てしまう。

言つてしまつてから、こんな風に話するよつな間柄じゃないんだつけと思つたけれど、もう遅い。

かと言つて、今さら氣まずい顔をするのも変だよね？　このまま無

邪氣な顔をしていた方がいい・・・？

ほんの一瞬の間に、そんな思いが駆け巡る。

「そうなんですか。僕だけじゃないんですね。」

金木犀さんの言葉は、あたしの心配を簡単に払いのけるよつな楽しげな笑顔と一緒に。

よかつた、気にしないでくれて・・・。

ほつとしたら、昼休みの残り時間が気になつて。

「じゃあ、失礼します。」

小走りに職場に向かいながら、自分が微笑んでいることに気付く。

こんなに偶然が続くなんて、なんだかちょっと面白い！

でも、近くの会社に勤めているなら、こういつつて普通のことか。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

今日は朝から何もかもが順調だった気がする。

資料作りも、打ち合わせもサクサク進んだし、課長からケーキの差し入れまであった。

6時過ぎに、ロッカーで一緒になった同期の知佳ちゃんちかと美歩みほと一緒に外に出たら、ビルの間の暗い空で、満月まであと少し足りない月が明るく輝いていた。

「あ。月が。」

「ああ。今日つて、十三夜のお月見だったよね。」

物知りの知佳ちゃんが教えてくれた。

「満月じゃなくても、お月見つてあるんだね。」

知らなかつた。

でも、本当にくつさりと明るい日。  
きれい。

「よひ。お疲れさま！」

後ろから追いついてきた龍之介の元気な声。  
風流とはまったく縁がなさそうだよね。

「あ、高木くん。お疲れさま。」

知佳ちゃんは龍之介のことを「高木くん」と呼ぶ。美歩は「龍之介くん」だ。

この呼び方を聞くたびに、一人の性格がよく出ているなと思つてしまふ。

知佳ちゃんは何事も節度をわきまえている人で、職場では良好な人間関係を築き、お酒の席でも乱れることがない。  
だからと言って、ただ面白なのかといふとそうではなく、あたしたち気を許し合っている間ではけつこう毒舌だ。  
ただ、その毒舌も、他人への恨みや妬みがこもっていないから、笑つて聞き流せるところがいい。

美歩はグラマーな美人で、男の子にちやほやされるのが好き。  
だけど、自分から誰かに色目を使うわけじゃなくて、単に男の人には褒められるのが嬉しいのだ。

美人だから合コンの誘いはたくさん来るし、たくさん参加している。  
でも、決まつた彼氏はいない。

そのまま4人で話しながら駅へと向かう。龍之介の隣に美歩、その

後ろから知佳ちゃんとあたしが並んで、女の子3人が龍之介を取り囲むような状態で。

あつという間に、お月さまの話題はどこかへ追いやられ、噂話や美味しいものの話で盛り上がる。

気さくな龍之介は、女子3人の中に入つても全然平気。龍之介の少しハスキーな低い声に女の子たちの笑い声が重なつて、けつこう賑やかな集団だ。

「あ、もう来てるな。」

改札口が見える場所まで来たとき、龍之介がつぶやいた。

「待ち合わせ?」

「ああ、うん。」

ん?

なんとなく上の空に見えるのは、もしかして?

「ねえ、彼女?」

どの人だろう?

待ち合わせっぽい人はたくさんいるけど

「違うよ。まつたく、すぐにそいつこと言つんだから。」

呆れた顔をされて、あたしたち3人とも“なーんだ”と田で囁きながら顔を見合させる。

その横で龍之介が笑いながら言った。

「大学の友達。なかなかイケメンだけど、紹介してほしいか?」

「え? イケメン? 龍之介くんの友達なのに?」

美歩が遠慮なく突っ込む。

「俺の友達はイケメンぞろいだぞ。俺を含めて。」

そんなやりとりをしているうちに、すでにその相手の前まで来ていたらしい。

「女の子に囲まれて登場なんて、派手だなあ、龍之介は。」

笑いを含んだテノールで話しかけて来た人。

龍之介のうしろから覗いたら・・・あらら、本当にかつこいいかも。

龍之介と同じくらい背が高くて(つてことは185cmくらい?)、濃いグレイのスーツ。ネクタイは黄色に何か小さな模様。きちんと整った髪に黒縁のメガネは頭が良さそうで、姿勢がいいせいか、持つて生まれたものか、上品でお金持っぽい雰囲気。

医者とか弁護士とか・・・そういうお仕事の人?

顔が、とかいう問題じゃなくて、全体がひとまとまりにかつこいい人。

知佳ちゃんと美歩が驚いて黙った。

あたしも、龍之介とはまったくイメージが違うお友達の登場に驚いた。

「龍之介は大学でも、よく女子に囲まれてたじやないか。」

あれ？　「の声・・・？」

「『うちのメガネが原田諒<sup>つよし</sup>で、もう一人が秋月優斗<sup>あきづき ゆうと</sup>だよ。』」

龍之介があたしたちに友達を紹介してくれている。

もう一人？　・・・と思いながら、さっきの声で浮かんだ引き絞った『』のイメージに、鼓動が大きくなっている。

まさか、だよね？

いくらなんでも、そんな偶然・・・。

あるわけないよー

と、龍之介のうしろから出て、声の方を見る。

「あれ？　紫苑さん？」

見つめ合った相手は・・・やつぱり金木犀さん。

秋月優斗さんっていう名前なんだ・・・。

## 8 木枯らしの吹ぐ日（一）

あつという間に11月になつて、きのうから木枯らしが吹き始めた。朝、マンションを出ると、冷たい風がビューッと吹いて、髪の毛をかき乱す。

街路樹や公園の木々の落ち葉が、あつという間に飛ばされて行く。

今日の夜、龍之介たちと出かけることになっている。

龍之介たち・・・龍之介と原田諒さんと秋月優斗さん、それから知佳ちゃんと美歩とあたし。

先月、原田さんと秋月さんに初めて会つた日は、ご挨拶だけでお別れした。・・・秋月さんは“初めて”じゃないけど。龍之介も、ほかのみんなも、あたしと秋月さんが顔見知りだと知つて、ものすごく驚いていた。

そのあと、誰から言い出したのかはよくわからないけど、龍之介が飲み会を設定すると言つて来た。

“飲み会”つていうよりも、“合コン”に近いような気がする。合コンにしては、ちょっと人数が少ない？でも、知佳ちゃんか美歩が、3人（一応、龍之介もね。）の中にお目当ての人人がいるんだつたら、協力してあげないとね。

あたしは、秋月さんと話ができるなら楽しいかな、と思つている。決して恋愛感情的な意味ではなく、普通にお友達として。

あれからも、秋月さんは何かとよく出くわす。

秋月さんの勤め先が入っている建物がうちの会社が入っているビルの3軒先だから。

9月に勤め先の設計事務所が移転してきたと言っていた。  
それがきっかけで、先月、龍之介たちと久しぶりに集まつたそうだ。

朝は利用している電車があたしと同じらしくて、週に3、4回は改札口のあたりで会う。

お昼を食べに行つたところで隣に座つていたこともあった。このときは、一緒にいた金子さんに秋月さんを紹介した。  
仕事で外出したときにすれ違うこともあつたし、一度は仕事帰りに乗り換える駅で買い物をしていたらバッタリ・・・ということもあつた。

最初は会つ度に一人して驚いていたけれど、最近はもう慣れた。

朝は急ぎ足で話しながら歩くこともあるし、それ以外では「こんなことは」と声を掛け合うとか、ただ会釈して通り過ぎることもある。  
でも、まだゆっくり話をしたことはない。

だから、今日はちょっと楽しみ

お昼休みにあたしの席の後ろにある打ち合わせ机で、金子さんと一緒に、近所のパン屋さんで買って来たクロワッサンサンドを食べて、いるところに龍之介がやつて來た。

龍之介がうちの課に来るのはよくあること。

仕事の用事でももちろんだけど、昼休みや帰り際にちょっと来て、

愚痴を言つたり、ただのんびりしていたりする。

たまに空いている椅子がないと、あたしと金子さんの席の間にあるスチール製のゴミ箱に腰かけていることがあって、うちの係長に「高木が座つたせいで、そのゴミ箱が歪んだ。」とかからかわれている。

今日も龍之介は、あたしたちの向かい側に坐つたと腰かけて、用件を切りだした。

「年末、スノボに行かないか？ 真鍋さんとか竹田あたりと話が出てるんだけど。」

あたしと金子さんの両方に言つていろひじー。

「年末？」

「うん。今年は土日が入つて仕事納めが早いから、休みに入る12月27日の朝早く出て2泊3日。」

真鍋さんも竹田くんも、あたしたちがよく一緒に飲みに行く人たちだから、メンバー的には問題ないけど・・・。

金子さんと顔を見合わせてから、龍之介に向き直る。

「あたし、スノーボードはやつたことがないんだけど・・・。」

「スキーは？」

「一度だけ。高校のスキー教室で。でも、全然できないのと回り。」

「ふうん。金子さんは？」

「わたしはスキーは家族で何度か。スノーボードは大学生のときには2度ほど。」

「あ、じゃあ、金子さんは行つておいでよ。あたしは無理だから、絶対。」

すると、慌てた表情で金子さんはあたしを見て、

「谷村さんが行かないなら、わたしもちょっと……。」

なんて言い出した。

そんなに引っ込み思案な子じゃないと思つていたのに。  
まあ、さすがに泊りじゃ、一人は無理か。

「滑れなくても、紫苑には俺か誰かがついて教えるから大丈夫だよ。」

「

龍之介があたしににこにこと勧めてくれるけど、その笑顔を信用していいものかどうか・・・・。

なにしろ、あたしは手先が不器用なだけじゃなくて、運動を含めて、道具を使うものが全部苦手なのだ。たぶん、体の使い方が下手なんだと思う。

龍之介も今はこうやって親切に言つてくれているけど、実際にその場になつてみたら、あまりの酷さに愛想をつかして放り出されるような気がする。

「あたし、本当に無理だと思つ。高校のときだつて、スキーを履いて立つてるのが精一杯で。」

「立てるんなら大丈夫だよ。それに、どうしてもダメだつたら、温

泉でのんびりしてもいいし。」

「え？ 温泉なの？」

「うん。真鍋さんが何度か行つたことがある宿屋なんだ。民宿だからホテルみたいな設備はないけど、安いし、温泉には一日中入れるつて。」

「スキーをやらなくとも、温泉と部屋でのんびりしてればいいのか・・・。それならいいかな。」

隣で金子さんが嬉しそうな顔をする。

本当は行きたいのね。

スノーボードが好きなのかな？

「どうやって行くの？ バスとか？」

「車2台か3台で。」

「車で行くんだ？」

「うん。そこの宿屋だと、車の方が便利なんだって。俺も車を出しから、紫苑は自宅前で捨てるぞ。」

温泉にのんびり入れて、しかも自宅からの送迎付き。  
魅力的・・・。

「行きまじょっよ、谷村さん。」

金子さんが可愛らしく小首を傾げてあたしを見る。

「・・・やうだね。でも、滑るかどうかはわからないよ。」

「大丈夫ですよー。あたしでもできるんですからー。」

うーん。

普通の人と一緒に考えてはダメなのよね、あたしの場合。

「よし。じゃあ、紫苑と金子さんは参加な。」

「谷村さん、せっかくだからウェアを買いに行きましょー。」

「え？ レンタルとかじや・・・？」

「ダメですよ！ 板はいいんですけど、レンタルウェアでみんなと同じだと、困つてるときにお友達に見つけてもらえないですよー。」

「え？ それは困るかも・・・。」

「それに、帽子とか手袋も必要だし。」

「やうか・・・。」

あしたたちのやつとりを聞いて、龍之介がくすくす笑う。

「紫苑。なるべく立つウエアを選んで来いよ。トライ縞とか。」

「あり得ない！ そんなのしかなかつたら、行かないもん。」

「す、」「可愛」のを買こましょひね、谷村さん…」

金子さん、気合に入つてゐるね・・・。

「金子さんなら何を着てもかわいい」と思つたが・・・。」

「大丈夫です！ わたしが谷村さんにピッタリなウェアを見立てますから！」

「うん・・・、よろしくね。」

大丈夫かな？

ものすごく高いものになつて、そのつまでもつ一度とやりたくないなつたりしたら困る・・・。

「紫苑。今日、大丈夫か？」

立ち上がりながら龍之介が尋ねる。

「ああ、うん。」

「じゃあ、7時半に店の前で。」

そう言い残して龍之介が帰つて行くと、金子さんからわいその勢いが消えて、ポカンとしていた。

「どうしたの？」

「え？ あ、ああ、いいえ。」

金子さんは、机に置いていたパックの野菜ジュースのストローをくわえながら、ぼんやりと黙つている。

「どうしたのかな？」

さつきまで、あんなに楽しそうだったのに。

「うあえず、手に持つたままだつたパンを食べ始めたり、金子さんがこいつを向いた。

「あの、谷村さん？」

「はい？」

「あの、今日は高木さんとお出かけなんですか？」

「……今日？あれ？言つてなかつたつけ？龍之介たちと飲みに行くこと。」

「いいえ……。」

「そうか。

秋月さんにはお昼に会つて紹介したけど、そのあとに出た飲み会の話はしてなかつたんだ。

「あのね、この前会つた龍之介のお友達と飲みに行くことになつてるの。」

「お友達……？」

「うん、ほり、この前、お昼に会つた秋月さんともう一人の原田さ

ん。あと、あたしの同期の知佳ちゃんと美歩なんだけど、金子さんも行く？ 龍之介に言えばたぶん……。」

「あ、いえ、いいんです。ふた、その……みんなで行かれるんなら、あたしは、その。」

なんだらうつ、この何か引っかかるような慌てぶりは？  
やつぱり原田さんに会いたいのかな？  
この前、金子さんの前ですぐ寝めちゃったもんね。

「ねえ、龍之介に言つてあげるよ。」

携帯を出しゃつとバッグを持ち上げたら、金子さんに必死の形相で止められた。

「いいんです！ いいんです！ あの、何でもありませんから…」

「せう？」

「はい！ 全然、大丈夫です！」

「やう・・・？ ジゃあ、もし、次があつたら声かけるね。」

「あ・・・ありがとひーじます・・・。」

恥ずかしそうに下を向く金子さん。

かつこいい人に会いたいって、べつに変なことじゃないし、そんなに恥ずかしながらなくてもいいのに・・・。



## 9 木枯らしの吹ぐ日（2）

秋月さんたちと会うのは、いつも乗り換えて使っている駅近くのビルの地下にあるワインの品ぞろえが自慢だといつお店だった。比較的カジュアルなイタリアンレストラン。

知佳ちゃんと美歩は、普段よりもお洒落をしている。浮くと困るから、あたしも少し。

知佳ちゃんは紺のノーカラージャケットに同色のふわりとしたシフォンのスカート。アクセサリーは小さなペンダントだけでシンプルで上品に。

美歩は黒のパンツスーツにラメ入りのインナーを合わせているだけなんだけど・・・。小さめに作られているジャケットのボタンを閉めると胸元がきつそうで、立派なサイズの胸が強調されるように計算されているんじゃないかと思う。アクセサリーが小さいピアスだけだから、ますます視線が・・・。

あたしは・・・、とりあえず、あたしらしく。襟元でリボンを結ぶほぼ白に近いグレイのストンとしたワンピースに桜貝色の薄手のカーディガン。

実を言えば、あたしは胸の開いた服を着られない。肩から胸にかけて肉がないので、襟ぐりが大きく開いた服を着ると、屈んだときに首のところからお腹までのぞけるほどなのだ。

そんな服を着ていたら、向かい側に座った人がびっくりしてしまうと思う。

男の人たちは普通にスーツ姿で、特に変わったところはないかな？

原田さんがあ洒落なカフスをしているのが見えたけど。

「いやつでじりくり見ると、こんなに雰囲気の違う3人が、どうして仲良しなのだろうと不思議になる。」

龍之介は見た目も中身もスポーツマン。

原田さんは知的でクールなイメージ。

秋月さんはここにこと優しい雰囲気。

知り合つたきっかけは、学園祭の実行委員だと聞いている。

見た目のイメージが違う3人でも、話しているところは息がぴったり。

お互に名前で呼び合つていて、いろいろな話題が途切れなく続き、あたしたちのテーブルは笑いが絶えない。

中でもクールそうな原田さんは、高校の理科の先生だった。見た目とは裏腹に実はたいへんな笑い上戸で、教育実習で苦労したところエピソードを面白可笑しく話してくれた。

生徒がわざと原田さんを笑わせようと/orして、いろんないたずらを仕掛けってきたのだそうだ。

「中でも大変だったのは、一番前の席の女の子が、左右色違いの靴下を履いてたときだね。」

「色違い？」

「やつ。白と紺の靴下を右と左に片方ずつ履いて、机の下に足をぽんつて投げ出して座つてたんだよ。本人は何も言わないで平然としてるのに、もう可笑しくて可笑しくて……。」

話していてその場面を思い出したらしく、あははは……と笑いな

がら、ワイングラスに手を伸ばした。

たしかに変だ。

そんないたずらを考え出して、実行しちゃうといひが高校生じへ  
ていいよね。

ワインを一口飲んでちょっと落ち着いてから、原田さんが話を続け  
る。

「その日は担当の先生のほかにも何人かの先生が教室の後ろで見て  
いて、笑うわけにはいかないし、だけど、笑いをこらえてる自分が  
どんな顔をしてるのかと思うと余計可笑しくて。可笑しいのに恐ろ  
しいっていう、強烈な体験だったね。」

「最終回に告白してきた子もいたって言つてたよな？」

「龍之介！ それはべつに。」

やつぱりね。

かつこいい教育実習生って、そういうことあります。

「一人じゃなかつたんだぞ。プレゼントもいくつもあつたし……。」

「

「龍之介！」

龍之介と秋月さんの大きな笑い声と、あたしたちの控え目な笑い声  
が重なる。

コホン、と原田さんが咳払いをして。

「全部、昔の話です。今は私立の男子校ですから心配はありません。」

「

「男の子だつて、危ないんじやないですか？」

美歩が色っぽい流し眼でつぶやくと、原田さんがすかさず

「安全です。」

と断言した。

「秋月さんは？ 学園祭の実行委員を一緒にやつたそうですね？」

知佳ちゃんが秋月さんに話題を振る。

「うううううう、ソッがない。」

「ああ、あのとき……。大変でしたよ、忙しくて。」

秋月さんは、学園祭が近付いて忙しくなった実行委員会のメンバーが、大学の近くだった秋月さんのアパートに勝手に泊りに来るようになつた話をしてくれた。

「最初は諒と龍之介だけだつたんですけど、それが広まって、先輩たちも来るようになっちゃって。」

あら。

「僕が部屋を出るときに先輩が寝ていたりするし、カギを誰かに貸したらどうなるかわからなから、結局、ずっと開けっぱなしになつたせいで、ますますみんなが勝手に……っていうことになつてた

「ああ、思ひ出した！ なつだよ、あのときー、びっくりしたよな。」

「

原田さんが手を叩いて笑いだす。

「あるとき、夜中に諒と一緒に帰つたら、女の子が寝てたんです。」

「女の子？ー」

「はい。僕の部屋は布団やら食べ残しやらでものすごい有り様だつたんですけど、そういうものを隅に寄せて、真ん中で毛布にくるまつて、実行委員の女の子が寝ていたんです。」

「そうそうー 茶色っぽい毛布だつたから、まるでつかいサナギみたいで、そもそも活動いたときには驚いたのなんのって！ あつははははー！」

原田さんの笑いが止まらない。

でも、カギがかからない部屋で一人で寝てるなんて、よつほど疲れていったんだね・・・・。

「仕方がないから僕たちは大学に戻つたんですけど、次の日にその子に訊いたら、『実行委員の休憩用の部屋つて聞いた。』って言われて。そのうえ、ゴキブリが出たつて怒つて、『自分の部屋ならもつときれいにしておきなさいよー』って、すごい剣幕で文句言われちやつて。」

「そうそうー あのとき優斗が言ひ返さなかつたのを見て、ものす

「です。」

「ぐく感心したよ。」

笑っている原田さんの隣で龍之介が言った。

「相手の剣幕に驚いたつていうのもあるけど、あのときはみんな殺氣立つてたから仕方ないな、と思つて。」

「まあ、それも優斗らしいよな。」

やつぱり、雰囲気のとおり穏やかな人なんだ。

それから話してくれた龍之介や原田さんと一緒にやつたといういたずらや失敗の数々には驚いたし、たくさん笑つた。

お酒に強いのかな？ けつこう飲んでも全然変わらない。

ワインの勉強を始めたという知佳ちゃんが、お店の人にくぎながらいろいろ頼んでくれて、少しづつだけど、何種類も飲んだ。たしかに一杯ずつ比べてみると、どれも違うのがわかる。でも、そろそろあたしは止めた方がいいかな？

あたしの場合、ワインで酔うと、頭がぐるぐるするのだ。飲みすぎると、いわゆる千鳥足になってしまふ。

龍之介はいいとして、秋月さんや原田さんの前では、そんな姿は晒したくない。

そろそろペースを落とさないと……。

「紫苑さんは大学では何かやつてたんですか？」

「ほんやりして油断していたあたしは、秋月さんの質問に、真っ先に

桜井先生のことを思い出してしまい、胸が苦しくなる。

「い・・・いえ、あの、母が具合が悪かったので、家事で忙しくて。

」

「あ、家事つていえば紫苑つて、高校のとき、家庭科部だったんで  
しみつ？」

「あ～！ 知佳ちゃん、それは黙つて聞いて言つたの！」

「俺も初耳だな。どうして秘密なんだよ？」

「・・・だつて、家庭科部だつて言つたら、あたしが料理とか得意  
だつて思われちゃうでしょ？」

「何言つてゐるのー。お母さんの代わりにやつてたんでしょう。ち  
ゃんとできぬんじやない。」

美歩。

フオローしてくれるのはありがたいんだけど・・・。

「やつやあ、普通の料理ならどうにか作れるよ。だけど、本物は苦  
手なの。あのときは弟も妹も、文句タラタラで・・・。」

今、思つ出してもため息が出る。

「やつぱつな。どう見ても、紫苑と料理は結び付かない。」

「龍介にそう言わると、なんだか腹が立つ。」

「だつて、その性格だからな。」

「性格のせいじやないよー。」

手の使い方の問題なんだよー。」

「ケーキとか、絶対に作れないだりひへ。」

う・・・悔しい！

そんな馬鹿にしたような顔をして！

「つ、作ったこと、あるもん。」

見た目はイマイチだつたけど。・・・味も、かな。

「お、そつなのか？ ジやあ、今度、俺にも食べさせひ。判定してやるから。」

しまつた！

あたし、墓穴掘つた？！

「よし、決まり！ まあ、練習する必要があるだつから、3か月以内つてことにじでやろい。」

なんで、そんなに偉そつなの？

「イヤつて言つたら？」

「逃げるのか？ 弱虫だなあ。」

やつぱり悔しい！

「じゃあ、美味しかったらどうするのよ？」

「紫苑に対する態度を改める。」

「え？ ホント？」

「うん。ちゃんと女性として・・・。」

「ああ。今までは、やつぱりいつも扱いだつたんだね。いいよ。認めさせてあげるから。」

「よし！ 3か月以内、約束だぞ。」

ん？

よく考えたら、なんとなく変な気がするけど・・・？

ふわふわした頭ではそれ以上考えるのは面倒で、周囲で続いている会話や笑い声の心地よさで、ふとよみがった疑問はかき消されてしまひ。

まあいいか。

そのあとも、賑やかに楽しく時間が過ぎた。

楽しい余韻に浸りながらビルの出口へと向かつ足取りが軽い。

後ろから聞こえてくる知佳ちゃんと原田さんの笑い声に、龍之介が冗談を言つ声が重なる。

外への出口は2重のガラス扉。

気分良く一つ扉を通り抜け、二つ目のドアを押すと・・・。

「オッ」と音がして、押し開けたドアが冷たい風に押し戻される。

「うわ。」

戻つてくるドアの重さに耐えきれず、一步後ろに下がつたら、とん、と誰かにぶつかつた。

「あ、『めんなさい』。」

支えるように右腕に手がかけられて、左の肩の上からドアを押さえるために手が伸ばされる。  
覆いかぶさられるようなその近さに、振り向こうと思つた動きが止まってしまう。

「いいえ。あのうから風が強いですね。びびれ。」

頭の上で聞こえたその声は・・・秋月さん。

「あ、ありがとうございます。」

びびじてこんなに小さい声しか出ないんだらつ?  
ドクン、ドクンと、自分の鼓動ばかりが大きく聞こえる。

大丈夫、大丈夫、大丈夫。

何でもない、何でもない、何でもない。

秋月さんだからドキドキしてるわけじゃない。

相手が誰だって、あんなに近付いたらドキドキしちゃうよね？！

頬が熱いのは、きっとワインせいだよ。

「楽しかったねえ。」

電車を降りて、龍之介と一人で改札口に向かつ。飲み会のあと、いつもと同じ帰り道。

「原田さんも、秋月さんも、面白い人だねえ。」

龍之介の顔をのぞき込むようにして言つと、龍之介が笑いながら尋ねてきた。

「紫苑。いつもよりたくさん飲んだ？」

「え？ そんなことないよ。」

そんなふうに見えるのかな？

「あのねえ、ワインはちょっと酔い方が違うんだよ。頭がふわふわするっていうか。」

「ふうん。」

「だけど、ちゃんと歩いてるでしょ？」

「うん。」

「だったら、大丈夫。飲み過ぎじゃないもん。」

うふふ、と笑つたら、龍之介も笑つて

「そりだな。」

と言つた。

そうだよ。

改札口を抜けて外に出ると、木枯らしがひゅうっと吹きつけてくる。冷たい風が火照つた頬に気持ちいい。

龍之介がボタンをはずみに着ていた黒いトレンチコートが、強い風にバタバタとはためく。

暗闇の中、その黒いコートがマントのよう見えて、背の高い龍之介はまるで・・・。

「龍之介。吸血鬼みたい。」

くすくす笑いながら言つと、龍之介が可笑しいのに笑いをこらえて  
いるような顔をする。

あたし、変なこと言つた？

だって、面白いんだもん！ 黙つてたら、もつたいないよ！

「やつぱり、けつこう寒いな。」

もう一度冷たい風が吹くと、龍之介が首をすくめてつぶやいて、口

ーーのボタンを留め始めた。

その様子を隣で見ながら、2つ田のボタンを留めていくとき、「ふ」と気付く。

「ねえ。持つててあげる。カバン。」

手を出すと、龍之介はちょっと驚いた顔をしてから微笑むと、あたしにカバンを差し出した。

「ありがとう。」

自分のバッグを左の肩にかけ、右手に持った龍之介のカバンをぶらんぶらんと前後に振りながらのんびりと歩く。  
相変わらず木枯らしが吹いて、道路わきの小さな公園の木から落ちた枯れ葉がカラカラと音を立てる。

あたしはコートの上からショールを巻いているから、冷たい風も気にならない。

空は黒くて、その真ん中に欠けはじめた月が明るく輝いている。  
その月をかすめながら、薄い雲が風に乗って流れしていく。  
月を見るのは好きだな。

そういうえば、あのボタンって、いくつあるのかな?

女性用のコートだと5個くらいだよね。

龍之介は背が高いから、もっとたくさんついてるのかな?

・・・訊いてみなくちゃ。

龍之介の前に出てぐるっと振り返り、後ろ向きに歩きながら尋ねてみる。

「ねえ。それって、いくつあるの?」

「え?」

「そのボタン。」

「・・・7個くらいかな。」

「ふうん。」

「やつぱり、いつもこあるね。」

「ありがとわ。」と慌てて手を差し出した龍之介にカバンを返して、そのままホールを観察する。

「ねえ。そのホールって、着るの大変そうだね。」

「そんな」といけど?..

一つずつ指差して教えてあげる。

「だつて、ボタンがたくさんついているよ。せん。」

「肩でしょ、ポケットでしょ、それに...。あと、後ろにもあるよ。」

龍之介はパタッと立ち止まって、あたしをまじまじと見た。  
それから、せつと拳を口元に当てる。一度あたしから皿を飛ばし、  
咳払いをしてからこっちを向いた。

「全部、飾りだよ。」

「でも、酔っ払つてると、間違えひきつかもよ。」

龍之介がくすくす笑つてゐる。

「酔っ払つてゐて、今の紫苑みたいに？」

「あたしは酔っ払つてないもん。ちやんと歩けるんだから。」

「・・・やうか。」

「うふ。やうだよ。」

あたしは自分でちやーんと飲む量を管理できるんだからー。

あたしの住むマンションまでは、8分。のんびりと歩いて歩くのが心地いい。

道路の端に積もつた落ち葉を踏んでみたら、カサカサと音がする。蹴散らしてみよつとしたら、靴が脱げそうになつてやめた。

「もう2年、だな。」

「んー？」

つぶやくような龍之介の言葉に、素早く反応ができない。

「 いじつて紫苑を送るみづになつてから、2年経つたんだな、と思つて。」

「 ああ・・・そうだよな。」

本当に、早いものだよね。

「 こつもありがとうござります。お陰さまだ、毎回、安心してお酒が飲めます。」

深々と頭を下げるから、起き上がつて龍之介を見たら、またくすぐり笑つてる。

龍之介、楽しいんだね。

あたしも楽しくなつて、一緒にふふふ、と笑つてしまつ。

「 いいよ、どうせ帰り道だから。・・・でも、たまには違つお礼があつてもいいかもな。言葉じゃなくて。」

「 ああ、そうだよね。何か欲しいものはある?」

「 ベつに、特別な物が欲しいわけじゃないんだ。」

龍之介が喜ぶものって何だらう?  
何か、龍之介にピッタリのもの。

「 つーん、何がいいかな?」

今みたいにふわふわした頭じゃ、あんまりよく考えられない。  
「 今度、考えておくね。」

横から龍之介の顔をのぞき込んで言つと、龍之介はまたくすぐりと笑つてうなずいた。

龍之介がもうつたらす「」へ嬉しいものつて、何だらうね？

「 もむ・・・。」

相変わらずひゅうひゅうと吹き付ける風に、龍之介がいかにも寒そうに首を縮める。

短いシンシン頭は、耳も首も本当に寒そり。

風邪を引いたりしないといいけど。

じつと見ていたあたしと田が合つと、龍之介は、今度は笑わずに田をそらして前を向いた。

それから。

「 うつとうときつて、普通、『寒だからコーヒーでも。』とか言つたりするじつじよ。」

「うつとうとき？」

ああ。

寒い日に送つてもうつたときつてこと？

一般的に、そういうことになつてゐるの？

知らなかつた・・・。

「 そんなことしたら、帰るのが遅くなつちやうのにねえ？」

龍之介がぱつとあたしを見た。

その顔は・・・困ってる？ 驚いてる？ でなければ、何か情けない・・・？

それから、笑った。  
とても楽しそうに。

「うん、そうだな。」

話している間に、そこはあたしのマンションの前。  
そのまま立ち止まって、龍之介と向かい合いつらひ立つて、顔を見上げる。

「それに、早く帰つてあつたかいお風呂にでも入る方がいいよね？」

「うん。たしかにそうだよな。」

龍之介のこういう笑いを見るのは好きだ。

あたしも楽しいよ。

立ち止まつてあるあたしたちに、また木枯らしが吹き付けて、龍之介がまた寒そうに首を縮める。

ああ、そうだった。

龍之介はいつも、あたしが中に入るまで見していくれる。  
あたしがいつまでもここで話をしていたら、龍之介は帰ることができないんだ。

「じゃあ、またね。いつもありがとう。気を付けて帰つてね。」

手を振って、急いで玄関の一つめのガラスのドアを通り抜ける。そこで振り返つたら、玄関のあかりが届くぎりぎりのあたりでポケットに手を突っ込んで立つて、じつちを見ている龍之介。・・・やつぱり寒そう。

そうだ！

すぐにドアを開けて引き返し、不思議そうな顔をしている龍之介を見上げる。

「龍之介。ちよつとちよつちよくなつて。」

言いながら、自分の肩に掛けていた白黒の千鳥格子のショールをはずす。

それを、かがんだ龍之介の頭に、えいっと被せた。

「え？　いいよ。」

恥ずかしがつて体を引こうとする龍之介を、「いいから。」と、被せたショールの左右を握つて阻止。

「電車に乗つて帰るわけじゃないでしょ？　それに、この時間だから、外を歩いてても誰にも会わないよ。」

そのままぐるぐると首にもショールを巻き付けて、はじつこを結ぶ。出来上がった姿を見たら、そんなに変じやなかつた。

「・・・あつたかい。」

恥ずかしそうな顔をしたまま、龍之介がぼそりとつぶやく。

「どう?」

ほらね。

あたしだって、龍之介の役に立てるんだから。

嬉しくなつて思わず笑顔になると、龍之介も笑顔になつた。

そのまま、龍之介はすつと屈んであたしと間近に顔を見合せると・

・・「シン」とおでことおでこがぶつかる。

「?！」

頭突きされた?!  
なんで?!

「痛いよ。」

驚いて文句を言つあたしを、立ち上がつた龍之介が笑つてゐる。  
意味分かんない!-

「ありがとう、紫苑。」

もう一度屈んでわざやくよつとしゃべりながら、龍之介はぐるつと腰を  
向けて、軽く手を上げて歩き出す。

「うん。じゃあね。」

その背の高い後ろ姿を見送つて、あたしもマンションの玄関へ。

・・・でも。

エレベーターを待ちながら、何となく、違ひ、と思つた。

なんだる？

バッグはちゃんと持つてるし。

エレベーターが到着して、扉が開き始めたとき、視界の隅で何かが動く気配。

つられて入り口の方を見たら・・・龍之介がにっこりと手を上げて会図した。

あたしが被せてあげたショールは頭からは取り扱われて、首と肩だけにしか掛かっていなかつたけれど。

あたしも龍之介に手を振る。

そうだ。

これだ。

これが正解。

あたしと龍之介のバイバイは、いつもこうだよね！

## 1.1 お菓子作りの本

仕事帰りに大きな本屋さんに来た。  
お菓子作りの本を探すため。

先週、秋月さんたちと会ったとき、龍之介と約束した・・・つてい  
うか、意地になつて挑戦を受けて立つてしまつたケーキ作り。  
黙つていたら龍之介も忘れてしまうかな、と思つていたのに、きの  
う、わざわざ言われてしまつた。  
にやつと笑つて、

「3か月以内の約束だからな。」

つて。

高校のとき、家庭科部で作つたことはある。

文化祭で部の出し物として卖つたし。

だけど・・・あたしの作ったものを売るわけにはいかなかつた。

スポンジケーキやシューの皮はふくらまないし、クッキーの上に絵  
をかいたりすることすら上手くできなかつた。

不器用なのと、泡だてたり、かき混ぜたりするときのちよびとい

“今だ！”が、よくわからないのだ。

だから、文化祭用のお菓子を作るのはほかの部員の役目で、あたし  
は売り子専門だった。

料理の方はまだいい。

味付けは分量を間違えなければいいのだし、切り方が多少不揃いで  
も、盛りつけてしまえばどうにかなるから。

それに、大学生のときにお母さんの代わりをして経験値がアップし  
ているから、今では自分でもちゃんと自炊できる。・・・きちんとし  
た料理は作れないけど。

だけど、今回は・・・。

自信はない。

でも、意地がある。

龍之介の挑発に乗った自分は愚かだつたと思うけど、それを受けて  
立つてしまつたからには負けたくない。  
もしかしたら、料理が少しできるようになつてている分、お菓子だつ  
て上手くできるよつになつてているのかもしれないし！

自分を励ましながら、お菓子の本のコーナーへと毅然とした足取り  
で向かう。

何事もやつてみなくちゃ わからない。

実用書のコーナーを、案内板を見ながらいくつか通り過ぎ、『料理・  
菓子』と表示のある棚へ通路に入る。

4人ほどの人が棚の前でカラー写真の載つた本を見ている。1人は  
男の人だ。

書棚の手前側にはお惣菜の本が並んでいる。お菓子の本はもっと奥  
かな。

その人たちと後ろの棚を見ている人の間を通り抜けながら、棚を順  
にながめて進む。

“ケーキ”というキーワードが背表紙に並ぶ場所を見つけて、先

に本を見ていた人たちの間で立ち止まり、本のタイトルを順に追つてみる。

シフォンケーキ、パウンドケーキ、チョコレートケーキ、チーズケーキ、ショークリーム、パンケーキ、スポンジケーキ、カップケーキ・・・。

ケーキの種類だけでも選ぶのが大変！

しかも、それに“おいしい”、“簡単にできる”、“レンジができる”、“混ぜるだけ！”、“初めて作る”など、いろいろな枕詞がついている。どうしたらいいの？！

とりあえず、高校のときに作ったことがあるスポンジケーキの本を取り出してみる。

中を開いて・・・・ため息が出た。

スポンジケーキは飾り付けが重要だ。

不器用なわたしには、とてもじゃないけど、他人に見せられるようなものが出来上がるとは思えない。

ショーケースは飾り付けはいらない・・・けど、膨らまないとすべてが無駄になることを思い出してやめる。

カップケーキ？

簡単そうだけど、泡立て器で混ぜている写真を見て嫌になった。

“レンジができる”は、何となく龍之介に白痴ができない気がする。

お店でセツトになつて売つてゐるものを利用したことはあるけど、

結局は泡立てるのが大変だつたし、やっぱり龍之介が手抜きだとか  
言いそ�だ。  
「ひょひょひ・・・？」

「はあ・・・・・。」

また、ため息が出た。

隣にいた男の人が、あたしの方を見た気配。

そんなに大きなため息をついたつもりじゃなかつたけど、聞こえち  
やつたかな・・・。

あーあ。情けないな・・・。

「・・・紫苑さん？」

「この声は。  
ん？」

見上げると・・・やつぱり、秋月さん。

こんなところでため息をついているのを見られるなんて。

・・・つていうか、秋月さん、お菓子の本？

秋月さんが見ていた本をちらりと覗くと、やっぱりお菓子の本。

「秋月さん、お菓子作るんですか？」

お仕事は・・・設計士さんだったよね？

「就職してからの趣味なんです。簡単なものしか作りませんけど。」

「……」と穢やかに、でも少し恥ずかしそうな笑顔で答える秋月さん。

簡単なものって言つてるけど……。もしかして、「……」は頬つてみるべや?

「あの、 どんなものを作るんですか?」

「飾り付けがいらないものがいいな、 と思つて、 オープンで焼いた  
ら終わらつてこいつのが中心で……、 「

おおー

まさに、 あたしが探しているものかも?!

「チョコレートケーキとかアップルパイとか……。

それって……どうなんだり?」

「あのウ……、 あたしでもできると思いますか?」

「え?」

「ええと、 その、 この前、 龍之介と約束した……。」

「ああー、 あのとき。」

「はー。わたし、 不器用で、 チョコレーションとか泡立てるとか、 そ  
うこうとうのが無理なんです。」

秋月さんが少し考えてから言つた。

「それだったら、僕が作っているみたいなものがいいかもしないですね。オープンに入れたら、あとは待つだけですから。」

「その前の部分は・・・？」

「僕の印象としては、分量を量つて並べた段階で半分終わつた感じがしますね。」

分量を量つただけで半分終わり・・・。  
それって、すゞいような気がする。

「あの、そのレシピって、ここにある本の中にはありますか？」

秋月さんはにこりと微笑んでから、棚を見てくれた。

「ああ、これです。」

差し出された本は、アップルパイと、ナツツを使ったタルト、それにチョコレートを使った焼き菓子が載つていて本だった。  
写真はどれも美味しいだし、手順の途中の写真も載つている。  
さらに、レシピの最後が「一度のオープンで 分焼く。」で終わっているものが多い。

これならどうにかなりそう？

「これからはりんごが美味しい季節だから、アップルパイがいいかも知れないです。」

アップルパイか・・・。

「あたしでもできるかな・・・？」

「一度で成功をむかえる必要はないんじゃないのかな？」

「え？」

「たしか3か月つけて書きましたよね？だから、練習すればいいんです。」

「やうか！ やうですかね？」

休日にやつてみればいいんだ。

「あつがとうござります。そつします。教えていただいて、助かりました。」

「いいえ。お役にたててよかったです。」

優しい笑顔でさわやかにそつと、腕時計を見て、「じゃあ、お先に。」と、秋月さんが去っていく。

その後ろ姿に、心の中でもう一度お礼を言つ。それで。

まずは家に帰つて、じつくりとの本を見てみよつ。作るものを考えなくちゃいけないけど、とりあえず、この本の写真を見ているだけでも満足しそうな気がする。

もう一度、本の中を見ると・・・うん、美味しそう。これなら龍之介も文句のつけようがないよね。・・・成功すれば。

帰つてから、夕飯の支度をしながら、早速、本を開いてみる。

アップルパイ3種、チェリーパイ、ナツツ類のタルト2種、チョコレートケーキとブラウニー。

どれも写真が美しい。

見ているだけで、幸せな気分になつてくる。

こういうのを誰かが作ってくれたらいいよね・・・。

ふと、秋月さんが作つてる姿が目に浮かぶ。

カフェエプロンをかけて、ボウルと泡立て器を持つて・・ふふ、似合いつづ。

ああ・・・そうじゃなくて、今回はあたしが作らなくちゃいけないんだつけ。  
どれどれ。

パイは何層にも重なつたパイ生地ではなく、めん棒で丸くのばした生地をパイ皿に広げて作るようになつてゐる。  
中に切つて下味をつけたりんごを入れて焼いたら終わり。

うん、いいね。

タルトは生地を焼いて型を作り、その中にキャラメル味やブラウンシュガーのソースとナッツを入れて焼く。

チョコレートケーキとブラウニーは、材料を混ぜて、焼く。

うん。

たしかに、全部 “焼いたら終わり” だ。

粉砂糖をかけるくらいはあるけど。

とりあえず、今度の土田にやつてみようかな？

夕食とお風呂を済ませて、どれを作るかじっくりと検討してみる。秋月さんが、りんごが美味しい季節だからアップルパイがいいって言つてたつけ。

材料は？

・・・あれ？

よく考えたら、食材も必要だけど、それ以前に道具がないよ！ボウルだって一人暮らしだから小さいのしかないし、粉ふるいとか、パイ皿とか、めん棒とか・・・。まずは、こっちを買いに行かないと。意外にお金がかかりそう？

もうー

龍之介があんなこと言い出すからー

・・・違うか。

拒否すればよかつたんだよね。

べつに、龍之介を感心させる必要なんてないんだから。

それとも、あたし、秋月さんたちの前で、少しほうららしいといふを見せたかったのかな・・・？

仕方ない。

土曜日に買いに行くか・・・。



こんなにあるなんて・・・。

土曜日の午後。

さまざまな趣味の用品を揃えている大きなお店に来ている。

・・・秋月さんと。

秋月さんはブルージーンズにグレイのパーカーと黒のダウンベスト、赤と茶のチェックのシャツの襟と裾をちょっとずつ覗かせている。いつものスース姿よりも、“カワイイ”度がアップしている。待ち合わせ場所で会ったとき、ドキッとした。ドキッとしたのは、その服装がいつもと違うところとだけじやなくて。

あたしが赤に茶の入ったタータンチェックのウールのワンピースの上にグレイのパーカーと赤のダウンベストを着て来ていたから。

おそろいではない！ 決して！

・・・でも、見るからにおそろいに見えてしまうので恥ずかしい。本当のカップルでも、ここまでおそろいみたいな人たちなんて、いないんじゃないだろうか。

待ち合わせ場所で会つたとき、お互に顔を見合させて笑うしかなかつた・・・。

そもそも、どうして一緒に買い物に来ているのかといふと。

本屋さんでぱつたり会つた畠田、いつもみたいに朝の駅で一緒になつて、「何を作るか決めましたか?」と尋ねられた。

道具がないので買わないといけない、ところ話をしたら、秋月さんは「そうでしたね。」と思い出したように言つて、選ぶのを手伝いましょうかと申し出してくれた。

「お薦めしたときに気付かなくちゃいけなかつたんですか? あの本で使う型つて、少しサイズが違うんですね。」

「え? その辺のお店では買えないんですか?」

「ああ・・・すみませんでした。思ひがけないとこりで紫苑さんで会つたので慌てちゃつて・・・いえ、その。」

ああ。

お菓子作りに興味があるつてこと、あんまり知られたくないのね。

「僕が買つたお店を、案内します。」

「あ、いえ、場所だけ教えていただければ・・・。」

「そのお店だと品物の種類が多いので、たぶん、選ぶのが大変だと思います。僕が見た目で選んで失敗したと思っているものもあるし。思ひます。僕が見た目で選んで失敗したと思っているものもあるし。」

「

・・・というわけで、今日、秋月さんと一緒にこのお店に来ている。

おそろいみたいな服装をして。

偶然だけど、恥ずかしい・・・。

たしかに、このお店の品物の種類はすごい。

ボウルだけでもステンレス、ほうろう、耐熱ガラス、強化ガラス・・などなど、材質もあれこれあるし、大きさも何種類もある。ザルとセットだったり、柄がついていたり、注ぎ口がついていたり、泡立てるために底が斜めになっていたりするものもあった。パイ皿も、タルト型も、ケーキ型も事情は同じようなもの。

秋月さんのお薦めグッズや使いにくないと感じたものの理由を聞きながら、本からメモしてきた紙を見ながら順番に選んでいく。

“順番に”と言つても、“順調に”といつのとは違つ。とにかく迷う！

それに、必要なもの以外にも変わった道具がいろいろあって、売り場をまわりながら立ち止まることが度々。

秋月さんと一緒に首をひねつたり、笑つたり、感心したりして、結局、そのフロアに2時間近くいた。

そのあいだに、お互いに口調が親しいものに変わる。そもそも同い年なんだものね。

だけど、

「秋月さん、これ便利そう。ほら、見て。」

「え？ そんなもの、邪魔になるだけだよ。」

なんていう会話は、まるつきりキッチン用品を仲良く物色しているカップル（しかも、結婚間近の）そのものだ。

何度も気付けなくちゃと思うのに、並んでいる商品の面白をこいつそんなことは忘れてしまう。

秋月さんが嫌な顔をしないでいてくれる」とが有難い。

買つたものを袋に入れてもうつたら、かわざるものばかりで、荷物が一つになつてしまつた。

その一つを秋月さんが持つてくれて、申し訳ないな・・・と思つたところで、服がおそろいみたいに見える」とを思い出して、また焦る。

これじゃあ、ますます他人の目には・・・。

困るよ！

つていづより、秋月さんに申し訳ない。あたしは恋愛はしないつて決めているからいいけど、秋月さんは、誤解されたらチャンスが減つてしまつかも。だから、早くさよならしたほうが・・・。

「ちょっと疲れたから、一休みしようか。」

・・・え？！

一緒について？！

「え？ あの、ええと・・・。」

「あ、紫苑さん、急いでる？」

「いえ、特に用事はないけど・・・。」

「じゃあ、「バー」でも一杯。」

「うん・・・。やうだね。」

いいのかな？

秋月さんは何も気にしてないみたいだけれど・・・。

まあ、いいか。

うん。

お友達遊びで出かける」とだつてあるもんね！

下の階にあるカフェで椅子に座つたら、思いのほか疲れていたことに気付いた。  
二人ともケーキも注文することにして、一緒にメニューをのぞき込む。

「あ～。ブドウのタルトと桃のタルトで迷っちゃう。」

決められなくて思わず口に出すと、秋月さんが笑う。

「両方頼んじゃえば？」

「さすがにそれは食べきれないよ。」

「じゃあ、僕が片方を頼むから、半分ずつ食べる？」

「え？ それじゃ、申し訳ないから・・・。」

「僕はいこよ、紫苑さんとなら。」

ドキン、と心臓が跳ねた。

自分が驚いた顔をして秋月さんを見ていることに気付いて、急いでメニューに視線を戻す。

視線はメニューに……でも、視界から何も読み取ることができない。

「紫苑さんとなら」「って……。

・・・待て待て待て。慌てるな。  
気にし過ぎだよ。

何も意味なんかないんだから。

ほら、もしも相手が龍之介だつたら……・・・無理矢理でも一口も  
らつちやつ。

そうだよ。

つまり、お友達の範囲内で、こいつこいつとつて“あり”つてことだよね！

秋月さんは一緒に出かけるのが初めてだから、少しひびくつくりしただけ。

「あたし、桃のタルトにする。」

顔を上げて伝えながら、自分の態度がいつもと変わりないかどうか  
が気になる。  
ドキン、ドキン、と鼓動がこめかみに響いている。

「じゃあ、僕はブドウの方を。」

秋月さんがにっこりして言つ。

そのちょっとカワイイ笑顔にほんの1秒、見惚れてしまった。

カスタードクリームの上に山盛りに果物が載ったタルトはとてもきれいだつた。

秋月さんがあたしの前の桃のタルトに、先に「味見。」と言つて手を出したので、あたしも遠慮なくブドウのタルトをいただく。クリームの甘さと果物の甘酸っぱさ、それにタルト生地の適度な硬さが絶妙なバランスで混じり合つ。

こういう美味しいものを吃べると、自然と笑顔になつてしまふ。あたしが作るものでも、こいつ顔をしてくれる人はいるんだろうか？

時間を割いてくれたお礼に、こここの支払いをさせてほしいと言つたら、秋月さんは承知してくれなかつた。

「僕もここの地下で買つものがあるから、ついでだつたんだよ。」

と言つて。

「ここの地下は食材もたくさん売つてて面白いよ。粉とかスパイスもいろいろあるから、紫苑さんも行つてみない？」

そう言われてついて行つたら、本当にいろんなものを売つていた。お菓子用のものだけじゃなく、料理に使うもの、お酒類も、それに外国のインスタント食品なんかも、高級品から格安のものまでいろいろある。

「近所で売つてないものが欲しいときは、ここに来るといいよ。」

秋月さんは迷わず製菓材料の売り場に進んで、細かく仕切られた棚を物色している。

何を売つているのかとよく見たら、チョコレートだった。  
棚に貼られた商品名はどれもよく似ていて、まるで間違い探し迷った  
い。

通路の向かい側は粉類で、白い粉が棚に何種類・・・いや、何十種類も。

全部、小麦粉？

ああ、薄力粉と強力粉があるのか。

お菓子用もシフォンケーキ向きの粉とクッキー向きの粉など用途によつて違つし、小麦の種類も違うようだ。  
あたしも選ばなくちゃいけないのかな・・・？

「粉は、最初はいつも家で使つてるので間に合つよ。」

呆気に取られていたら、いつの間にか秋月さんが隣に来ていた。

「やうなの？」

「うん。ここで買った粉を使つているとこどりしても上手くいかない部分があつて、自分が下手なのかと思つてたんだ。でも、たまたま足りなかつたときに、家にあつた普通のを使つたり上手く行つたんだよ。」

へえ。

そんなことがあるんだ。

何でも本格的だからといってわけじゃないのね。

一緒に売り場を一回りしながら、お互の料理の失敗談で笑う。秋月さんは大学のときからの一人暮らしで、料理はかなりできるらしい。

アルバイトで中華料理のお店にもいたことがあるそつだし。

「見よう見まねで。」

なんて笑うけど、見て、真似をするだけでできる人っていうのは、たぶん料理のセンスがあるんだと思う。あたしなんて、ガツチリ教わってもイマイチなんだから。

駅でお別れするときに、やっぱりお礼がしたいと言つと、秋月さんは微笑んで言つた。

「じゃあ、紫苑さんの試作品ができたら食べたいな。」

「ええ? ! 美味しいかどうかわからないのに?」

物好きな人だな・・・。

「大丈夫。きっと美味しくできるから。」

「そんなプレッシャーをかけないで・・・。」

「他人の意見を聞くのは大事だよ。」

「聞いても、あたしにまじりを直せばこいつかわからぬこと思つた  
ど。」

「うん。たぶん僕もわからないから、気にしなくてもいいよ。」

なにそれ？

なんだか変な会話……。

「どんな味でもいいよ。僕が紫苑さんの作ったお菓子を食べる第一  
回つてことない。」

・・・え？

「じゃあ、予約したからね！ サよなら！」

改札口を抜けていく秋月さんの後ろ姿を見送りながら、心臓の音が  
大きく聞こえてくることに気付いた。

あたしは・・・誰のことも好きにならない。

人を好きになるのは苦しいし、怖い。

この鼓動は単に驚いたせいであって、特別な意味なんてない。

特別な意味なんて・・・。

### 13 お菓子作りの道は険しい

秋月さんとお菓子作りの道具を買いに行つた土曜日の夜、小学校のころからの親友 三崎真由から電話がきた。

「来週、紫苑のところに泊りに行つてもいい？」

真由はあたしが一人暮らしを始めてから、いつもやつてときどき遊びに来る。

あたしが実家に住んでいたころは、一緒に出かけたり、お互いの家に遊びに行つたりするのは当たり前だったのに、今では電話で話すのが普通になつてしまつて寂しいかぎり。

その分、来た時には夜更かしをしてたくさん話す。

「うん、あたしも予定がないからどうぞ。あ、ちよつとよかつた。」

「何が？」

「来週ね、アップルパイを作る予定だつたの。」

真由は高校卒業後、調理の専門学校の製菓コースを出て、地元のケ

ーキ屋さんに就職している。

真由が来てくれれば百人力だ！

「アップルパイ？！ 紫苑が？！」

驚くのも無理はない。

あたしの腕前はもちろん承知のことだから。

「うん。もう本を買って、道具も揃えたんだよ。」

「お菓子作りなんて無理だつて言つてたのに、いきなりビツしたのもしかして、誰かにあげたいとか？」

「あげたいんじゃないくて、あげなくちゃいけなくなつちゃつたんだよ。来週はその練習なの。真由が手伝ってくれるなんなら、つまく行くこと聞違になしだもんね！」

喜ぶあたしに真由は

「じゃあ、土曜日に作るわ。失敗しても、田舎口もつ一度やり直すことができるからね。」

と真面目な声で言つた。

もしかして、ちょっと気合いが入つてる？

「絶対に失敗しないみつこ、しっかり見てあげる。」

とこつ頬もしい言葉に、心からほほとした。

これなら、せっかく買つた食材を無駄にななくて済みやう・・・。

次の週間は、秋月さんに会つても、土曜日にアップルパイを作ることは言わなかつた。

だって、試作品をあげるといつになつてゐるのに、食べられるようなものができなかつたら困るから。

それらしい話題が出たびに、あたしはさりげなく話を逸らし続け

た。

そして、一週間後の土曜日。

朝の9時ごろに真由が来た。お泊り用の荷物とエプロンを持つて。どうせ泊るんだからゆっくりでいいって言つたのに、あたしがパイを作るのに何時間かかるかわからないからつて。

子どものころから女の子らしい服装が好きだった真由は、今日も小花柄のスカートとロングブーツにポンチョ風の上着、髪は左耳のうしろで一つに束ねて可愛らしい。

色が白いから、明るめの茶色の髪がよく似合つ。

久しぶりの挨拶もそこそこに、真由は本と道具とあたしが仕事帰りに買いそろえておいた材料を厳しい目でチェックする。

「けつこう本格的な感じだね。」

「え？ そうなの？」

本格的かどうかもよくわからないほど、あたしは何も知らないってことか・・・。

「うん。でも、手順は難しくないし、焼いたら終わりっていうのは本当だから、紫苑にもなんとかなると思つよ。」「

よかつた。

「それ」「れだと美味しくないわけがないよ。」

「本物?..」

「うそ。まあ、見た目はどうなるかわからなければどね。じゃあ、まずは材料を量るところからね。」

やつぱり、真由がエプロンをする。

「うん。」

本を見ながら動き出したあたしの横から、真由は腕組みをして2歩下がった。

・・・あれ?

「真由。一緒にやつてくれないの?」

「なんで? 紫苑の練習なんでしょう? あたしは見るだけだよ。」

「そんな! 手伝ってくれないの?..」

「あたしが手を出したら、最終的には全部やめになっちゃうよ。中途半端よつ、全然やらない方がいいんだよ。」

「・・・ハロッソてるから、手伝ってくれると困った。」

「だつて、これやっておかないと、紫苑がどこまで粉を飛ばすか分からないから。」

「ああ、やうですか。冷たいなあ、親友なのに。」

「何言つてんの？ 親友だから、いつやつて教えるんだよ。さあ、  
ビシビシ行くからね。」

「口だけ？」

「まあ、手で見本を見せるくらいにはするけど。」

中学時代は内氣なところが可愛らしかった真由だけど、大人になるにしたがってしつかり者になつた。

実家に住んでいたころは隆くんも交えて会つことがあって、そういうときは、真由が隆くんを操縦している様子にいつも驚いたものだ。そんな真由に、あたしが敵うわけがない。

「・・・わかつたよ。」

真由は厳しかつた。

調理学校の先生つて、こんな感じなんだろうか？

用意した道具や材料を置く順番にもこだわるし、あたしが手順に迷つても、見ていてるだけで教えてくれない。

そりやあ、真由がついていてくれるのは今回だけで、次は自分でやらなくちゃならないことは分かつてるけど。

だけど、少しくらいいいじゃない！

材料を量る、と、下準備。

けつこう大変だった。

特にバター。

切らうとする、ナイフにくつづく。  
さわると手がべとべとなる。

真由が

「脂分はキッチンペーパーでぬぐつた方がいいよ。」

と教えてくれた。

材料が多いから、量るものもたくさんある。

秋月さんが“量り終わつたところで半分終わつたような感じ”  
と言つた意味がわかつた。

粉をふるうとき、粉ふるいに小麦粉を入れようとして、あたりにふ  
わつと粉が飛ぶ。

真由がエプロンをしたときに言つた言葉のとおり。

「次回は大きいスプーンですくって入れたらいいかもね。」

もつと早く気付いてくれればいいのに・・・。

それからも、やつぱり大変だった。

「もつと、縦に切るより混ぜるんだよ。」

「そんなんふうにボウルを揺すつたりダメだよー。」

「手早く、手早く。」

「それじゃあ、一等分とは言えないよ。」

「りんごの皮をそんなんに厚くむいたら、パイの中身が少なくなるよ。」

「左右の力が違つちやつてゐるから、この辺が薄くなつてゐる。」

何かをやるたびに、真由の指摘が飛んでくる。

それでもどうにか生地を伸ばしてパイ皿に敷いとしたら、もともと真ん丸にはなつていなかつた生地がビローンと伸びて、半分くらいいまで千切れてしまつた。

「どうしよう?」

また丸めてやり直し……?

「今日はとつあえず、切れた部分を少し重ねて敷き込んでみたら?  
次にやるとときはラップを使って持つか、パイ皿を逆さまにして生地の上に乗せてひっくり返したらいいかもね。」

よかつた。

今日のところはやり直しは免れた。

半分の生地を伸ばして敷いた中に、切つて砂糖やスペイスを混ぜたりんごを入れ、残つた半分の生地を伸ばしてその上にかぶせる。

「……ふたの方が、真ん中に置けなかつたみたい。」

丸い型の一方はかぶせた生地が端つじせつぎつで、反対側はたくさんはみ出している。

「うーん……すりすと切れそつだから、今日せじれでいいことじよづ。」

真由、ありがとうございました。

「じゃあ、端を波型にしてみようか。紫苑。指先に粉をつけて。」

真由にさんざん笑われながら、パイの周りのあまつた生地をきちんと・・・には見えないかもしないけど、どうにか波形にする。溶き卵を塗って、温めておいたオーブンに入れて、温度と時間をセツトして・・・あれ？ 終わり？

うわー！

すごい。

本当に、オーブンに入れたら終わりだ！

「ほり、今のうちに片付けよう。」

真由に言られて使ったボウルやらなにやらを洗つ。

「必ず、よく乾いてからしまふんだよ。」

はい、わかりました。

粉が飛び散った床には掃除機をかけて、テーブルも床もきれいになると、あとは焼き上がるのを待つだけ。

そう。

待つだけだ。

ただ “待つだけ” なんて、すぐ贅沢な時間！

オープンをのぞいてみると、表面にうつすりと焼き色がつき始めて、パイの端の2か所からほぐつぐつと煮えたつ中身が流れ出している。縁のあたりの生地からじゅわじゅわと細かいあぶくが立っているのは、生地に混ぜてあるバターが溶けているのかな？

「いつもの外側は焼いて、中のりんごは煮てるんだねえ・・・」

感心してつぶやくと、真由が隣からのぞき込んで、頷きながら

「いい感じだね。」

と語ってくれた。

やった！

それから真由はエプロンをはずしながら、あたしに向き直った。

「ああ、紫苑。どうしてこんなことをするつもりになつたのか、詳しく教えてなさい。」

「え？ ・・・やっぱり知りたいの？」

「当たり前だよ。」

「ぐつぐつ面白くなつよ。」

「あひやつて隠すつてことは、何があるんだね？」

そういうことにならなければいいの？

「ああ、紫苑。今、話すか、夜に話すか、どうがいいの？」

「話せないっていう選択肢はないんだ？」

「ないよ。」

引き合がらなこつもりだ。

夜までちくちくやられるよりは、わざわざ話しかけた方が気が楽かな。

「わかったよ。今、話す。でも、真由が期待してみるような話じゃないと困つ。」

### 13 お菓子作りの道は険しい（後書き）

アップルパイの作り方は、平野顯子著『ニューヨークスタイルのパイとタルト、ケーキの本』（2008 主婦と生活社）を参考にさせていただきました。

## 14 お菓子作りの理由

「もともとは、家庭科部だったことがバレたのが原因なんだよ。」

真由が淹れてくれた玄米茶にフーフーと息を吹きかけながら説明する。

部屋中にはじんことシナモンとバターの香りがほんのりと漂って、かにお菓子ができるのを待っているという感じがする。

お菓子作りがこんなに楽しいなんて、初めて――

「同期と龍之介のお友達と一緒に出かけたときに、だいぶ前に話したことを見えてた友達が、『そう言えば』って言い出して。黙つててつて言つてあつたのに。」

「ねえ、龍之介くんっていうのは、紫苑がよく話す人でしょう？ そのお友達と一緒に出かけたの？」

「うん。今月の初めごろに、龍之介がその人たちと・・・2人なんだけど、うちの会社の駅前で待ち合わせしてて、あたしと友達2人がたまたま会つたんだよ。その一人がすっごくかつこいい人でね。」

秋月さんとあたしの偶然の縁については、ちょっと書こう。

「で、そのあと、一緒に飲みに行こうっていう話が出たらしくて、3対3で行ったの。」

真由が身を乗り出す。

「それって、誰かが誰かを、ってこと?」

「やつぱりそいつ? あたしも、もしかしたらって思つたんだけ  
ど。」

「だけど?」

「全然わからなかつた。」

あたしの答えを聞いて、真由がクスリと笑う。

「紫苑つて、そういうこと、相変わらずわからないんだね。」

「仕方ないじやん。みんな隠すのが上手いんだよ。」

「もしかしたら、紫苑が狙われてたりして。」

ズキン、と心臓が響く。

「真由。」

真由の前では、あたしは自分の気持ちを隠さない。  
きっと、今はうろたえた顔をしてくるはず。

「・・・まだ辛いんだね。」

悲しそうな顔をする真由。

「・・・『めん。 真由。』」

「紫苑が謝ることなによ。あたしが無神経に言つたのが悪かつた。  
『めんね。』」

いいんだよ。

こんなことをいつまでも引きずつてこる自分が情けないのは本当なんだから。

「ええと、それで？ 家庭科部の話が出てどうなったの？」

真由が明るく話を促す。

そうだよね。

せっかく久しぶりに会つたんだから、楽しく過いきなべくしゃ！

「家庭科部に入つても料理は苦手だつて言つたら、龍之介が『や  
つぱりな。』って言つてね。腹が立つて言い合つてゐうちに、売り  
言葉に買い言葉で、龍之介に手作りのケーキを食べさせられて約束  
しちゃつたの。」

「پ・・・。」

真由がこいつそりと吹き出す。

「龍之介つたらとあ、威張つちやつて、練習も必要だりうから3か  
月以内でいいぞ、とか言つんだよ。」

「相変わらず、龍之介くんとは言つてばっかりなんだね。」

真由には、あたしの話にたびたび登場する龍之介はすつと前から  
知り合いのよくなものだ。

「本当。どうしてだらうね？」

ため息をつくあたしを、ここにこと見ている真由。  
昔と変わらない、安心できる笑顔。

「今でも紫苑のことを送ってくれるの？」

「龍之介？ うん。帰り道だからね。」

「わー。いい人だね。」

。。。。。。

オープニングの音。

心配になつて、思わず真由の顔を見る。

なのに、真由は「あ、鳴ったね。」なんて、平気な顔をしてゐる。  
珍しくもなんともないよね。

仕方ないか。

真由は毎日、お菓子を作ってるんだから。

オープンを開けてみると、ツヤツヤときれいに焼けたアップルパイ。  
・・・まあ、形はちょっと、いや、だいぶ不格好だけど。

焼いている間に流れ出たパイの中身が天板でぐつぐつこっている。

真由に言われて竹串で刺してみると、ひつかからず底まで行くようなので、焼き上がりだと判断することにした。

ただ・・・天板」と出すのが重い。それに、熱い。怖い。ここで落としたりしたら、午前中の努力がすべて無駄になると感じますます緊張する。

真由を見守られながらガスコンロの五徳の上までどつにか運んでほつとした。

「ねえ、真由。切つてみてもいい？」

わくわくしながら言つたら、真由は呆れた顔をした。

「ダメだよ、紫苑！ 冷めてからじやないと。」

「え？ 热々のは食べられないの？」

「今、切つても、熱くてさわれないよ。それに、紫苑の本にも書いてあつたけど、一|田田、二|田田の方が味が馴染むんだよ。」

「そんなん。味見もできないなんて・・・。」

「ほら、この流れ出たのをスプーンで味見してみたら？」

真由になぐさめられながらスプーンを持って来て、天板に貼りついているべとべとをすくつて舐めてみたら・・・美味しい！爽やかな甘酸っぱい味とシナモンの香りが口の中にふわっと広がって、なんだか幸せな気分になつてくる。

もしかしたら、お店で買つのよりも好きな味かも。

「美味しいよ、真由ー。」

驚いたのと嬉しいので、思わず叫んでしまう。

「信じられない！ こんなに美味しいなんて！ あたしが作ったのにー。」

「だから、美味しくできるって言つたじゃない。」

真由がにこにこしながら言つ。

これなら龍之介だつて、なんにも言えないよね！ ・・・見た目以外は。

天板の上のアップルパイをながめながら、大きな満足感を味わう。あたしにも美味しいお菓子が作れた！

「真由のおかげだよー！」

嬉しくて、真由に抱きついてしまつ。そんなあたしを真由が笑う。

「よかつたね。形は何度か練習すれば、少しはマシになると感つよ。」

それから真由は、ふと不思議そつな顔をした。

「ねえ、紫苑。よくアップルパイなんて思い付いたね。」

「え？」

「だつて、普通、 “ケーキ” って言われたら、クリームが塗つてあるやつとか、カツプケーキとか、そういうものを考えない？それがアップルパイなんて、まあ、紫苑には向いてるみたいだけど、普段やらない人は思い付かないような気がするけど？」

「あ・・・、それは、その・・・。」

やだな。

びつじてこいで言葉が詰まっちゃうんだるつへ

「ん？ 何？ 怪しい、紫苑。」

真由の目がきらーん、と光つた気がした。

「ええと、フレーンがいて。」

「ほほう。どんな？」

「あの、龍之介の友達の一人なんだけど・・・。」

「え？！ 一度、会つただけで、ケーキの相談をするほど仲良くなつたの？！」

「あ、いや、一度じゃないんだよ・・・ね。」

「・・・びつじてこい」と・。」

「・・・まあ、座れりつぱ。」

アップルパイの香りが漂つ中で、あたしは真由に、金木犀の香りが始まる一連の偶然の話をした。

真由は皿を丸くして聞いていて、最後には「すいこね。」と感心していた。

「でも、本屋さんで会つたところまでは偶然かもしないけど、一緒に道具を買いに行つたのは、秋月さんの気持ちだよねー。」

意味ありげな皿つき。

「それに、毎朝同じ電車に乗つてるので、偶然とは言わないんじゃない?」

もづ・・・真由。

「真由は電車通勤じゃないから分からぬかもしれないけど、普通、みんな毎日決まった電車で通勤するんだよ。だから、会うのは当たり前なの。」

「やう?..」

「それに、お買物だつて、秋月さんの親切とお詫びの気持ちからなんだから。」

そう説明しながら、秋月さんとの会話やタルトを分け合つて食べたことを言わぬよう、心の中の箱に入れて蓋を閉める。「こんなことを真由に言つたら、たちまち勘違いされちゃう。

「ふうん。でも、あのアップルパイ、けっこう大きいよね。明日、あたしも一切れもらうけど、残りは紫苑一人で食べられるの?」

「ああ、うん。秋月さんにあげる約・・・束・・・が・・・。」

しまった・・・。

「『秋月さんにあげる約束』ね。ふうううう。」

「そ、・・・そんな深い意味はないんだよ! 道具を選ぶのを手伝つてもううつたお礼に・・・。」

「へえ。」

「だつて、休みの日おひさしごとくしてくれたし、その前に本も教えてもらつてるし、」

「そうだよね。」

「だからお礼するつて言つたら、」

「当然だよね。」

「試作品を食べたいつ・・・て・・・。」

「ヤリと、真由が笑う。

「興味あるよね。どんなものができるかわからないの?」

変な誤解しないで!

「でも、でも、試作品ついでに、自分が作っているのと同じレンジだから、きっと美味しくできるって知ってる。」

「そうかもね。」

「だから、あたしが作ったお菓子を食べる第一回を予約……。」

「

「予約。」

・・・ダメだ。

全部話してしまった・・・。

自分の馬鹿さ加減にあきれ、ぐつたりとテーブルにうつ伏せになる。

セヒト向かい側をみると、真由がニヤニヤしていた。

「あたしは何にも言わないけどね。」

言葉では言つてないけど、その表情で何が言いたいのかよくわかるよ・・・。

でも！

「真由。あたしは誰のことも好きにならないんだからね！」

「わかつてゐるよ。」

真由はふっと表情を和らげた。

それから。

「ねえ、夕飯はあたしが作る？ 紫苑より少しは上手いと思つよ。」

“少し”なんて、そりといつ謙遜してゐるよ・・・。

## 15 お菓子作りのあとは・・・

真由が作ってくれたグラタンとマリネサラダは、やつぱり美味しかった。

見た目も味も、あたしが作るものとは大違い。

片付けが済んで、のんびりと杏露酒を飲みながらおしゃべりしているとき、真由が突然言つた。

「紫苑。あたし、隆くんからプロポーズされたの。」

!

幼馴染みの隆くん。あたしの初恋の人。

中学のときには真由と付き合いはじめて、そのままずっと続いていたことは知ってる。

あたしとも、普通に友達としての付き合いはある。

「真由・・・返事はしたの？」

真由の雰囲気が、妙に緊張しているのが気になる。

“おめでとう”って言つてもいいの？

「うふ。あのね、・・・OKした。」

「よかつた！ おめでとう！」

本当によかつた！

「よかつたね！　ああ、嬉しくよー。おめでとー、真由ー。」

自分のことのように嬉しくて真由を抱きしめる。

「もうと早く叫んでくれれば、お祝いにシャンパンくらい用意しておいたの。」

興奮して一気にまくしたててしまつたところで、真由が泣いていることに気が付いた。

「どうしたの？　嬉しそう？」

真由から腕を離して、顔をのぞき込む。

「違う。・・・」「めんね、紫苑。」

「え？　なん・・・で？」

あたしが隆くんのこと好きだったことは知らないはず。  
しかも、10年以上前の話だよ？  
もう、とっくに立ち直つてるけど・・・。

「あたしだけ・・・、あたしだけ幸せになつて・・・。」

え？

「紫苑は・・・あんなに辛いことがあって、今でも傷ついたままな

の」「・・・、あたし・・・。」

まさか・・・、あの「こと」で？

あたしの「こと」が原因で、自分の「ことを喜べないの？」

真由はあたしの肩に額を押し付けて、泣き続ける。

「あたし・・・嬉しかったの。隆くんにプロポーズされたとき、すぐ嬉しかったの。すぐに『はい』って言ったの。」

「うふ・・・・。うふ。」

わかるよ、真由。

あたしもやうだつたから。

それでいいんだよ。

「だけど・・・、だけど、あとになつて、紫苑の「ことを思つて・・・。紫苑はずつと辛いままなのに、あたし、嬉しくてそれを忘れて・・・自分のことだけしか考えられなくて、本当に自分勝手で・・・。」

「真由・・・。」

謝らなくちゃいけないのは、あたしの方だ。  
こんなに心配されてしまつて。

「気付いてから、隆くんに・・・もう少し待つてもうえなにかつて・・・言おうと思つたの。」

「真由ーー、まさかそんなことーー。」

「できなかつたの……。できなかつた。もしかしたら隆くんが怒つて、あたしから離れて行つてしまふかも知れないって思つたら、言えなかつたの。……」めんね、紫苑。あたし、自分の幸せだけしか考えられなくて……。」

「そうじやない。  
そりぢやないよ、真由。

「違うよ、真由。そんなことない。真由は真由で、幸せになつていんだよ。」

「でも。」

「いいんだよ。『めんね、真由。たくさん心配かけちゃつて、』めんね。」

視界が涙でぼやけてしまひ。

真由の結婚について、せつかくのおめでたい話題で泣きたくなんかないのに。

「あたしが弱虫だから……、せつかく真由が幸せになるのに、そんなふうに泣かせたりして『めんね。』

「紫苑。」

「真由。あたし、自分のことみたいに嬉しこよ。本当におめでとう。幸せになつて。」

あたしがつかめなかつた幸せ。

あたしの分も。

「うふ。・・・うふ。ありがと、紫苑。ありがとう。」

真由が涙でぐしゃぐしゃになつた顔で、やつと微笑んだ。  
それから一人で・・・また泣いてしまつた。

よつやく終わったおしゃべりのあと、ベッドの下に並べて敷いたお  
布団から、「紫苑」と声がかかつた。

小さい明かりだけを残して暗くした部屋。  
たくさんの笑いと少しの涙のあとで心地よい疲労感。

「なあに?」

「あのね、紫苑は誰のことも好きにならないって言つてるでしょ、う  
?」

「うふ。」

「でもね、違うと思つた。」

「わうかな?」

「うふ。あのね、誰かを好きになるときつい、最初から『この人を  
好きになろう。』って決めてるわけじゃないから。」

ああ・・・。

「いつの間にか、気が付いたら『一緒にいたいな。』って思つたりしてて、それが“好き”ってことなんじやないかと思つ。」

「うふ・・・。」

「だから、紫苑がいくら『誰のことも好きにならない』って決心していくも、そういう相手に会つたら、心が勝手に動いてしまうと思つの。」

「ふふ。あくまでも、『やうこそ相手に会つたら』ね。」

「やう。『会つたら』ね。・・・ふふふ。」

真由、ありがとう。

「だからね、紫苑。そういうことが起きたら、意固地にならないで、成り行きに任せてみたらいこと思つ。」

「成り行きに任せせる?」

「うん。ダメだったり、やうと『無理ー』って思つし、そう思わなかつたら、そのままだ。」

「そのまま決めないで?」

「そう。決めないし、考えないの。」

「考えない?」

「紫苑は好きになることが怖いんでしょう？　体調が悪くなるへり  
い！」

「うふ・・・・。」

「だから、好きかどうかは考えないの。ただ、無理だと思つたら、  
その時点で終わらせようっていう決意は必要だけど。」

「もううとうと氣の長〜い人じゃないと、あたしの相手は務まらないね。」

「ふふ。 そうだね。」

「もしも、『決めてほしい。』って言われたら？」

「そのときは、紫苑が無理だと思つたら断ればいいんだよ。」

「無理だと思わなかつたら？」

「一緒にいたいかどうか、考えてみるの。」

「一緒にいたいかどうか・・・・。

「『その人がいなくなつたらどうだらう？』って考えてみて、いな  
くなつても平氣だつたら断るの。」

「怒るかもよ。」

「仕方ないよ。どうせ別れるんだから、いいじゃない。」

「そんなもの?」

「そんなものだよ。」

ベッドの下から「あれ?」とこつ声が聞こえて、笑い声。

「なんか、話がずれた。」

と、真由。

「わうだっけ?」

「断る話じゃないんだよ。紫苑が、もしかしたら、誰かを好きになるかもしれないって話だったの。」

ああ、そうか。

「好きになるかな?」

「わうこいつ、防げなこと悪いよ。」

「わう~。」

「うそ。だから、わうこいつときに驚いたり、慌てて拒否したりしないで、成り行きに任せなさいって言いたかったの。」

「うん・・・・、わうか。」

「わう。それだけ。おやすみ、紫苑。」

「おやすみ、真由。」

「つもあたしのことを考えてくれて、本当にありがとうございます。」

暗い部屋の中に微かにアップルパイの香りが漂っている。

その甘酸っぱい匂いと一緒に浮かんできたのは秋月さんの笑顔で・・・

・。

月曜日は、一切れ持つていかなくひや・・・。

月曜日。

前の日に真由と一緒に選んだ小さな紙箱に、アップルパイを一切れ入れてきた。秋月さんに渡すため。

けつこう大きな丸いパイの中で、縁の処理が一番上手にできた場所を選んで。

朝、部屋を出るときに、やつぱり渡すのはやめようかと思つた。忘れたことにしちゃうとか。

秋月さんは、この週末に作るという話はしていない。  
だから、今日渡さなくても、不都合なことはない。

不味いからじゃない。

本当のところ、自分で作ったとは思えないくらい美味しかった。  
田曜日に真由と食べて、自分で感動した。

真由も「これなら大丈夫。」って言ってくれたし。

見栄えが悪いからでもない。

切つてみたら、それはあまり気にならない。

なんていうか・・・“いいのかな?”って気がして。  
手作りのお菓子をあげるって、ちょっと特別な気がしてしまつ。

でも、約束したし・・・お礼だし・・・。

だから、あげなくちゃ！

さうせん迷つた末、ようやく小さな箱を入れた紙袋の取つ手を握つた。

電車を降りて改札口へ向かいながら、周りを見回す田がおどおどしているのが自分で分かる。紙袋を持つ手が震えてる。

あふれあふれひし過ぎて、自動改札機にぶつかりそうになつた。

いない。

いつもなら、たいてい改札口の前後で会つんだけど。

駅の外に出ても、初めて出合つた田がおどりまで來ても、秋月さんには会わなかつた。

どうしよう。

わづ、わづの会社の前だ。

・・・メールしてみる？

お買い物に行くことになつたときに、連絡先は教えてもらつてある。

だけど、なんだか・・・。

ପ୍ରକାଶକ

でも、約束だし・・・。

入り口の手前で立ち止まり、少し端の方によけてぐすぐすと逃げる。

ええい！

お礼なんだから、気にするな！

『おはようございます。今日、試作品を持つて来たんだけど、お昼休みとか、時間はある? 谷村紫苑』

送信！

「えい！」

気合いを入れてボタンを押したら、入り口を入ろうとしていた年配の社員さんが振り向いて笑つた。・・・恥ずかしい。

秋月さん！ 急いで携帯をバッグに入れようとした瞬間、着信のライトが・・・

こんなにすぐ？

「あ、あ、あの、谷村です。」

『紫苑さん、おはよう。』

「あ、こそこそ。あの。」

自分の会社の前で電話をかけるのって、なんだか恥ずかしい！人がいる方に背中を向けてしまつと、ますます怪しい感じがするし・・。

『約束を覚えててくれたんだね。どうもありがとうございます。』

「いえ。あの、あんまり上手にはできないけど・・・。」

『実は今日、僕、出張でね、これから新幹線に乗るところなんだよ。』

『

「え？ 出張？！ 新幹線？！」

緊張の糸が切れて、声がひっくり返つてしまつ。

『うん。だから、すぐ残念なんだけど、受け取ることができなくて・・・。』

「あ、じゃあ、自分で食べるから、気にしないで。うん。全然。』

ほっとして力が抜ける・・・。

『そう？ 本当にめん。今度、僕が作ったのを・・・あ、行かな  
くちゃ。じゃあ。』

『うん。行ってらっしゃい。』

あーあ。

なんだか疲れたよ・・・。

今日一日、大丈夫かしら。

パイの入った紙袋はそのままロッカーに入れて置くことにする。ビルの中って暖かいけど、たぶん、大丈夫でしょう。

自分の席に座つたら、やっぱりいつもより疲れてる。  
どれだけ緊張していたんだろ？

ああ、なんだか机に突つ伏したい気分・・・。

「はあ・・・。」

「朝からため息なんて、どうしたんですか？」

隣から金子さんが声をかけてくれる。  
今日はストライプのシャツに黒のパンツでかっこいいけど、  
やつぱり可愛い。

「ちよっと、朝から緊張することがあつてね・・・。」

金子さんは「そつなんですか？」と不思議そうに首をかしげる。

不思議・・・かもね。

試作品のお菓子を渡すって考えただけで、あんなに緊張するなんて。  
試食してもううくらい、何でもないはずなのに。

論理的に考えれば何でもないこと。

でも、感情が。

動搖を静めて仕事に集中していたら、午前中はあつとこつ間に過ぎた。

お昼休みにコンビニに行く前にロッカーを開けたら、アップルパイの匂いがふわっと広がる。

「あら。 じんなに・・・。

「あれ？ いい匂いがしますね。」

金子さん、気付いた？

「あ、もしかして、谷村さんですか？」開けた瞬間に・・・。

ばれた！

「あ、これ？ ええと、」

持つて来たのに、持つて帰るって言つたら、変だよね？！

「む、お皿に食べよひと思ひ。」

「わあ。何ですか？ じの匂いだと・・・。」

「あの、アップルパイだよ。あとで一緒に食べようね。少しだけど。」

「

「いいんですか？ 楽しみ！」

あたしが作ったことは言わないでおいつ……。

コンビニから戻るときにロッカーからアップルパイも持つて、職場に戻る。

いつもとおり打ち合わせ机に買って来たものを並べ、そこに、パイの入った紙箱も置く。

手が震えちゃう。

自分が作つたものを他人に食べさせられて、怖い。  
真由はよくそんな仕事ができるよね。

中がどうなつているのか気になつて、自分で開けてのぞいてみた。

・・・無事だ。

そんなに下手には見えないし。

「谷村さん、それ、本当にいい匂いですね。ビールのですか？」

「え？」

「ビールのお店で買えるのかな、と思つて。」

「あ、これ？」

びぐびくしてゐるに気付かないといいんだけど。

「ええと、これ、手作りなの・・・友達の。」

買い物に行きたいなんて言われたら困るし、自分が作ったとは怖くて言えない。

「土日で友達が遊びに来て、作ってくれたの。」

「わあ、そなんですか！ そんじゃえば、お友達が来るって言ってましたよね？ 見てもいいですか？」

「ああ・・・真由、『めん！』

真由は、もつと美しく作れるのに・・・。

「どうぞ。持つてくる間に、少し崩れちゃったみたい。」

箱を開いて金子さんの方に向けると、金子さんが目を輝かせた。

「美味しそう！」

「うん。美味しいよ。家にまだあるの。」

「これは言つても大丈夫！」

買つてきたお昼を食べ終わつてから、給湯室から包子を取りてきて、パイを半分に切り分ける。

縁の部分がザクザクと音がする。

「うーーの生地も美味しいんだよ。」

友達が作つたことにしたから、血漫しても平氣だ。  
少し余裕ができて、なんとなく楽しくなつてきた。

「紫苑～。」

廊下からハスキーなぐるぐる声が聞こえてきて、声と回じよつじくろくろくした様子で龍之介がやつて来た。

「どうし・・・」

「紫苑！ それなに？！ もしかしてアップルパイ？！」

あたしが「どうしたの？」と言つ暇もないほど勢いで、龍之介が駆け寄つてきて机に覆いかぶさるように乗り出してくれる。

「どうしたの、これ？！」

あまりの勢いに思わず身を引いてしまう。

「・・・持つて來たの。」

間が抜けた答えしか出て来ない自分に、ちょっと呆れる。

そんなあたしと“理解不能”という顔をした龍之介を見て、金子さんが笑いながら説明してくれた。

「谷村さんのお友達が作つたんですって。」

「手作り？！ あ、紫苑の友達って、パーティシエだっていう友達か？」

「え？ ああ、うん、そう。」

ああ・・・。

真由、本当に「めん」！

「え？ 本職のお友達なんですか？ わあ、すごい！ いただきま  
す！」

「紫苑。俺も食べたい！ 俺、アップルパイ、すっげえ好きなの！  
「じつちの半分、ちょうどいい！」

「龍之介、騒ぎ過ぎぞ・・・。」

「子どもじゃないんだから・・・。」

「だつてさー、午前中、ものすごく忙しかったんだぞ。月末が目前  
なのに、インフルエンザで休みの人が出で・・・。」

ああ、それで疲れた顔してるのが。

「谷村さん、これ、本当に美味しいです。」

金子さんがあざと輝かせて言へ。

「ですが、本職の方は違いますね。」

「ま、まあ、彼女の店のレジippyとは違つただけどね。」

買ひに行くとか言われたら困つちやう。

「なあ、紫苑。俺、午後も忙しいんだから、可哀想やつだと思つて、  
これちよつだい。」

龍之介が手を合わせて頼んでくる。  
そんなに好きなのか・・・。

「わかつたよ。じつで。家にまだ残つてゐる。」

「やつた！」

龍之介はそのまま手でパイをつかんで、三角形のどがつた方から一  
気に半分くらいを大きな口でパクリと食べた。

その様子を無言で見守る。

どうだね？・・・？

もぐもぐと口を動かしていた龍之介が笑顔になつた。

「紫苑。これ、すこしく美味しい。」

「本當？」

「やつた！  
嬉しいよ～！」

「うん。俺、じつこの好き。特に、皮が。店で売ってるのとは違  
うな。」

「そつなの。普通のパイみたいに、薄い層が重なつてゐんぢゃない

んだよ。」「

だから、あたしでも作れるんだけど。

「うん。」の、中身がしみ込んだ底もいにけど、口の端っこも  
美味しい。」「

2口で全部食べきって、龍之介は満足そう。

「ああ、美味かった。」に顔出してよかったです。」「

こんなに褒めてくれるなんてウソみたい。  
嬉しいけど、なんだか、ちょっと恥ずかしいな。  
あたしが作ったってわかつても、同じ感想を言つてくれるかな？

「そうだ、紫苑。」「

「なに？」

「これにしてくれ。」「

「は？」

「ほら、約束したケーキ。」「

「あ、ああ。」「

「これを友達に教わって、練習してくれよ。」「

「本当にこれでいいの？」

そんなに気に入ってくれたんだ……。

「“これで”って、お前、余裕だな。」

だって……そりや、そりだよ。

「い、いや、そんなことないよ。生地を混ぜるのも、りんごを切るのも、形をちゃんと作るのも、大変……そりだつたよ。できるかなあ？」

「多少、形が悪くてもいいぞ。この味と食感があれば、とりあえずアップルパイって認めるから。」

「うん……わかつた。練習する。」

「谷村さん。そのときはわたしにも食べさせてくださいねー。」

「うん。……頑張るね。」

こんなに気に入ってくれるなんて……。

誰かに美味しいって言ってもらえるって、すごく嬉しい！

それに、龍之介があたしを褒めたことって、初めてかもしれない。

……本人は真由を褒めたつもりだらうけど。

はっ！

秋月さん、試作品を食べる第一叩じやなくなつひやつた！

・・・まあ、いいか。

よく考へたら、第一叩は眞由だよね。

すでに第一叩じやないんだから、そんなに気にする」とないか。  
一応、約束を果たそうとしたことは解つてもらえてるし。

それにしても・・・やっぱり嬉しい！

龍之介が気に入ってくれるなんて。

しかも、もう一度食べたいって思つてくれたんだよ。

ふふふ。

何も知らずにね。

見なさい！

あたしだつて、やればできるんだから！

「紫苑さん、おはよー。」

朝の改札口。

秋月さんのいつもの中の笑顔。

「あ、おはよー。出張、戻りだつたんだね。お疲れさま。昨日は朝からごめんなさい。」

「僕の方こそ、『めん。せつかく持つてきてもらつたの』。」

「うん、気にしないで。お昼に食べたから。でも、次はいつになるかわからぬけど……。」

本当の気持ちを言えば、渡さないで済んでほつとしたつていつ部分がけつこう大きい。

もしも秋月さんに渡した場合、どんな感想が返ってくるかと気が気がしない時間を過ごさなくてやならない。

渡したその場で食べてもらえれば緊張する時間は短くて済むけど、朝渡して、感想は翌日、または翌々日……なんてことになつたら、あたしは疲れ切つてしまつ。

「うん、ひとつでもいいよ。でも、龍之介にあげる前がいいな。」

「うーん！」

すみません！

もひ、あげちゃいました！

まあ、本人は知らないけど……。

「も、もし、2回目で上手にできたら、それを龍之介にもあげちゃうから、同時にいとになるけど？」

うん。

昨日の様子だと、もう一つ可能性もゼロじゃない。

「あれ？ その様子だと、昨日のはけつ いつこい出来だったんだ？ あーあ。もつたいないことしたなあ。」

「あ、いえ、全然自慢できるようなものじゃなくて。」

でも、一応、味だけは合格点かな？

「そのときは、朝もらえればいいかな。職場に着いたらすぐに食べれば、絶対に龍之介よりも先だよね？」

「ん・・・まあ、そうだね、きっと。」

びつしてそんなに龍之介にこだわるのかな？

“第一号” つていうのは、もしかしたら龍之介のことだけを言ってたの？

もしも龍之介が秋月さんにして、昨日、アップルパイを食べたっていつも話をしたら・・・どちらにもウソをついてることがバレちゃうよ~。ああ、どうか一人が絶対に会いませんよう！

・・・つていうのは無理か。

あたしがこんなにょっぢゅう顔を合わせてるんだから、秋月さんと龍之介だつて、けつこうすれ違つたりしてるよね？

じゃあ、せめて、二人の間でこの話題が出ませよ！」

「そうだ。紫苑さんにお土産があるんだ。」

お土産？

「昨日、出張で会った人に、地元で人気のあるお土産を教えてもらつたんだよ。はい、これ。」

そつぱつて、白い紙袋を渡してくれた。

軽い。

振つてみたら、かさかさと音がする。

「最中のなかにあんこの粉が入つてて、お椀に入れて熱湯をそそぐとお汁粉になるんだつて。最中の皮がお麸みたいになるつて言つたよ。」

お汁粉か。

寒くなつてきたから、じつこのつてようどいいいね。

「なんだか楽しみ どうもありがとや。」

夜、もうつたお汁粉を作つてみた。

お椀に入れてお湯を注いだら、最中の中から松や梅の花のお数やあられが出てきて、そのかわいらしさに感動！携帯で写真を撮つて、お礼のメールと一緒に秋月さんへ送つた。

そして、真由からの電話。

一瞬、秋月さんからかと思つて「キッとしたあと、真由の名前が表示されてることに気付いてほつとする。

「ねえ、秋月さん、アップルパイの」と向て言つてた？

電話に出た途端、あこせつむせりむじ秋月さんの名前を出されてしまうキッとする。

「あ、あ・・・アップルパイ？　ああ、あのね、秋月さんには渡せなかつたの。」

「まさか、わざと持つていかなかつたんじや・・・？」

「違つよ。秋月さんが出張で会えなかつたの。」

「なんだ。どんな様子だったか訊いつと聞つたの。いやあ、持つていつた分は？」

残念そうな真由の声。

「龍之介が食べちやつたよ。」

「え？… どうこう」と。

真由が驚く。

当然だよね。  
龍之介には、もとと上手になつてから食べさせらばずだつたんだか  
ら。

お皿に金子さんと食べようとしたら龍之介が来たことを話すと、真  
由は電話の向こうで大笑いした。

「結局、龍之介くんの口に入つたんだ！ あははは…」

「まあね。龍之介は真由が作つたと思ってるけど。『めんね、あん  
なに不格好なのを真由のだつて言つたりして。』

「いいよ、そんなこと。美味しいって褒められたんだから。だけど、  
可笑しい！ 知らないとはいえ、本人に向かつて褒めて、リクエス  
トまでするなんて！ 紫苑、すげいじゃない…」

「うん、そうなの。あたし、自分が作つたものを、あんなに美味し  
いって言ってもらつたのって初めてだよ。びっくりしたけど、もの  
すげく嬉しい。」

「よかつたね！ 少しは自信がついた？」

「うん。次も頑張るつけて思えるよ！」になつた。

本当に、誰かに褒めてもらえることで、みんなに自信がつくなんて、

思つてもみなかつた。

「秋月さんは残念がつたでしょ、つ？」

「まあ、少しさはね。でも、次があるから。だけどね、やたらと『龍之介より先』つていうことにこだわるんだよ。」

「ああ、やつぱつ。」

「『やつぱつ』って？」

「紫苑は気にしない方がいいよ。男の人は、いつまでたつても子供だつてことだよ。」

「ふうん。だけどね、けつ『ハズキルキモのなんだよ。』

「何が？」

「だつて、秋月さんは月曜日にあたしが作ったものを持って行つたつて知つてるでしよう？ でも、龍之介には真由が作ったものだつてことになつてて、しかも食べちゃつたんだよ。秋月さんは龍之介よりも先に食べるつてことにこだわつてゐるし、もし秋月さんと龍之介が会つてアップルパイの話題が出たらと思つと、もう・・・。」

「そうか。職場が近いんだもんね。」

「うん。同僚に自分で作つたつて言えなくて出たウソがどんどん影響が大きくなつちゃつて、今考えると、あのときに本当のことと言つておいた方が簡単だつたんじやないかと思つよ・・・。」

「うん。たしかに。でも、仕方ないよ。バレたら笑って謝ればいいじゃん。」

「ふう・・・。それしかないね。」

「それに、龍之介くんは怒らないよ。もともと紫苑のお菓子を食べるつもりでいるんだから。」

「そうか。」

“壊めた言葉を返せ”へりこは言われるかもしれないな。

「次はいつ作るの?」

「うん・・・、忘れないことがことは思つてるけど、龍之介に壊められて安心したのか、ちょっとやる気が出ないみたいな・・・。」

「そつか。まあ、無理しないでね。作つたら、写真を送つてよ。あたしも紫苑の進歩を見たい。」

「了解。楽しみにしてて。」

それから真由は、結婚式が来年の6月の末に決まったことを教えてくれた。

幸せになれるジューーン・ブライド。

これからは、新居探しや結婚式の準備で忙しくなりそうだ。

隆くんとは中学からのお付き合いだから親同士も顔見知りだけど、やっぱりあらためて会食とかもするそつだし。

「でも、結婚する前に、紫苑と一緒に旅行にでも行きたいな。」

「いいね！ 隆くんに取られる前にねー あたしはじつでも暇だから、真由の口程こ命令わせるよ。」

そうだ。

いつも、何でも打ち明け合って、分かち合ってきたあたしたちだけ  
ど、これからは真由には家族ができる。  
真由の一番はあたしじゃなくて、隆くんになるんだ……。

そう思ひたり、さうひと瞬じくなつて、脳がちくつと痛んだ。

紫苑。久しぶりだね。

「……コウ?」

そうだよ。

「元気だった?」

うん。

「こつも、そばにいてくれてる?」

もちろんだよ、紫苑。僕はいつも紫苑のそばにいるよ。

「コウ。まさか、また……。」

紫苑。僕は紫苑が不幸になることは絶対にしない。

「うん……。あたしはコウがいてくれればいい。それだけがあたしの望み。それだけで幸せ。」

……。

「真由が結婚するつて。」

「うん。一緒に聞いてたよ。

「ほかの人たちも、きっとだんだんと結婚するね。」

そうかもしれないね。

「あたしね、ユウ。べつに、そういうみんなの」と、羨ましいことは思わないよ。」

そう?'

「だって、あたしにはあたしの幸せがあるもん。」

そう。

「そうだよ。あたしにもちゃんと信用できる友達がいて、仕事もあって、自分で生活できている。そうだ! 今度、何か習い事でもやってみようかな? 今まで興味があつてもできなかつたこととか。

それもいいね。

「ああ、来月はスノボにも行くんだし。」

そうだったね。きっと楽しそう。

「ユウは見ることしかできなくて残念だね。」

でも、紫苑が楽しいなら、僕も樂しいよ。

「そうなの?」

うん。紫苑が楽しかったり嬉しかったりすることが、僕も嬉しいんだよ。紫苑が幸せなら僕も。

「そう。じゃあ、あたし、毎日を楽しく過ごすね。コウのために。」

僕のためこじやなくて、紫苑は自分の幸せを考えて。

「そうか。目が覚めているときは、コウのことばかりで寝てるんだもんね。」

「そうだよ。」

「わかった。あたし、いつも幸せでいらっしゃるみつた頑張るね。だから、いつもそばにいてね、コウ。」

「もちろんだよ、紫苑。いつもそばにいるよ。」

紫苑。

僕の大切な紫苑。

・・・・・

気付かない？

きみが僕と夢の中で話せるのは、きみが淋しいときや悲しいときだけ。

きみが誰かにせばこいてほしことをつとただけ。

だけじ。

僕はきみを言葉で慰めることしかできない。

きみに触れることはできない。僕には実体がないから。手を握つてあげることも、肩を抱いてあげることも、涙をぬぐつてあげることも・・・。

紫苑。

僕は辛い。

僕ではきみを本当に幸せにすることはできない。

きみは求めてこむのに・・・。

紫苑。

真由の言葉もきみを導いてくれる。

勇気を出して、紫苑。

いつも、そばで見守つてこるよ。



12月に入ると、ロッカー室や昼休みの女子トイレでは、楽しげにひそひそ話をする風景がいつもよりも目にに入るようになる。

告白する？

プレゼントは何？

デートコースは？

クリスマスシーズンがやつて来る。

女の子同士だけではなく、同僚の男の人たちからも、嬉しそうな、恥ずかしそうな顔で相談されることもある。

あたしはガサガサした性格だからあんまり“女の子”っぽいイメージがなくて、そういう話をしやすいみたい。

もちろん、誰もが好きな人がいるわけではない。

あたしは去年も、一昨年も、そういうメンバーで集まるクリスマス・イブの宴会に参加していた。

今年もたぶん、そうだろうな。

・・・まあ、声がかからなくてもいいかな。

一人でのんびり過ごすっていうのも、悪くないかも。

12月はクリスマスの前に、忘年会のシーズンもある。

職場の忘年会のほかに、仲良しのメンバーで行くのが毎年2つ。同期の女子会と、龍之介がいるいつものグループ。けっこひきしこ。

まずは今日。同期の女子会。

蒸し鍋をメインにした和食のお店。

参加者13名。

幹事は知佳ちゃんとあたし。

「知佳ちゃん、お待たせ！ 遅くなつて」「めん。」

1階のロビーで待ち合わせをしていた知佳ちゃんに駆け寄る。みんなより先にお店に着くつもりでいたけれど、仕事が片付かなくて、遅くなつてしまつた。

「大丈夫だよ、間に合つから。美歩も一緒に行くつて言つてたから。  
・・あ、来た。」

美歩は今日もやつぱりメイクも髪型も決まつてる。

もちろん、コートの中の服だって、きっとお洒落なはず。

男の子がいてもいなくても、綺麗に見えることが美歩には重要なのだ。

外に出ると、空気がピリリと冷たい。

空は真っ暗。今日は月が出ない日なのかも。

街灯やビルの窓からの明かりがたくさんある「こ」では、星もほとんど見えない。

まあ、星を見上げるほど広い空ではないけれど。

予約したお店は隣の駅。

案内されたテーブルは、せりんと壁で仕切られた部屋だった。これなら盛り上がって黄色い声で歓声をあげても、ほかのお客さんたちに睨まれないで済む。

同期の女子会はいつも賑やか。

今日もお酒が回る前から、すでに酔っ払いがいりみづな騒ぎ。上司の悪口、同僚に対する苦情、困ったお姉さんのこと、彼氏とのケンカ。

話題は死きない。

辛口のコメント、同情のため息、同意の笑い声・・・。

その合間を縫つて、知佳ちゃんが嬉しそうに小顛でしゃべる。

「あたしね、今年のクリスマスは原田さんと出かけるの。」

「原田さんって・・・。」

「もしかして、原田諒さん？！ 龍之介くんの友達の？」

すぐには思ひ出せなかつたあたしに代わつて、隣にいた美歩が反応する。

「そりゃ、誘われちゃつた

うわ～～。

本当にあるんだね、合コンの成果つて。  
・・・あれつて、合コンつて言つてもこいよね？

「いいなー、知佳。」

美歩がため息をつきながら言ひ。

「どうして？ 美歩だって、たくさん誘われるでしょう？」

「誘われるけど、もうこう人たちはダメなの。」

「どうして？」

「あたしの見た目だけしか見てないから。」

「やうなの？」

「そうだよ。知佳は、誘われる前に原田さんと何回会った？」

「3回……かな。」

「電話で話したりもしたでしょう？」

「うん。電話の方が多いかな。」

「原田さんはそうやって、ちゃんと知佳のことをわかつてから誘つたんだよ。特別な日に一緒にいてもいい相手ってことで。」

「……なんか、そんなに真面目に言わると恥ずかしいけど。」

「ちょっと赤くなつてる知佳ちゃん、可愛い。」

「だけど、あたしのことを誘う人って、いきなりなんだよ。」

「そりなんだ？」

「例えばね、同じ職場の人だったりしたら、仕事中に見ててくれたんだなって思う」ともできるけど、全然つながりがない人ばかりなの。」

「どんな？」

「隣の課に来てる営業の人とか。」

「少しは話したことあるんじゃないの？」

「あいせつへりこはね。でも、いきなりクリスマスはないでしょ？」

「そうか……な。

「それから、たまたま来たお密さん。」

「「は？」」

知佳ちゃんとあたしの声が重なった。

「廊下を歩いてるときに『総務課はどうですか？』って訊かれて案内したら、その場で誘われた。」「

すごいなー。

あたしにはそんなこと絶対に起こらないと思つ。

「でも、それって、美歩の態度が気に入つて……とかじゃないの？ 性格の良さがにじみ出ていた、とか。」

知佳ちゃんが尋ねる。

「もしそうだつたとしても、あたしはその人のことを知らないんだから、やつぱり嫌だよ。」

「一日惚れつていう可能性もあると思つけど？」

「あたしはそういうのは無理。どんな人かわからないのに好きになるとか、一人だけで出かけるなんて、ありえない。」

「美歩つて、けつこう慎重なんだね。」

「そつかな？ 服やメイクが派手だから、気軽に遊んでるように見えて、そのギャップでそう感じるんじゃない？」

たしかに今日みたいな席では美歩は派手だけど、仕事中の服装はいたつて普通だ。

男の人があのやり場に困るような服装はしないし、メイクだつて、上手だけど、派手ではない。

そもそも美人は、どんなことをしても目立つてしまつ宿命なんだよね。

「美歩は好きな人はいないの？ 美歩からアプローチすれば、断る人なんていないと思つけど？」

あたしの質問に、美歩はため息をついた。

「あたしが好きになる人はみんな、別な人を好きになっちゃうんだよ。」

「美歩みたいな美人でも、そんなことあるんだ……。」

「あるいは決まってるじゃん！　だいたいね、男の人の好みがみんな同じだつたら、世の中大変なことになるよ。」

たしかに。

「紫苑はどうなのよ？」

知佳ちゃんが興味津々の顔で訊く。

「何が？」

「秋月さんと、あれから何もないの？」

え？

「そうそう。偶然の出会いからちやんとした知り合いになつて、そのあとは？」

美歩も一緒になつて詰め寄つて来る。  
酔つ払つてるのかな？

「そんな、特別なことはないけど……。」

「どうしてみんな、そんなに期待するんだらうへ。」

そりやあ、あれからお菓子作りの道具を買ひに行つたけど……、それって……？

あれつてどのくらい特別なの？

うーん。

試作品をあげる話も特別？

最初はちよつと『キヤドキ』したけど、時間が経つてみると、そのあと秋月さんと話すのも特に変わったことはないし、なんでもなにことだつたよつと思つたけど……。

「考へてる。何かあつたんだね。」

「うん。あつたんだね、この様子は。」

知佳ちゃんが美歩が田を見交わして話している。  
隠すと余計に盛られそう。

「やだな。ちよつと買い物にせき合つてしまつただけだよ。」

「出かけたの？ 一人で？」

「うふ・・・まあ、やつ。」

あれれ？

この様子だと、勘違しされやつかな？

「でも、一回だけだよ。それに、やつしても必要があつたんだから。」

「ふうん。」

二人とも、その田は絶対に誤解してるー。  
なんでもないって言つてるのにー。

「ねえ、紫苑。高木くんとはどうなの？」

え？ 龍之介？

「そうだよ。あたしも本当はずつと『氣』になつてるんだ。」

知佳ちゃんも美歩も、今日はどうしちゃったの？  
いつもはあたしのことなんか話題にならないのに。  
二人とも酔っ払つてるの？

「龍之介とは普通に友達付き合いだよ。知佳ちゃんだつて、美歩だつて、龍之介と仲良く話すでしょ？」

どうして、あたしだけ言われるのか解らない。

「あたしたちよりも紫苑の方が、ずっと仲がいいよ。」

ああ。

送つてもううほど仲がいいのに、『お友達』っていうだけの関係なの？ つてことか。

みんな、何も言わないけど、そつこつふつに見ているのかな？

「でも、何もないよ。」

「やうやつて、誰のことも“何もない”って言つんだから、紫苑は。」

美歩が呆れた顔をしてため息をつく。

「だつて、仕方ないよ。」

あたしは誰のことも好きにならないんだから。

「じゃあ、あたし、龍之介くんに頑張ってみようかな?」

え?

「え? 美歩が?」

知佳ちゃんが驚いた顔をする。

「なーんて。冗談だよ! 今さらね。」

そういつて美歩は、飲み物のお代わりを注文した。

それを隣で聞きながら、あたしは胸がドキドキしてる。

本当に冗談?

そう尋ねたい。

でも・・・、もうタイミングを逃してしまった。

あたし、もう龍之介に送つてもううのをやめた方がいいのかな・・・?  
?



同期の女子会のあと、土曜日、アップルパイに再挑戦。  
あんまり時間があくと、せっかくの口シを忘れてしまつかも知れないと気付いて、ちょっと慌てて。

今日は真由がいないから不安だったけど、実際にやってみたら意外と記憶に残っていた。

前回、真由が手を出さないでいてくれたのは正しかったとしみじみ思った。

おかげで、一人でもなんとか最後まで行き着いたんだから。  
形を整えるのも、この前よりは手早くできた。まだ、上手に、とは言えないけど。

それに、龍之介に美味しいって言つてもうつたことが励みになつて  
いる。

次もあんな顔して食べてもらつたらいいな、と思つたら、作るのが楽  
しかつた。

明日、食べてみて美味しかつたら、これを龍之介に渡して、あの約  
束はおしまいにしちゃおつかな？

でも、この縁の波型がもう少しなんだよね・・・。

その前に、秋月さんにもあげなくちや。  
美味しいって言つてくれるかな？

そういえば秋月さんは、同じものを自分でも作るんだよね?  
自分のと比較されたら怖いな・・・。

焼き上がったアップルパイは、きつね色で美味しいそうな匂いがする。早く食べてみたいけど、せつかくだからもうちょっと落ち着くまで・

・明日の朝まで待とう。

前回、次の日とその次の日では、少しだけ食感とか、ずつしり感が違つ気がした。

こつやつて待つことも、今回は楽しみの一部になつている。

真由に写真を送る約束を思い出して、さっそく写して送つた。

よく考えたら、これを一人で吃べるのは大変かも。

美味しかつたら秋月さんだけじゃなくて、金子さんにも持つていてあげよう。

夜、そこそこ満足感に浸りながら形のいびつなアップルパイを見ていたら、秋月さんから電話がかかってきた。

「明日、ちょっと会えるかな？」

「明日・・・は何もないけど。あ、ちょっとよかつた。」

「なに？」

「今日、2回目のアップルパイを作つたの。」

「本当？ ジゃあ、明日・・・。」

「あ、待つて。美味しいかどうか、わからないの。まだ食べてないから。」

「試作品をもうひとつ定だつたんだから、それでいいよ。」

「そりかもしれないけど、あんまり不味いと恥ずかしいから、自分で食べて、大丈夫だつたら持つていぐ。」

「だめ。明日じゃなくちゃ嫌だ。絶対にそれがいい。」

可笑しい！

秋月さん、いつたいどんな顔をしてこんなことを言つてゐるんだらう。ちょっと口をとがらせて・・・？

「秋月さん、ビーハしたの？ 子供みたい。」

あたしが面白がつてゐる気配を感じたのか、秋月さんもくすくす笑う。

「実はね、僕もこの前のお詫びにチョコレートケーキを焼いたから、渡したいんだけど。」

「え？ お詫びって、何かあつたつけ？」

「せつかく持つて来てくれたアップルパイを受け取れなくて・・・。」

「

あのこと？

「でも、あれはべつに秋月さんが悪いんじゃないし、出張のお土産ももらつたし・・・。」

「だけど、それじゃ、僕の気持ちがおさまらないから。」

「ええと、みんなに『食』してもいいことたべて、チラ チラ ハートケーキを作つまし

「ああ・・・、あの、わかつた、せつせつひよ。」

はい？

「紫苑ちゃん食べてもいいことたべて、チラ チラ ハートケーキを作つまし  
たー、どうぞ、せつせつだへん！」

「えつ・・・。」

デキン。

胸が・・・息が苦しげ。

それは、つめり・・・。

「ええと、あの、あたし・・・。」

「うわあねばここんだぬいへ・

今、断るべや？

デクン、デクン、ヒルのかみに鼓動が聞こえる。

「あの・・・。」

ああ、どうしよう？

何で言えぱこいの？

「紫苑ちゃん。」

ゆっくりと落ち着いた、やせこ声。

「はー。」

「とりあえず、明日、会えないかな?」

とりあえず、明日・・・。

「僕が言ったことは考えないでいいから。」

今は何も考えなくていい?

言葉の中に、秋月さんの優しい気遣いが込められていて、肩から力が抜けた。  
あたし、こんなに緊張してたんだ・・・。

「うん・・・。明日。大丈夫。」

「じゃあ、一一時に。いい?」

「うん。わかった。」

深呼吸しながら答えると、秋月さんがクスッと笑った気配。

「絶対に紫苑さんの試作品、持ってきて。約束だよ。」

優しく囁くような口調で、いつもの楽しげな笑顔がふわんと田川に浮かぶ。

またもや心臓がドキンと鳴る。

「うん・・・わかった。」

とつあえず、明日。  
今は何も考えなくていい。

一夜明けてみると、とてもいい天気。  
窓から深く差しこんでくる光で部屋が白っぽく輝いて見える。  
夜にはぐるぐると堂々巡りをするだけだった心配事も、朝の光の中  
では簡単に解決しそうな気がする。

『成り行きに任せてみたらいいと思つの。』

ぽん、と真由の言葉が頭の中に浮かぶ。

そうだね、真由。

どうなるか分からぬもんね。

先回りして、くよくよ考えても仕方ないよね。  
秋月さんも、『考えなくていい』って言つたし。

さて、何を着て行こうかな?

・・・とつあえず、ダウンベストはやめよ。

朝食に食べてみたアップルパイは、前回と同じように美味しかった。  
これなら安心して秋月さんに渡せる。

龍之介はどうしよう？

もう少しきれいにできるのを待つべき？

だけど・・・。

龍之介の喜ぶ顔が見たいな。

『美味しい！』

とにかくこして、大きな口を開けてアップルパイを食べる龍之介が  
皿に浮かぶ。

でも、形がね・・・。

まあ、いいや。

帰ってきてから考えよう。

待ち合わせはいつも乗り換える駅のホーム。

毎年大きなクリスマスツリーが飾られることで有名なショッピング  
モールに行く予定。

秋月さんはグレイのダッフルコートに黒いジーンズを履いて、オレンジ色のリュックを肩にかけている。

いつものちょっとカワイイ笑顔がますます大学生みたいに見える。  
あたしはひざ丈の裏がふかふかのカットソーのワンピースにブーツ、

こげ茶色に白い模様が入ったニットのポンチョ。  
絶対に男の人とかぶらない服を選んできた。

秋月さんがあたしに気付いてにっこりするのを見て、ちよつと照れくさくなる。

「かわいいね。」

ストレーントに褒められて、ますますびきまきしてしまつ。  
悟られないように平氣なふりをして、

「秋月さんは大学生みたい。」

と笑つたら、秋月さんも照れたように笑つた。

アップルパイを持つて来たかどうか尋ねられて頷くと、「やつた！」  
と喜んでくれた。

何て言われるかドキドキものだけど、その笑顔を見たら、持つて来てよかつたと思つた。

目的の駅で降りて、ショッピングモールに向かう田口タイルの遊歩道をぶらぶらと歩く。

今日は風がないから、外にいると日向ぼっこをしている気分。

「お皿は何か買つて、あそこの公園で食べよつか。」

秋月さんの視線の先には芝生がきれいな公園が。

ボールやバドミントンで遊んでいる家族連れから少し離れた場所に、  
木製のテーブルとベンチが並んでいる。

「いいね。何がいいかな?」「

「温かいもの、かな? テザートは持つて来てるしね。」

「え?... ううで食べるの?...」

やつぱり不安・・・。

大丈夫なんだろ?つか?

「せつかくだから、紫苑さんが僕のケーキを食べてどんな顔をするのか見たいな、と思つて。」

その笑顔を見たらあたしも楽しみだけど・・・。

「あたしさひよつと心配。」

小さくため息が出た。

「僕の腕が?」

秋月さんがちよつとからかうよつと軽い。

「まわか! もうじやなくて、あたしの方。秋月さんは同じものを自分で作ったことがあるんだもん。比べられたら絶対に負けるから。」

「

「比べたつしなよ。べつのものだと思つて食べれば・・・。」

「やつぱつ、同じレシピで作つても、違つものができないと思つてるんだ! いひなつたら、どんなに不味くても、全部食べてもいいつか

らね。」

怒ったふりをしてにらむと、秋月さんが「あはははー」と笑つた。  
それを見たら、あたしもとても楽しくなつて、一緒に大きな声で笑つてしまつた。

11時半を過ぎていたので、ショッピングモールの外側に並んでいる屋台でお昼に食べるものを物色。

お昼になる前のせいか、お齧さんはまばらだ。

クレープ、ホットドッグ、タコス、アイスクリーム、焼き鳥、丼もの・・・。

「うーん・・・、なんとなく決め手がないなあ。」

秋月さんがつぶやく。

あたしも同感。

何がどうなのかよくわからないけど、『これじゃない』って思つてしまつ。

「向こうにもう一つあるね。あ・・・。」

あれがいいな。

「「おでんー。」

ピッタリ同じタイミングで声が重なる。  
あんまりピッタリで、顔を見合わせて吹き出した。

「セツニエバね。」

笑つて、いたり思つ出した。

あのとわむ、ピッタリのタイミングだつたつ。

「秋月さん、覚えてる? 初めて会つたときの『』と。」

「ああ、朝、交差点で・・・。」

「うふ、うふ。あのときね、あたし、金木犀の名前が思い出せなくて『』の花つて何で『』の名前だつけ?』って考えていたの。」

「ああ、セツだつたんだ?」

「セツなの。秋月さんが、あたしの質問に答えるみたいに『金木犀。』って言つたから、すぐくびつくりしたんだよ。だから、秋月さんのことをセツと見てみたの。」

あのときは、本当に驚いた。

驚いたし、可笑しかつた。

秋月さんの氣まずそうな顔は、今でもまつひとつ想つ出せる。

そのあと、とても楽しい氣分になつたことも。

「ふふ。あのあとね、もしかしたら、自分が独り言を言つてたんじやないかつて思い出してみたりしたんだよ。」

「はははー。でも、独り言を言つたのは僕だけだつたつてわけだね。」

「

なんだか不思議。

その人と、今いつやって一緒に歩いてるんだもんね。

## 21 冬の陽だまり

屋台でおでんを買うのは初めて！

夜のおでん屋さんは違うのかもしれないけど。

コンビニのおでんよりもつゆの色が濃いかな？

その分、味がしみ込んでいるような気がする。

色の濃いつゆの中に白や茶色のおでんダネが半分隠れながら沈んでいて、なんとなくかわいい。

「たくさん買って行け。」

秋月さんがうきつけした様子で、次々と注文する。

「大根、はんぺん、たまご、厚揚げ、それから……。」

「秋月さん、あたし、たまごが好きだからもう一つ。」

「じゃあ、たまごは二つ。あとは？」

「ワインナー巻きとちくわ、ぶと巾着。」

一人でどんどん注文したら、最後に屋台のおじさんが渡してくれた発泡スチロールの入れ物は特大サイズだった。

それを見て、二人で一緒にまた笑う。

秋月さんと一緒にいると何でも面白くて、笑うことがとても簡単。

温かいお茶を買って、さつき見えたピクニックテーブルまでのんびりと歩きながら、秋月さんが話し始める。

「あの日、お廻<sup>廻</sup>過<sup>過</sup>ぎにも紫苑さんと会つたよね？」

「うふ。あのときも、びっくりしたよ。」

「僕もだよ。独り言<sup>言</sup>に、いきなり返事をされたから。」

そのときのことを思い出したのか、秋月さんが、フフフ・・・・と笑う。

「あのとき、僕は花壇の花を見ながら、前に勉強したガーデニングの植物のことを考えていたんだよ。」

「ガーデニングの勉強をしたの？」

「大学のころにね。建物の設計だけじゃなくて、庭とか公園のことも知りたかったから。」

「それで植物の名前とか、よく知ってるんだ。」

「詳しく述べていいほどではないけど。」

恥ずかしそうに讷<sup>讷</sup>謙遜して、秋月さんが続ける。

「あの日、あそこを歩きながら、植えてある花の名前を思い出して確認してたんだよ。そうしたら、いきなり紫苑さんが返事をして振

り向いたから、全然わけがわからなくて。」

「ああ、やつやつ。秋月さん、田を真ん丸にして驚いてたよ。」

「そうだらう？ 本当に驚いたんだから。すぐに、朝の人だつて分かつたけど、なんで返事をされたのかはやつぱり分からなくて。」

そういうえば、あたしもすぐこ、朝会つた人だつて分かつたんだつたな……。

「しかも、そのあと『びい』でお会いしたのか思い出せない』って言われて、思わず“朝だろー”ってシラコリたくなつたよ。」

やつ言いながら、秋月さんは楽しそうに笑つた。

「実を語りしね、あたしはちよつと警戒したの。」

思い出かど、やつぱり笑つむけやつよね。

「警戒？」

「うん。だつてね、朝一回会つただけなのに、いきなり名前を呼び捨てにされたから。」

「ああ、『紫苑。』つて。」

「やつ。『ひやつてか知らないけど、あたしの名前を突きとめたんだと思つて……、怒らないでね、」

「なに？」

「あのね、ストーカーかと思つちやつた。」

「僕を？！」

「あはははー、ごめん！」

「ひどいなあ。」

「『』めん。よく考えたら、あたしを狙うストーカーなんていないよ  
ね。ふふふ。」

「そんなことないよ。紫苑さんだつて気を付けないとね。でも、僕  
は絶対に違つ。」

「今はわかつてるけど。」

「まあ、あのときは仕方ないか・・・。あのとき、紫苑さんは本当に紫苑色の服を着てたよね？ ちょうど紫苑さんのつしろに本物の紫苑の花が見えて、花のイメージに匹敵する人だなつて思つたよ。」

「

「あたしが？！」

自分と名前が似合つていると褒められたのは初めてで、驚いて秋月さんを見たら、秋月さんはにこにこしながら「うん」と頷いた。  
こんなにはつきつぱつなんて・・・。

「あそ」にじよつ。「

テーブルを田指してわざと歩いて行つてしまつ後ろ姿を見ながら、自分の頬が熱くなつてゐることに気付いた。

木のテーブルに向かい合つて座り、真ん中に置いたおでんの大きなパックのフタを開ける。

ふわりと湯気がたつて、ダシとお醤油のいい匂いが漂つ。

「美味しそう　いい匂い。」

照れくさくて目が合わせられないことを隠すため、食べ物に集中するふりをする。

おでん屋さんが一緒にくれたお箸と取り皿も並べて、「いただきます。」と声を合わせた。

おでんはどれも味がよくしみ込んでいて、さらに外で食べると「う楽しさも加わつて、多いかなと思つた量もあつといつ間に減つていく。

たまごを箸でつかめないと言つては笑い、巾着が分解したと言つては笑い、ちくわぶの煮込み具合を議論して笑う。

本当に、秋月さんと一緒にいると、あたしはよく笑つてる。

お腹がふくれたら、お田さまの光が背中に暖かくて、今度はお昼寝でもしたい気分。

テーブルに両ひじをついて手にあいを乗せたら、もう何時間でもこゝやつていられそう。

秋月さんもテーブルに腕を投げ出して頭を乗せて、

「なんだか横になりたいなあ。」

なんて言つてゐる。

しばらく何も話さず、ぽかぽかと暖かい日差しの下のまつたりとした心地よさに、フリスビーをしている家族をぼんやりと眺めていた。

秋月さん・・・？

視線だけを動かして横を見たら・・・寝てる？

さつきの姿勢のまま、気持ち良さそうに目を閉じて。

規則正しい呼吸に合わせて、肩が緩やかに上下している。

疲れてるのかな？

仕事、忙しいのかな？

額にかかるせりせりの髪。弓なりの眉。ちょっと微笑むように閉じられた広めの口。

秋月さんの無邪気な寝顔には、なぜか安心感を覚える。

こちら側に投げ出された手は指が長くて、自分の手と比べてみた。

この長い指が器用さのものなのかな？

「こぐねーーー」

すぐ近くで甲高い子どもの声。

声のした方を見ると、取り揃ねたフリスビーを子どもが取りに来た  
らしく。

「んん・・・、あれ、寝ちゃつた?」

秋月さんが田舎へすりながら起き上がり、上がった。  
そのしぐさが子どもっぽくて、微笑みを誘つ。

「「あん。ほつたりかしちゃつて。」

「「あん、平氣。あたしものんびりじつたから。」

あたしの答えに秋月さんはほつとしたよつて微笑んで、「じゃあ、  
と言つた。

「デザートを食べようか。」

あたしの試作品…忘れてた…。

秋月さんがリュックの一番上に乗つてゐる紙箱を出して、楽しそう  
にテーブルの上で箱を開くと…。

中に入つていたのは、ナツツが入つて粉砂糖がかけられたチョコレ  
ートケーキが2切れ。

あたしが持つてゐる本に載つて、いよいよ気がする。  
材料と作り方だけをながめて、どんな味なんだかと思つていたん

だよね。

「どうぞ。」

「あれ?! フォークも持つて来たの?」

なんて用意周到な人なんだね！」

「うん。天気が良かつたからね。あと、少しだけど紅茶もあるよ。」

そう言って、リュックから水筒と紙コップを取り出す。  
本当によく気が付く人だ。

「紫苑さんのアップルパイも出して。」

来たか・・・。

「どうしても、今？」

「うーん・・・、嫌なら持つて帰つて食べてもいいけど。」

そうすると明日の朝とかに感想を・・・？

「やつぱり、今、食べて。」

そうだ。

すぐに終わらせた方がいいよね。

バッグに傾かないように入れてきた箱を出して、秋月さんのチョコレートケーキの隣に思い切つて並べる。

上品なチョコレートケーキの隣にあると、あたしのアップルパイは超豪快な感じ。

「きれいに焼けてるね。」

褒め言葉？

・・・まあ、焼き具合いろいろでもいいんだよね。

「「いただきます。」」

顔を見合させて額き合ひで、お互のケーキにフォークを入れる。

「あ・・・。」

思わず声が出た。

秋月さんのチョコレートケーキは、表面はさくらんとしていて、下に行くほど中身が詰まっている手応え。  
口に入れると、チョコレートのほろ苦こ甘さが広がって、噛むとナッシの歯応えと香ばしさがチョコレートの味と混じり合ひ。

なんて美味しいんだね!。

こんなに美味しいものを目の前にいる人が作ったのかと思つと感動してしまつ。

ああ・・・なんだか幸せ。

美味しいものを食べると幸せな気分になるつて、いつもいつもだつたんだ・・・。

「紫苑さん。もしかして、美味しくなかつた?」

秋月さんつたらー。

あたしの顔を見てもわからない?

「違うよ。あんまり美味しいくて、びっくりしちゃった。こんなに美味しいものが作れるなんて。」

「やだな。褒め過ぎだよ。紫苑さんだって作れるよ。」

照れてるけど、嬉しい。

「いつもは作つたらどうしてるの？」

「職場に持つて行つてる。一人じゃ食べれないからね。」

「こんなに美味しいものをし�ょっちゅう食べられるなんて、秋月さんの職場の人は幸せだね。」

「なんだか、そんなに褒められると恥ずかしいな。でも、紫苑さんのアップルパイも美味しいよ。料理が苦手だなんて思えない。」

「え？ 本当？ 嬉しい。」

自分では美味しいできたと思つてたけど、やつぱりほかの人から言わると違う。

しかも、同じレシピで作つたことがある秋月さんだもんね！

「僕が使つてる材料と何かが違うみたい。香りが少し・・・ブラウンシュガーかな、甘い匂いが深いみたい。こっちの方がいいね。」

「わあ、そう？ 仕事帰りにデパートの地下に寄つて、急いで揃えた材料なんだけど。」

「ああ、そつか。デパートで売ってる食材って、いいものが揃つてるもんね。でも、それだけじゃないと思うよ。りんごの大きさも揃つてるし、皮まで全部美味しい。大成功だよ、紫苑さん。」

「よかつた～。秋月さんにお墨付きをもらえるなんて嬉しい！」

並べたチョコレートケーキとアップルパイを一人でつつきながら会話が弾む。

微かな甘さのストレートの紅茶が、白い紙コップの中で太陽の光を受けてゆらゆらと透き通つて輝く。

少し離れたところから家族連れの笑い声が聞こえる。

おだやかで優しい時間。

秋月さんは話していても、黙っていても、安心。

それから一緒にショッピングモールをまわつて、夕方には家に帰つた。

別れ際、秋月さんが言つた言葉。

「またね。」

それを聞いたら楽しくなつた。

たつた3文字の言葉にそんな効果があるなんて、今まで気付かなかつた。



## 22 アップルパイの行方

月曜日の朝。

アップルパイを3切れ持つた。

一箱に入らなくて、2切れと1切れに分けて。

龍之介に渡すかどうかは、まだ決めていない。

秋月さんには褒められたけど、それは、持つて行くときに、形がち  
やんとしている部分を選んだから。

丸いパイの周囲7割は、なんとも頼りない形をしている。

他人に堂々と渡せるような状態ではない。

でも。

このパイ型は大きい。

8等分にしても、一切れあれば、朝食には十分。

昨日と今日で、朝食2回。

昨日の夜に一切れ。

そして、秋月さんに一切れあげた。

でも、まだ半分残っている。

というわけで、お昼に金子さんと一緒に食べようと思つて、持つて

行くことに決めた。

3切れにしたのは、物好きな同僚が味見をする気になるかもしけな  
い、と思って。

それに、もしかしたら……」の前みたいに、龍之介がふらりと現れるかも知れない。

もしも食べてるときに龍之介が来たら、あげなくちゃね。

どんな顔をして食べてくれるかな？

「美味しい！」って言つてくれるかな？

それとも、形だけを見て「下手だな！」って言われちゃう？

前回のは真由が作ったと言つてしまつたから、今回は念のため、一番形がいびつな場所を選んで箱に入れた。わざわざ下手にできている部分を持つて行くなんて、なんだか矛盾してゐるよね。

下手でも龍之介にあげたら、もつ終わり？

なんだかそれじゃ、物足りない氣がする。

秋月さんにあげたときみたいに、『試作品』ってことすれば、挽回のチャンスはあるかな？

「紫苑さん、おはよう。」

駅の改札を出たところで、秋月さんのいつもどおりの爽やかな声。ビジネスコートを着た秋月さんを見て、『ああ、こうこう感じだつけ』と思つ。

それくらい、私服姿と雰囲気が違つ。……けど、似合わないわけじゃない。

きのうは夜になつてから、そういうのは誘われたとき心配してたんだよね……なんて思い出した。

でも、秋月さんの態度にはビビリも不安になるようなところがなくて、ただ楽しかった。

今朝も、いつもと変わらない秋月さんのまま。つまり、今のところは何も考えないでいこってこと……だよね？

「あのひばりちやつわま。ケーキ、本当に美味しかった。」

お礼を言つと、秋月さんは照れた顔をした。

それから、

「龍之介に渡すことにした?」

と。

「持つて来たけど、迷つてゐるの。見た目がイマイチだから。」

「それほどでもなかつたと思つけビビ?」

「昨日は特に上手にできた場所を選んで持つて行つたんだよ。大部分は本当に情けない状態で。」

その中でも特に情けないものを選んできたし。

「秋月さんと同じように、食べきれないから同僚に食べてもいいあつと思って持つて来たんだけど、自慢げに他人にあげられるような出来じゃないからなあ・・・。」

はあ・・・と、ため息が出た。

「どうしたらいいと思つ?」

「僕の意見？」

「そう。龍之介にあげても大丈夫かどうか。」

「・・・・・。」

あたしの質問に、秋月さんは無言になってしまった。

変なこと訊いちゃったかな。

・・・そうだよね。

それは、あたしが自分で判断しなきゃいけないよね。あたしが作ったアップルパイなんだから。  
あたしがした約束なんだから。

「あの、」

「僕は、」

同時に相手を見て声が重なった。

秋月さんが微笑んでいないことに気付いて、急に不安になる。

もしかしたら怒ってる？

くだらないことを訊いちゃったから・・・。

どうしよう？

「僕は・・・僕も紫苑さんにアドバイスできない。」

「そ、そうだよね。『めんね、変なこと訊こちやつて。』

慌てて弁解すると、秋月さんは何秒間かあたしの顔を見つめてから、ふつと表情をゆるめて微笑んだ。  
そのやわしい笑顔にほほつとする。　・・・怒つてない？

「紫苑さん、今、僕が怒ったんじやないかと思つて心配した？」

「え・・・？　うん・・・。」

そんなに分かりやすいのかな、あたし・・・？

「じゃあ、『龍介にあげるのは、紫苑さんが納得できるまで練習してからでいいと思つ』って、アドバイスする。」

？

『じじゃあ』って、どうして？

不思議に思つて首をひねつているあたしの横で、秋月さんがくすくす笑つてる。

「そんなに面白い？」

今朝の秋月さんはよくわからない。

「『めん・・・。なんだか、自分がこんなに単純なのがつて思つたら可笑しくて。』

「単純？」

「紫苑さん。」

「……はい。」

なんとなく改まった様子に、あたしもつられて返事がかしこまる。

「本当は、紫苑さんにはさうした龍之介との約束は完了させてしまい。」

「…………『わせてほしい』？」

「紫苑さんが、いつまでも龍之介のことを考えてアップルパイを作ることだが・・・悔しいから。」

ん？

あれれれ？

ちょっと、話の方向が、なんだか・・・？

突然、周囲を通勤途中の人たちが歩いていることが気になり出す。ええと、ひつひつひつひつひで平氣な話・・・なのかな？

「でも、」

そう言ひついでを向いた秋月さんは、ちょっと恥ずかしそうだけだ、ひつひつと嬉しそうで・・・。

「紫苑さんが、僕を怒らせたんじゃないかつて心配した顔を見たら、ちよつと自信が持てた。」

ええ~~~~~？！

なんか、それって、それって・・・。

「だから、紫苑さんが納得できるまで、龍之介のために頑張つてもいいやつて思った。」

「それは、あの、あの・・・？」

あたしは何で返事をすればいいんでしょうか？

「あ、紫苑さんは気にしないで。単に僕の問題だから。」

気にしなくていい？！

そうなの？！

でも、あたしも関係あるみたいだよ？！

「まさか、自分が龍之介にやきもちを焼く羽田に陥るなんて思わなかつたよ。あははは。」

やきもちつて？！

やっぱり、あたしも関係あるよね？！

だけど、そんな、『あははは。』つて・・・？

「ねえ、紫苑さん。」

「はい？」

「これからも、試作品は全部、僕に試食させてね。」

「う、・・・うん。わかった。それは構わないけど・・・。」

「じゃあね。」

いつの間にかうちの会社の前だった。

軽やかに走り去っていく秋月さんの後ろ姿を見ながら黙然としてしまつ。

あたし・・・告白されたんだろうか?

あれはそういうもの?

なんだかよくわからない。

あんなに爽やかに言うからびっくりしそぎて、胸が苦しいとか手が震えるとか言つてる余裕がなかつた。

うーん・・・、わからない。  
どうしたらいいんだろう?~

・・・いい・・のかな?

秋月さんも『気にしないで。』って言つてたし。  
真由も『成り行きにまかせて』って言つてたし。

ふふ。

なんだらう?~

なんとなく楽しそうな気がしてきた。

でも・・・大丈夫なのかな?

「紫苑。あれ、優斗？」

「うわー。」

龍之介？！

いつの間に？！

「お、おはよう。あの、うん。よく電車が一緒になるの。」

「ふうん。」

入り口に向かって一緒に歩き出す。

「龍之介って、こつもまだの電車？」

「俺？ もうと早いぞ。今日コンビニで時間がかかった。…  
なあ、紫苑、それ。」

「え？」

「その紙袋、なに？」

「これ？」

「うひっよひ・・・。」

「あ・・・、ええと、その・・・、アップルパイ・・・。」

「やつぱつー。月曜だし、もしかしたらって思つたんだよー。」

そう言いながら、ガツツポーズをする龍之介。

「 の、試作品。まだあげられるよつなものじゃ . . . 。」

「いい、いい。サンキューーーー！」

龍之介がものすくべ嬉しそうな顔で、紙袋に手を・・・つけて、ぱぱりと?!

「あの、全部?」

「あれ? 誰かにあげる予定か?」

「いや、決まつてはいないけど・・・。でも、試作品だよ? ちやんとできてないよ?」

「味見してないのか?」

「食べたよ。」

「食べられたんならいい。むらつ。」

“食べられたんなら” って、ハードル低いな・・・。

「あの、ひ・・・、形が。」

「そんなの気にすんなってー!」

・・・ですか。

「あー、楽しみー　あ、代わりにこれやる。」

龍之介がコンビニの袋から取り出したのは、大きなプリン。

「あ・・・りがとう。」

「じゃあな~。」

なんとなく納得できないでいるあたしを残して、大股で階段をどんどん上つて行ってしまった。

・・・これでよかつたんだらうか?

約束を果たしたことになるの?

でも、『試作品』って言つちやつたし・・・。

ああ・・・またしても、よくわからない。

秋月さんも、龍之介も、一人とも『氣にするな』って言つたよ。  
あたしもそんなに繊細な心の持ち主じゃないけど、一人ともやうとう大雑把な性格だよね・・・。

ああ・・・もういいや。

本当に気にするのはよそ。

考えても、なにも解決しそうにないしね。



## 23 アップルパイのお味は？

何か言つてくるんだろうか……？

お昼になつて、龍之介がアップルパイを持って行つたことを想い出した。

朝は“まあ、いいか。”と思つたものの、もしかしたらお昼に食べるのかも……と氣付いて、急に恐ろしくなつてくれる。

気に入るだらうか？

それとも、見たとたんに笑われる？

文句を言わることしても、褒められるにしても、“いい”ではいや。なんだか困る。

ああ・・・やつぱり、ビヨでもイヤかも。

どうじよつ・

ドキドキして来ちゃつた。

外でお昼を食べれば、とりあえず昼休みは龍之介に会わなくて済む？午後、仕事中に来たりしないよね？

ああ、でも、用があつたら仕方ないけど……顔を合わせるのが怖い！

こんなことなら、持つて来たつて言わなければよかつた……。

「谷村さん、お昼はどうします？」

ぐるぐるとキリがない後悔に浸つてゐるあたしは、金子さんがここ  
やかに話しかける。

「外。外に行ひ。

そうだ。

まずは、今。

逃げぢやおう。

お休みを無事にせり過いし、午後の仕事。

1~2月は例年、お忙しくて、パソコンのキーをたたくスピードも  
普段よりもアップする。

うつかりすると、入力しながらブツブツと声に出して読んでこるのである  
とも。

何度も見直したつもりなのに、プリントアウトした資料には入力ミ  
スが、なんてこともときどき。  
自分がドジなのはわかつてゐるから、気を散らむこと多いことつも  
気を付けている。

だけど。

今日はそれが難しい。

もしも龍之介が来たらどうしよう?

あたしはどんな顔をしていたらいの?

龍之介が来たとしても、仕事中にアップルパイの話はしないだろ?

と95%くらいは信じていいけれど、残りの5%のために、「わの課に誰かがやつてくるたびに、ハツとしてそちらを見てしまひ。向かいに座つている春山さん」

「今日の谷村さん、皿つきが鋭いよ。ずいぶん忙しいんだね。」

と、笑われた。

金子さんもとおざき、いつも不思議そうに見ている。

ああ、もう一

これじゃあ、みんなに“何かある”って知らせてくるよつなものじやない！

そう思つたら、頬がかあつと熱くなってしまった。  
もう限界……。

「トイレのついでにお茶でも買つてくる。」

金子さんになるとわざと席を立つ。  
少し頭を冷やすくちゅ。

あーあ、こんなこと、体に悪いよ……。

Hレベーター前にある自販機へと廊下を歩きながらずぐずと考ふる。

疲れて落ち込んで、視線は足元へ。

こんなに大変な思いをするんだつたら、最初から龍之介の挑発に乗るんじやなかつた……。

セリ。

自分が悪いんだ。

「やあ、紫苑ちゃん。元気ないね。忙しいの？」

ま、真鍋さん！？

「すみません、気付かなくて。ええ、ちょっと・・・。」

「びりじょひ、びりじょひ、びりじょひへ

龍之介と同じ職場だもんね。もしかしたら、お皿にあれを見たか食べたか・・・。

「顔が赤いよ。大丈夫？ 熱でもあるんじゃないの？」

「いえ！ あの、ちょっと暖房が効き過ぎてるのかも。あたし、暑がりなので。」

「ああ、それならいいけど。金曜日は忘年会だから、それまでは体調万全でね。」

「は、はい。」

行っちゃった・・・。

アップルパイのことは知らなかつたみたい。

同じ職場で仲良しの真鍋さんが知らないことば、龍之介はお皿には食べてない可能性が大きいね。

この建物の中で一人でこつそりなんていう場所はそつそうないし。

・・・いや、一人でこいつそりなんて、龍之介には当てはまつそうがない。

社内で食べるなら、堂々とみんなの前で開けている  
て、あたしをコケにしているはずだ。

つまり。

龍之介は、まだ食べてない。

そこまで考えて、ようやく落ち着いた。

自販機で冷たいお茶を買って、それからあとは、いつもとおり、  
集中して仕事ができた。

結局、帰る時間になつても、龍之介からは何もなかつた。

仕事の忙しさと昼間の不安で身も心も疲れ果てて、どうでもいい気  
分になつて帰つてきた。

心配事には疲れるのが一番効くみたい。

本当に疲れちゃつたよ・・・。

コートだけ脱いで、ソファ代わりの大きなビーズクッションに半分  
寄りかかりながら体を伸ばす。

8時半か。

お腹は空いてるけど、夕飯を作るのも面倒。

買い物をするのも億劫で、スーパーにも寄つて来なかつた。  
レトルトのカレー？ それとも冷凍グラタン？

ああ、そうだ。

明日はつりの課の忘年会だっけ……。

ほんやりしていると、関連のないことが次々と浮かんでくる。

職場のパソコン、最近、動きが遅いよつたな気がする。  
洗濯物をたまなくちや。

ショートブーツが一足欲しいな。

仕事納めまで、あと何日？

ブブブブブブブ・・・・。

テーブルに投げ出しておいた携帯が振動してる。  
まさか・・・。

恐るおそる覗き込むと、『高木龍之介』の文字が。  
やつぱり・・・。

一気に毎回の気分がよみがえる。  
携帯を持った手が震えているのに気付いて、ますます緊張してしま  
う。

「・・・はい。」

『あ、紫苑？』

あれ？

龍之介・・・だよね？

なんだか、いつもと違うような気が・・・。

「うん。」

『もう帰ってる?』

「うん。」

『今から出られるか?』

「は?」

出る。

「出るって・・・出かけるって」と?』

『やっぱ。車で迎えに行くから。』

「はあ? 今から? なんで?」

『もう風呂入っちゃった?』

「いや、まだだけど・・・。」

それ、女の子にする質問? ・・・なのかな?

『じゃあ、大丈夫だな。5分で着くから。』

・・・切れたよ。

何なんだろ、あれは？

なんて考へてる場合じやないよ！

支度しなくちや！

部屋着に着替えてなくてよかつたよ～！

通勤用のバッグから、鍵やお財布や必要なものだけを小さいバッグに入れ替える。

お化粧は・・・一応、直して行くか。どうせ暗くてよく見えないだろうけど。

セーターを厚手のものにして、コートもたつぱりしたものを選ぶ。

うわ、もう5分経ってるよ。

ベランダから下を見ると、黒っぽい小型車が玄関の前に止まるところ。

あれかな？

龍之介が小型車っていうのがなんとなく不思議な気がするけど。

ブーツを履いて、鍵を閉めて、手袋をはめながら、エレベーターは時間がかかりそうだったから階段を駆け下りる。

玄関のガラスの向こうに、車に寄りかかってにじにじしながら立っている・・・龍之介？

一瞬、人違ひだつたらどうしよう？と思つて足を止めた。

いつものスーツ姿と全然違っていたから。

黒の細身のダウンジャケットに茶色のパンツ、グリーンや白や茶色

やこんな色の細い縞模様のマフラーをぐるぐると巻いて。でも、ツンツン頭と切れ長の目は精悍な顔はやっぱり龍之介だ。

脚が長い。知らなかつた……。  
それに……。

「お待たせ。」

とは言つたものの、なんなく氣後れして、歩くのがためらいがちになつてしまつ。  
だって、なんだか、いつもの龍之介と違う。

ほんの数歩で龍之介はこちへ来て、のろのろしてくるあたしの腕をつかむ。

「悪いな、夜なのに。あつたかくして來た?」

しゃべつたら、いつもの龍之介ではなくとした。

「うん。」

「すぐだから。そっち側、ドア開きやうか?」

「あ、あたし、後ろに乗るから大丈夫。」

「え? 助手席に……。」

「いいの、後ろで。いつもそうだから。」

いつも。

あたしが助手席に座ったことがあるのは桜井先生の車だけ。  
だから、思に出でなこよひ、助手席には座らない。

「・・・せうか。」

同じ側の前後のドアから乗り込んで、前を向いたら、龍之介がバツ  
クミラー越しにニヤツと笑った。

その笑顔で元気が戻って、運転席の背もたれにつかまって、龍之介  
に話しかける。

「ねえ、どこに行くの？」

「すぐ近く。」

そのまますぐに出発。

教えてくれるつもりはないらし。

まあ、いいか。

すぐ着くって言つてゐし。

「あたし、やつと帰つたばつかりなの。」

「仕事か？」

「うん。だから、まだ着替える前で、すぐ出て来られたんだよ。」

「なんだ。もうちょっと遅かったり、紫苑の色っぽい普段着が・・・

。」

「何言つてんの？！ こんな寒い時期に、そんな格好してるのは

いでしょう。」

「うわー、そんなに耳のわざで怒鳴るなよ。あ、この先だ。まあ、つ田の見どじる。」

「え？ なあに？」

「いいから、前を見てる。」

前？

ゆるやかにカーブした道の先は・・・イルミネーション？

道の両側にずっと続いてる。

「うわ・・・すうじこね。」

「このあたりの家、毎年少しずつクリスマスの飾りが増えてきて、今年は特にすごいんだ。」

「一般的の家の？」

「うん。新しい住宅街だから、みんなお洒落なんだな。」

本当にすごい。

門の前にある木にも、生け垣にも、壁にも、ベランダにも、色とりどりのライトやサンタクロースや雪だるま。

屋根からレースのようにライトが下がっている家もある。庭で光のトナカイが首を動かしている家も。

「すごいね。」

クリスマスらしい雰囲気にウキウキしてくる。

バックミラーを見たら、やっぱり楽しそうな龍之介と目が合つた。

そして、気付いた。

あたし、龍之介と電話で話したのって初めてだ。  
二人で出かけるのも、私服の龍之介を見るのも。

なんだか・・・楽しいね。

## 24 アップルパイの食べ方

イルミネーションの住宅街を過ぎて、車は坂道を登つっていく。いつの間にか広々とした場所に出て、小さな駐車場に龍之介が車を停めた。

ほかにも二台ほど車が停まっている。

「着いた。」

「うう？」

周りには何もなさそうだけど、ほかにも人が来てるってことは、何があるの？

龍之介が車を降りているのを見て、あたしもドアを開ける。外に出たら、高い場所のせいいか風が強い。

「寒いから、ちょっとだけな。」

龍之介のあとについて駐車場を横切って歩く。柵の前まで来ると、

「ほら、これ。」

と龍之介が振り向いた。

景色が。

思ったよりも高い場所だった。

足元には住宅街の明かりが並んでいて、ところどころにクリスマスの飾りが光っている。

「紫苑のマンションはあの辺。さつき通りのあたりだよ。」

龍之介が指差す先では、道路を縁取つて光が並ぶ。

「向こうに海があるんだ。だいぶ遠いけど。」

その方向に向かつてだんだんと光が増えて、高い建物が多くなつていいく。

サーチライトが2本、空に向かつて伸びている。  
ずっと遠くに、ライトアップされた橋が小さく見えた。

「きれい。」

2年も住んでいるのに、こんな場所があるなんて知らなかつた。  
嬉しくなつて隣の龍之介を見上げたら、龍之介も笑い返す。

「このあたりでは、ここが一番景色がいいんだ。」

「そうか。龍之介の地元だもんね。」

「そう。俺の家、この裏だから。」

え？

「ええと、つかひはけつじ遠乃づださび・・・。

「そんなことないで。学生の頃は紫苑のマッシュンのあたりもロードワークの範囲内だったし。」

「・・・ナリなの?」

「いいんだ。お前は気にするな。」

「なんだか・・・いいのかな?」

「よし。じゃあ、食うべ。」

「え? 何を?」

「いいから。」

龍之介は後ろから肩を押されて車まで戻る。

楽しそうな龍之介・・・。

そういうば、お腹が空いてる。みんな

電話のあと、慌てたから忘れてた。

何か持つて来てくれたなんら、有難くいただきたい。

「つーん、後ろか?」

ドアを開ける前に腕組みをして考え込んでいる・・・何を?

「よし。ちゅつと狭いけど、後ろだな。紫苑、乗つて待つて。」

さつきと同じように運転席の後ろの席に乗り込むと、龍之介は外に立つたまま助手席の足元から何かを取り出した。  
ランタン？

「持つてて。」

明るくなつた車内で龍之介がさら取り出したのは・・・。

「そ、それ・・・、今朝の?！」

「そう。紫苑のアップルパイ。」

うそ～～～～つ?!

今?

ここで?

「なんで?！」

「そうだよ!  
なんで?！」

あわあわしているあたしの隣に、反対側から龍之介が乗り込んでくる。

「一緒に食べようと思つて。」

一緒につて、龍之介。  
困るよ。

緊張する!..

「あー、やっぱり後ろは狭いな。」

慌ててるあたしの気持ちに関係なく、龍之介は平気な顔で助手席を前へずらしたりして。

龍之介！

そうだ。

3つ入ってたはずだよね？

「ねっ、ねえ、もつ食べてみた？」

感想があれば、それを最初に・・・。

「え？ まだ。」

ああ・・・もう一

「なんであっ？！」

つい、始めるような口調になってしまって後悔する。  
そんなつもりじゃないのに・・・。

落ち込むあたしをまったく無視して、龍之介が2つ入っている方の箱を開く。

ランタンのぼんやりした明かりで、間違なくあたしが作ったアツプルパイがますますみすぼらしく見えて、絶望的な気分になる。

「なあ、紫苑。」

「・・・なに?」

ああ・・・。

下手つて言われちゃうよね・・・。

「これ作るの、大変だつた?」

「・・・え?」

「なんかさあ、これ見たら、紫苑がすごく頑張ったんだなあって思つて、そう思つたら、一人で食べたらもつたいないなつて思つたんだ。」

聞きなれたはずのハスキーな低い声が、普段と違うゆつたりしたりズムで口にされた言葉で、じんわりと優しく聞こえた。

「龍之介・・・。」

そんなこと言われたら、あたし・・・。

「・・・うん。頑張ったよ。」

それだけは胸を張つて言える。

あたしの少し得意気な顔を見て、龍之介が微笑む。

「そりだよな。だから、一緒に食べよう。」

龍之介・・・。

なんていうか・・・泣きたいのか、笑いたいのか、どいつしたらいのつかからない。

何か言わなくちゃと思つても、胸がつかえて声が出せない。

どいつしようもなくて、笑つてみた。

泣くよりも、あたしには相応しい気がして。

「どいつした？ 腹いつぱいか？」

「ち・・・違ひ。」

声、出たよ。

小さく咳払いして、そのまま続ける。

「だつて、これ、どいつやつて食べるの？」

「どいつやつて、手で。」

「手で？」

「なんで？ これなら大丈夫だろ？」

「うん。大丈夫・・・だと思つ。」

龍之介だもんね。

秋月さんみたいに用意周到なわけないよね。

「はい、どいつぞ召し上がれ。」

「じゃあ、紫苑、いただきますー！」

龍之介が大きな手でパイを取つて口に運ぶところをやうと観察する。

なんて言ひ？

前回と同じなはずなんだけど・・・？

ぱくっと一口かじつたら、手に持つてゐる残りのパイの中からりんごが龍之介の胸元にボトトリと落ちた。

「あっ、龍之介、こぼれた！ 服が汚れちゃうよー。」

急いで見回してもティッシュや雑巾などは見つからず、自分のバッグをかきまわす。

龍之介は「あーあ。」なんて言いながら、上着に落ちたベドベとのりんごを拾つて、また口に入れてしまった。

「美味い。」

のんきなコメントを笑いながら、左手で龍之介のダウンジャケットをひっぱつて、ウーハットティッシュで汚れた部分を拭う。

「ああ・・・、染みこんじゃつたかな？ カビが生える前にクリーニングに出した方がいいかもよ。」

新しいウエットティッシュでジャケットを何度も叩いてみると、ランタンの明かりがあつても薄暗い車内では、近付いて見ないと、汚れた場所もよくわからない。

「あの・・・紫苑。もうこいよ。」

「うん……。もう少しですね。」

ありんこが来たりしたら怖いし。

・・・冬だから平氣？

「どうあえず、このくらいで大丈夫かな？」

念のため、シナモンやりんこの匂いが取れたかどうか匂いを嗅いだ  
と顔を近付けたら・・・。

「じつ、紫苑！　あのつ、もういいから。」

聞いたことがないような上ずつた声で叫ぶように言られて、同時に  
両手首を取られて、服から引き離された。  
その勢いにびっくりして龍之介を見ると、目が合った途端に顔を背  
けられてしまった。

「・・・もしかして、恥ずかしかった？」

子どもにやみみたいなこと、しちゃつたもんね。

「・・・俺だつて、男だぞ。」

そんなこと、分かつてるよ。

「はいはい。ちゃんとした大人のね。」

あたしの言葉を聞くと、龍之介はものすごく変な顔をして一〇秒く  
らいあたしを見つめてからため息をついた。

「紫苑。夕飯は？」

「まだ。」

「じゃあ、フマニレスでも行こ。とりあえず、これを食べてから。

」

そう言つて、あたしが一切れ食べる間に、龍之介は食べかけとまつ  
一切れをあつとつゝ間に食べきつた。

「うまかった。じゅわじゅわ。」

やつた！

あたし、龍之介に“美味しい”って言わせたよ・・・。

じわじわと嬉しさがこみ上げてくる。

「じゃあ、行くか。」

龍之介が運転席に移つてエンジンをかける。

その背もたれの横から乗り出しつゝもつ一度訊いてみる。

「ねえ。本当に美味しかった？」

龍之介はちらりとあたしを見ただけで、視線を前に戻す。

「うまかったよ。」

「そつか。・・・ふふふ。」

楽しくて、笑いがもれる。

美味しいって。

あたしのだって分かっても、ちやんと。

コンー

? !

おでこが? !

「そんなどこのから顔出しじゃ危ないぞ。」

龍之介に指でおでこを弾かれたらしい。

「痛いよ。赤くなってるかも。」

「いいから、ちやんと座つてろ。」

「はあー。」

少しくらい威張られてもいいや。

あたしのアップルパイを美味しいって言つてくれたから。

アップルパイだけつけてお腹がふくれていたにもかかわらず、龍之介もあたしも、ファミレスで夕飯をガツツリ食べた。  
その間ずっと、なんだか楽しくて仕方ない。

龍之介にパイを壊められた」と、テンションが上がってるのかな?

もつすべマンショնに着くとこいつは、ふと戻付いて、バックミラ  
ー越しに龍之介に問いかける。

「ねえ。龍之介と飲み会の帰り以外で一人で出かけるのって、初め  
てだよね?」

質問に答える前に、龍之介と鏡を通してひびと田が合図した。

「うさ。」

「やつぱつやつだよね。電話が来たときに何か変だと思つたら、電  
話でしゃべるのも初めてだつたんだよ。」「

「会社で内線で話したことはあるだろ?」

「せうだけど、」

鏡越しに会話をするのが面倒で、また運転席の背もたれにつかまつて  
体を乗り出す。

「仕事中と嘘が違うよ。」

「やうか?」

「うん。なんか、柔らかいつていうか。」

「ん・・・。」

「それにさあ、ステッジじゃない龍之介を見るのも初めてだよ。」

「ああ・・・そだよな。」

「す、ぐ似合つね。かつこいいからびつべつしたよ。」

「・・・紫苑。」

「なあに?」

「近い。」

「え?」

「耳もとでそういうこと言つたな。」

あれ?

恥ずかしいのか・・・。

「んめん。」

龍之介ったら、照れちゃつて。可笑しい。

マンションの前で車を降りたら、外の空気が冷たいことに気付く。ファミレスも車も暖房が効いていたし、楽しくて笑つてばかりだったから、体がぽかぽかしてる。

運転席の窓を開けた龍之介にお礼を言おうとかがんだら、龍之介が手を伸ばして、指の背であたしの頬をさつとなでた。驚きながら、咄嗟にその手をつかまえる。・・・大きな手。

「おやすみ、紫苑。」

そう言って、龍之介が自分の手をそっと引っ込める。あたしは・・・龍之介の顔から、田を逸り出すことができなかつた。

「あの・・・、おやすみなさい。」

「風邪ひくなよ。」

そうだ。  
帰らないと。

ひとつ頷いて、マンションの方に向き直る。

ふたつめのガラスのドアを抜けながら振り返ると、龍之介が手を振つた。

それに手を振り返し、ちょうどビーム階にいたエレベーターに乗り込みながらもつ一度手を振ると、龍之介が頷くのがわかつた。

エレベーターの壁に寄りかかって、ほつと息をつく。

楽しかつた。  
だけど・・・。

なんだらう。

何か忘れているよひつな・・・?



紫苑。

今日は一日、お疲れさま。

朝から晩までいろんなことがあって、きっと大変だったよね。

今日の龍之介、すごく頑張ったよね？

朝、龍之介が寄ったコンビニで、レジに並んだ人が時間がかかるようにならうにちょっと細工したんだよ。

紫苑が優斗と一緒にいるところを龍之介に見せるために。お金落とさせたり、レシートを詰ませたり、3人も邪魔をするのはちょっと大変だつたけど、うまく行つたから僕は満足。

朝、龍之介は楽しそうに、ロッカー室でこつそりとパイの箱を覗いてた。たぶん、すぐに食べてしまうつもりだったんじゃないかな？でも、紫苑のパイを見たとたん、真面目な顔つきで、そつと箱のふたを閉めてしまったんだ。

お昼休みも、午後に出かけるときも、ロッカーを開けるたびに箱を覗いていたけど、いつも優しい顔をしてた。

紫苑があれを作るのにどれくらい頑張ったのか、考えていたんだと思う。

僕が龍之介を選んだのは、紫苑たちが就職して少し経つたころだつ

た。

あのときはまだ桜井先生のことから時間が経つていなかつたから、紫苑に必要なのは辛抱強く待てる人間だと僕は考えていた。

大学を出たばかりの龍之介は、ただの元気いっぱいのふざけ屋に見えた。

でも、大学までずっと運動部だった彼は、下積みの努力の大切さを知つていたし、後輩の指導をする中で心の大きさも育つっていた。何よりも、僕が手を貸す前から、紫苑のことを気に入つていたしね。

それで僕は、龍之介なら、長い時間がかかっても、紫苑のことを守りながら待つてくれると思つたんだよ。

紫苑が一人で暮らすことになつて部屋を探しているとき、僕は龍之介の家の近くの物件が目に付きやすいようにした。  
と言つても、情報誌のページをめくつとおぐぐらうの」としかできなかつたけど。

僕の思惑に天の助けが加わったのか、紫苑はこのマンションを選んだ。

それから2年。

龍之介は予想どおり、辛抱強く、ずっと持ち場を守つてきた。

予想どおりといつよりも、予想以上、だな。

紫苑に一番近い場所にいつも自分がいるように、龍之介がどれほど気を配つて来たか知らないだろう？

彼は紫苑が誰かを好きになることを怖がつてゐることに気付いていて、それが消えるまで待とうと決心している。

この2年で龍之介は、就職したころよりずっと思慮深くて優しくなつた。少し慎重すぎるほどに。

その慎重さのせいで、紫苑は龍之介の気持ちに全然気付かない。龍之介が近くにいることが当たり前になつてしまつた。

初めて出会つたころの龍之介のままだと信じて。

そして、相変わらず “恋なんかしない” つて言い続けて。

そして僕は・・・だんだん紫苑と別れることを考えるのがつらくなつてきた。

途中で念のためと思つて、2人ほどほかの候補者を試してみたけど、お互に気付かないまま終わつてしまつた。

優斗が紫苑の行動範囲の中に現れたとき、僕はすぐに決心した。優斗と紫苑を出合わせようつて。

優斗の笑顔と柔らかさなら、紫苑の意固地な決心を溶かすことができると思つたから。

紫苑が怖がつてノーと言つ前に、自然に紫苑の心に入りこめると思つたから。

・・・それとね、紫苑、もう一つ。

優斗の名前が僕と似ているから。

紫苑が幸せになる相手は絶対に僕ではない。

紫苑が声に出して、僕の名前を呼ぶことは絶対にない。

だけど、紫苑が優斗を選んだら・・・。

僕は消えてしまうけど、僕の名前だけは紫苑のそばにいられるよう

な気がして。

優斗はちゃんと紫苑のことを気に入ってくれて、彼独特的の天真爛漫さと優しさで、一途に紫苑に恋してる。

もちろん、2年以上ずっと紫苑を守っている龍之介のことだって、応援してはいるんだよ。

もう無理かも知れないと思つてもいたけれど、これをきつかけに二人の関係が動き出す可能性もあるかも知れないとも思った。紫苑の「金木犀さん」が優斗だつてわかつたとき、龍之介の動搖はかなりのものだつたよ。紫苑が知つたらきっと驚くくらいに。だから今朝だつて……。

二人を同時に候補者にするなんて、恋風として無責任かな？

でも、一人ともいい人間だし、見ている僕はけっこう楽しいよ。優斗も龍之介も、紫苑に無理なことを言つたり、困らせたりはしないはず。

一人のうちどちらを選んでも、紫苑は幸せになるよ。

紫苑は高校生のころと同じように、恋愛関係のことは鈍感で不器用なまま。

でも、それでいい。

真由が言つたとおり、誰かを好きになるのは自然な心の動きだから。紫苑に駆け引きは似合わない。

怖がらないで、紫苑。

紫苑を傷つけるような人間は誰もいないから。

おやすみ、紫苑。

忙しくて、いつもとちよつと違っていた一日が、紫苑に安らかな眠りをもたらしますように。

## 26 クリスマス・イブの約束

職場の忘年会。

課長を含めて一ヶ月、中華料理店の個室で賑やかに2つの丸いテーブルを囲んで。

「谷村さん、忘年会はいくつ出るの?」

職場で向かいの席に座っている春山さんが、紹興酒で赤い顔をして隣に移動してきた。

お酒が大好きな春山さんは、お酒好きだけれど、あんまり強くない。忘年会や歓送迎会では、いつもすぐに田中律が怪しくなってしまう。

「3つです。今日で2つめ。春山さんはたくさんあるんでしょうね?」

「俺? うん、俺はねえ、5つかなあ。あはは。」

「5つですか? いつもより少ないんですけど?」

たしか、去年は毎日のよう・・・。

「もうなんだけど、今年は奥さんがいるからね。へへへ。」

「そうでしたね。」

春山さんは今年の春に結婚したばかり。

結婚して3か月くらいは、毎日のようにこのわけ話を聞かされたつ。

「春山さん、今年のクリスマスは奥様どりでゆっくりですか？」

反対側の隣から金子さんが尋ねる。

「ふふ～ん。まあね～。クリスマスツリーを新調したんだよ。大きいやつを。雪乃ちゃんと一緒に飾つてさ～。」

雪乃さんは奥さんの名前。

新婚当初に見せてもらつた写真は、名前に似合つた和風美人だった。

「いいですねえ。」

金子さんと一緒に羨ましがつてみせると、春山さんは嬉しそうに笑つた。

「二人とも、早く結婚したらいいよ。」

「そりは言つても、相手が。ねえ。」

「あれ？ いないの、二人とも？」

あしたたちが黙つているのを見て、春山さんが不思議そうに問ひ。

「よく来る彼、何て言つたつけ？ ほら、よくゴリラ箱に座つてる・。」

「ああ、高木くんですか？」

「アリサリー、彼、ビリが彼氏じゃないの？」

そう言いながら、金子さんとあたしに人差し指を向ける。

「ええ？」

「やだ！」

あたしは皿を丸くして、金子さんは両手を頬に当たった。

金子さんの反応って、可愛い……。

いつもこうして差が出るよね。

「そんなふうに見えますか？」

「うん、見えるよ。あんなにショーチョー来るんだもん。ほかの人も、そう思ってるんじゃないかなあ。」

知らなかつた……。

「アリサリー。谷村さんは、朝の男の子がいるよね。」

「朝？」

金子さんがさつとあたしに向き直つた。

その傷ついたような表情を見て、春山さんを恨みたくなる。

どうしてこんなとき元気なの？

「毎日、一緒に歩っこてるよね？ あいつが彼氏？」

「こころ。違います。」

見られてたのか・・・。

まあ、そりだよな、通勤時間帯なんだから。

でも・・・向こうがどんな思惑かは何とも言えないけど、今のところは彼氏じゃない。

あたし自身も、秋月さんの位置づけはよく分からなければ・・・。

金子さんにも説明しなくちゃ。

「ほひ、秋月さんだよ。朝、同じ電車みたいで、よく一緒になるの。」

あたしの説明を聞いても、金子さんの表情は晴れない。

「あのこです・・・。」

「え?」

「谷村さんばかりモテて、あのこです。」

「金子さん? あたし、べつにモテてるわけじゃないんだ?..」

“ぱっかり” って呟つたって、それらしいのは秋月さんだけで、それだけであやふやなのに。

「そんなことあつません! 谷村さんのこと、みんな面前で呼ぶじゃないですか!」

あれ?

酔ってるの？

そんなに大きな声を出したら・・・大丈夫かな？

いつの間にか、春山さんはよそに移ってしまったたらしく。見回したら、部屋のあちこちでも大騒ぎしていた。

紹興酒の瓶がいくつもテーブルに載っている様子からすると、みんなかなり飲んでいるみたい。

あたしは紹興酒は苦手だからあんまり口をつけないけど、ザラメを入れると飲みやすいから、金子さんもけつこう飲んでるのかも・・・。

「名前で呼ぶって、龍之介とか、いつものメンバーだけじゃない？」

ああ、あと秋月さんだ。

でも、名前で呼ぶからって、みんながあたしのこと好きなわけじゃないよね？

「みんな谷村さんばっかり見てて、あたしのことなんか、誰も見てくれないんですね！」

どうしちゃったんだろ？

今まで何度も飲みに行つてるけど、金子さんがこんなふうになることなかつたのに。

やつぱり紹興酒のせい？

「もうすぐクリスマスなのに、誰もわたしのことなんて誘ってくれない・・・。」

あらりん。

そういうことか。

「あたしだって、予定はないよ。」

「予定がなくたって、入る可能性があるじゃないですか！」

「え？」

まあ、去年と同様、“独り者の宴会”の誘いはあるかもそれないかな。

でも、あれはきつぎりまで話が出ないからね……。

あたしから見れば、金子さんの方がちゃんとした予定が入りそุดけど。

「そうですよ。高木さんだつて、秋月さんだつて……。」

「龍之介とはもう3年の付き合にになるけど、一度もクリスマスの誘いなんてないよ。」

そうだ。

昨日、初めて一人で出かけたんだ……。

いやいや、それより今は金子さんを宥めなくちゃ。

「金子さんの方がずっと可愛いんだから、絶対にあたしよりも人気が・・・。」

「どうしてるんですか？」

「え？」

「ビーハーに！ わたしを誘つてくれる人がいるんですか？」

絡み酒？

また飲んでるし・・・。

どうしようつか

「ねえ、金子さん。今のところ、金子さんを誘つてくれそうな人はいないの？」

あたしの言葉に金子さんは一瞬、キツい目であたしを見た。

「・・・こません。」

「じゃあ、あたしも同じだから、24日は一緒に出かけよつか？」

「え？」

パツと目を大きく開けて驚いた顔をしたあと、すぐに疑り深い表情に変わる。

「そんなこと言つて、直前になつて、誰かと行くことになつたりとか・・・。」

「そんなことしないよ！ だいたい、誘つ氣がある人は、もう誘つてきてるんじゃないの？ だって、あと10日くらいしかないんだよ？ プレゼントの都合だつてあるだろつか。」

「ん――――。そりですよね。」

やつぱり、ちよつと田がすわってるかも。

「あたし、去年もおととしも、何人かで宴会があつたんだ。でも、そつちは『氣』にする必要がないから、よかつたら一緒に・・・」

「行きまーす。谷村さんと一緒に。」

「うふ。やうじよひね。」

やけに真剣な顔をしてこるのが『氣』になるナビ。

「もし、谷村さんが誰かに誘われたら、わたしもそれについて行きますからねー！」

はいはー。

わかりましたよ。

でも、金子さん。

その約束、明日まで覚えていらっしゃるの？

翌日の朝、いつもあたりで秋月さんに会つて、金子さんとの約束を話したら、秋月さんは笑いながら言つた。

「じゃあ、僕が紫苑さんを誘つたらい、両手に花つてことだね。」

・・・まさか？

「す、」く魅力的だけど、今月は忙しくて、年内まとめて残業なんだよ。クリスマスもなし。あーあ、せっかく楽ししそうなのこ。」

よかつたー！

・・・って、ダーリンの部分が、だろ？

「でも、紫苑さんがあの子同士でこるなり安心だな。」

「やつ、やだな、秋月さん、そんなこと……。」

すぐ、ドアに立って戻ってきたから……。

わーん。

顔が赤くなっちゃつよ。

「紫苑さん。」

呼ばれて見上げると、秋月さんの無邪気な笑顔。

この優しくてちょっとカワいい笑顔には、つい見忘れてしまう。

「昨日は誤けなかつたんだから……。」

そこまで言つたきり、ふつ口を結んで下を向いてしまつた。

昨日？

「やつぱつこいや。」

・・・なんだらうへ、

わつ一度こつちを向いたときも、またわつあと同じよつた笑顔で。

何でも気軽に言う人の「言えない」ともあるんだ……。

金子さんはその約束をきちんと覚えていた。

毎休み、トイレで

「楽しみですねえ。どんなお店にしましちゃうか？」

と、口走りしている。

忘年会のときとは別人のようだ機嫌がいい。

「紫苑。楽しそうでいいわね。何の話？」

「ああ、美歩。クリスマスと一緒に出かける話だよ。」

「彼女と…ええと…金子さんだけ？」

「はい。彼氏がいない女同士ってことだ。」

金子さんがウキウキと答える。本当に楽しもつね。

「あ、じゃあ、あたしも行きたい。いいでしょ、紫苑？」

「え？ 美歩も？」

「なによ、ダメなの？ あたしだって、彼氏はないんだから。」

彼氏はいくつてもモテるくせに。

「金子さんは？ 美歩が一緒にでもかまわない？」

金子さんは少し驚いた顔をしていたけれど、すぐに笑顔になつて

「もちろん、いいですよ。」

と、言つた。

「ありがとう！ 金子さんは気が合ひそう」

金子さんと顔を見合わせて喜ぶ美歩を見ていたら、なんとなく不安になつてきた。

金子さんは可愛いし、美歩は美人。

この一人と一緒にいるだけで、なんだか申し訳ない気分になる。

それに……。

きのうの金子さんの態度と先週の美歩の追及を思い出すと、少しばかり身の危険を感じる。

二人から変な勘ぐりで責められたりしたら怖い……。

「ね、ねえ。金子さんも美歩も、全員が彼氏がないんだってこと、忘れないでよ。」

「わかってるって。」

「大丈夫ですよ」

「クリスマスなんだから、お洒落して行こうね！」

「まいー。」

本当に、元気じゃね。

## 27 クリスマス・イブはなぜやるの？

「紫苑ちゃんと金子さんと石川さん？ 楽しかつた組み合せだねえ。」

その週の金曜日。

仲間内の忘年会で、金子さんから話を聞いた真鍋さんが笑う。

今日の参加者は7人。

女の子は金子さんとあたしのほかに、金子さんの同期の榎原知世さん。おつとりした、笑顔の可愛い子。

男性陣は真鍋さんと龍之介、真鍋さんの同期の嶋田さんと一年下の竹田くん。嶋田さんと竹田くんは隣の課にいるので、仕事中もよく顔を合わせる。

「はい！ クリスマス・イブは必ず3人で一緒に過ごすんです。谷村さんが誰かに誘われたら、全員で一緒に行くことになっちゃいます！」

金子さんが笑顔ではつきりと言に切る。

「どうして、あたし限定の話なのかわからないよ。金子さんだって、美歩だつて、声がかかる可能性があるのに。」

「紫苑が一番可能性が低いのになあ。」

龍之介が横からからかう。

からかうつていつても、事実だからべつにいいけど。

「神原さんは一緒にやないの？ 仲良しなのに。」

竹田くんの質問に神原さんが赤くなる。

「ともちゃんは彼氏がいるもんねー。」

金子さんが代わりに説明すると、神原さんはますます赤くなつて慌てた。

なんだか可愛い。神原さんだけじゃなくて、金子さんも。2年若いつて、こんなに違うんだ・・・。

洗面所に立つた帰り、一緒になつた真鍋さんにまた笑われた。

「金子さん、張り切つてるね。石川さんもお酒が入ると豪快なところがあるし、一人で大丈夫？」

他人から見ても、やつぱり心配なんだ・・・。

「実は、ちょっと不安なんです。一人とも、何か誤解してるみたいで。」

「紫苑ちゃんのこと？」

・・・あ。

「それです！」

「え？」

「金子さんが気にしてたことの一つは、あたしが名前で呼ばれてるつてことだつたんですね。つちの課の忘年会のときじ、そのことを言い出しじ、『ある』つて。」

「ふ。」

真鍋さんが遠慮がちに笑う。

「やうなんだ？ 彼女、紫苑ちゃんに焼きもひ焼いてるんだね。」

「まあ・・・、やうみたいですね。」

「紫苑ちゃんのことば高木が最初から呼んでたから俺たちも習慣になつちやつたけど・・・やうか、ふうん。」

真鍋さんはまたくすぐす笑つて言つた。

「じゃあ、そのへりこは向とかしようね。」

席に戻ると、真鍋さんは早速、その話題を出してくれた。

「やうこえば、榎原さんつて『ともちゃん』つて呼ばれてるやど、何でこう名前だつける？」

「え、あの、”ともよ”です。」

「ああ、やうなんだ？ 金子さんは？」

「“みのり”です。三文字で、じつ……。」

そう言って、金子さんがテーブルにあつた紙ナフキンに『美乃里』と書いた。

「へえ。美乃里ちゃんか。ちょっと古風な名前だね。」

おお！

真鍋さん、わりげなく呼んだね。  
さすが。

「あ・・・、そうですか？」

あ。

金子さん、ちょっと恥ずかしそうな顔してると、  
いつも表情をすると、ますます可愛いよね……。

「知世ちゃんと美乃里ちゃんか。ねえねえ、これからそう呼んでも  
いい？」

あら。

竹田くん、素早い反応。  
まるで待っていたような。

「ええと……。」

「あ、あの、どうや。」

榎原さんが迷つてゐる間に、金子さんが頬を染めて頷いた。

それを見ていて、ふと気が付いた。

可愛らしい金子さんは、きっと大学でも人気者だったに違いない。彼女にはそんなつもりがなくとも、男の子たちが放つておかなかつただろう。

だけど、うちの会社はそれほど大きくないし、男性陣も穏やかで控え目な人が多い。

だから、きっと少し淋しかつたんだ。

まだ大学を卒業して一年経っていないんだもんね。

あたし、もつと早く気付いてあげればよかつた。  
毎日、隣にいて話してゐるのに。

「ねえ。あたしも『美乃里ちゃん』って呼ぼうかな？ 榎原さんのことは『ともちゃん』って。いい？」

「ああ、はい！ もちろんです！」

金子さん 美乃里ちゃんが嬉しそうに答える横で、ともち  
ゃんも同じこと頷く。

「やついたら、うちの課長って、変わった名前ですか。」

嶋田さんの言葉を皮切りに、そのあとしばらく、同僚のや友人の名前の話で盛り上がる。

『美乃里ちゃん』と『ともちゃん』も滞りなく定着して、あたしは心の中で真鍋さんに深く頭を下した。

「龍之介はクリスマスの予定はあるの？」

いつものように送つてもらう電車の中で、思い出して訊いてみる。  
去年とおとどしは、同じ宴会に参加していったっけ……。

「ないな、今年も。」

短い答え。

「ふうん。龍之介って、モテそうなのにな。」

そう言つたら、隣で吊り革につかまっていた龍之介が、ちょっと体を引いて、気味悪そうにあたしを見た。  
そんな顔しなくてもいいのに……。

「なんだよ、急に。」

「うん・・・、べつに。この前、あらためて見たら、そつ思つたの。龍之介、かつこいいのにね。」

相手がいないなんて、不思議・・・。

あたしが考え込んでいる隣で、龍之介は無表情に窓の外を見ている。

「そういえば、秋月さんは、」

あ、しまつた。

あの微妙な雰囲気を考えたら、他人に話すよつなことじやなかつたよ。

お酒が入つてるし、相手が龍之介だと思つて、つい気が緩んで。  
あたしつてやっぱり、こうこうところ、うつかり者だよね。

「優斗がどうかしたのか？」

「いや、ええと、その、年末まで忙しくて言つてたよ。クリスマス返上で仕事だつて。」

「……わうか。」

龍之介？

「どうしたの？ なんか難しい顔。」

「べつに。何でもない。」

そう言いながら、ヤリと笑う。

そうやう。

その方が龍之介らしいよ。

「なあ、紫苑。次のアップルパイはいつ？」

「え？」

マンションに向かつて歩きながら、龍之介が楽しそうに話す。

「だつて、あれは試作品だつたんだろ？ まだ練習中だよな？」

「うん……。」

たしかにやうだつた。

「だけど、龍之介、美味しいって言つたじやん。」

「でも、あの見た目じや、認めるわけにはいかないな。」

「えへ、やつぱり……。」

「ほひ。『やつぱり』ってことは、自分でも分かってたんじゃない

が。」

「やつだけど。」

「あ。もしかして、俺のために作はりたくないとか?」

「やだな! 違うよ!」の前だつて龍之介が美味しいって言つて  
くれるか考えながら……。」

あ……れ?

これじゃあ、なんだか……ちょっと……。

「今年中?」

「え?」

あたしの躊躇には気付かなかつたよひと、龍之介が楽しげに尋ねて  
くる。

「今年中にもう一回作る?」

「う・・・。どうだらうへ、土田も祝田もおなじ、やる気が出る  
かどうかの問題なんだよね。」

「そうか。美味しいのになあ。」

そう言わると、嬉しくなってしまひ。  
思わず顔がニヤニヤしてしまつた。

「ねえ、龍之介は？」

「え？」

「龍之介は何がやらないの？」

「何かつて・・・？」

「だって、あたしだけ頑張ってるよ。」

「俺は・・・。紫苑、何か希望はあるのか？」

「龍之介に？ 希望？」

「・・・ないのか。」

「・・・ないや。」

ため息なんかつけやつて。  
ちよつと残念そつ。

「うん。よく考えたら、龍之介にはお世話になつてばかりだもんね。こいつやつていつも送つてもらつてるし、この前は景色を見に連れて行つてくれたよ。あたしの方がお礼しなくちやいけないんだよ。」

「そうだよ。

いつも、龍之介にお世話をなつてゐる……。

「やうだ、紫苑。」

「なに?」

「もつ買つたか、スキーウェア?」

「ああ、うん。仕事帰りに美乃里ちやんと一緒に買ひに行つたよ。」

「やうか。向ひ行つたら、俺がばつちり教えてやるからな。」

「スノーボード?」

「スキーでもいいや。車で行くから、両方持つて行けるし。」

「やうか。ぎりぎりまで迷つたやう。もしかしたら、どっちもやらういで温泉だけつて方法も……。」

「それは却下。」

「ケチ。でも、あたしが温泉だけにすれば、龍之介はずつと自由だよ?」

「何言つてんだよ。それじゃあ、紫苑の情けない姿を見ゆつていう楽しみがなくなる。せつかく大笑いしようと思つてるのに。」

「あたしはアトラクションの一種つてわけ？・・・まあ、いいけど。それなら、絶対に見捨てないつて約束して。」

「当然だろ？」

「違う。あたしの場合、“当然”的範囲を超えてると悪いの。高校のスキー教室の先生にも見放されたんだから。」

「うわ、それほど？」

「やう。3日間やつて、立つのがやつとだつたの。だから、龍之介だつて、もしかしたら嫌になるかも・・・。」

「そんなことない。大丈夫だ。」

「うん。じゃあ、龍之介にまかせる。頑張つてよ。」

「俺じやなくて、紫苑が頑張るんだよ。」

「うーん、そうかもしだいけど、やっぱり龍之介が頑張るんだと思つよ。」

「やうか？」

「やうだよ。」

首をひねつている龍之介に手を振つて、マンションの入り口を抜け

る。

ウェアを選びながらも、ずっと不安が頭の大部分を占めていたけど、今ようやく、 “楽しいかもしれない” と思えるようになった。

忘年会が一通り終わって、年末までの日々はあつとこつ間に過ぎて行く。

平日は残業、土日は簡単な大掃除や片付け（そして昼寝）で終わってしまう。

今年は26日の金曜日が仕事の最終日。

うちの会社は29日からが通常のお休みだけど、その前に土日がく

つついで、例年よりも2日早く仕事が終わる。

休みの初日は朝にスキーに出発だから、最後の日には残業はした

くない。

24日も、美乃里ちゃんたけと出かけるから、とにかく計画的に仕事を進めないとね。

24日のお店は、美乃里ちゃんが探して予約してくれた。

「パエリヤかパスタかで迷ってるんですね。」

と悩んだ末、パエリヤが勝つて、スペイン料理中心のダイニング・バーらしい。

美乃里ちゃんと美歩が、どんな服を着て行くかの相談をしている姿を何度も見かける。

そんなに楽しみにしてるのか・・・。

秋月さんは、朝会うと、疲れた顔をしていることが多い。いつものようにここここしてはいるけれど、元気がない。寝癖が残っていたり。

そんな秋月さんを見ていたら、何かしてあげたくなつてきた。

でも、あたしにできることって、何だろ？

・・・・新しいお菓子・・・じや、ダメかな？

アップルパイは“試作品”という名のとおり、龍之介に作る  
“ついで”だもんね。

秋月さんのために何か作つてあげてもいいよね？

形はどうあれ、最初から美味しくできたおかげで、今ではバイブル  
のような気がするレシピ本をめくつてみる。

材料を買いに行く時間があんまりとれないから、簡単に手に入るも  
ので作れるのは？

簡単に手に入るか、少ない種類の材料ができるもの。

これは？

クルミを散らしたキャラメルソースのタルト。

タルトは初めてだけど・・・やってみよう。

材料はスーパーで手に入りそうなものばかり。タルト型は最初に買  
つてある。

ハンドミキサーを使う部分があるけど、アップルパイみたいに手で  
形を整える必要がないし。

作るのは23日の祝日。

ちゃんとできたら、24日の朝に渡せるように、秋月さんに連絡し  
なくちゃ。

喜んでくれるかな・・・？

でも、失敗すると困るから、できあがるまでは秋月さんには黙つていなくちゃね。

それに、クリスマス・イブの日に渡すのに、キャラメルのタルトつてどうなんだろう？

・・・まあ、いいか。

クリスマスプレゼントつてこりわけじゃないんだから。

そして。

気合いを入れた23日。

朝9時ごろからキッチンに立つ。

やるぞ！

本を見ながら手順を確認。

まずは必要な道具を出して、材料を量つて、並べる。  
下準備。

先に生地を作つて型に入れて焼く。

そこに鍋で作ったキャラメルソースとクルミを入れて、もう一度焼いたら出来上がり。

うん。

難しくない・・・よくな気がする。

がんばるぞー！

・・・出だしはよかつたんだけど。

どうしようつへ！

わからない！

本のこの解説と、このボールの中のものは同じ状態なの？  
これはもつとかき混ぜるべき？ それともやつ過ぎちゃつてゐるの？

手順は間違つてない。

何度も読み直した。

でも、どう見ても、同じには見えない。

写真とは色が違うし、混ざり具合も違う。

このまま進めてもいいのか、すでに失敗しているのか・・・？

どうしようつへ！

ああ、もう！

一人で初めてのものを作つたりするんじゃなかつた！

本当に、どうしたらいいんだろ？・・・？

そうだ！

真由！

真由に電話しみつー

・・・・出ない?

あー仕事中か!

そうだった。

真由はケーキ屋勤めだもん。クリスマス前のこの時期は忙しいんだよー

ああ・・・、もう無理かも。  
捨てるしかないのかな・・・。

がっくりしながらダイニングの椅子に座る。

調理台には、まだ使われていない粉やクルミなどの材料が並んだま

ま。  
ボウルの中のねとねとのものと、あちこちに飛び散ったバターや手

つかずで並んだ材料を見ていたら、なんだか悲しくなってきた。

やっぱりあたしには、お菓子作りなんて無理なんだ・・・。

ちつちつちりん、ちつちつちりん・・・。

携帯の着信に使っている黒電話の音。

「真由？！ 気付いてくれた？！」

大急ぎで携帯をつかんでよく見ないままボタンを押して叫ぶ。

「真由~~~~！ たいへんなの~~~~！」

といひが。

「あの、」

と聞こえたのは男の人の声？！

「あれ？ やだ！ 『めんなさい』。」

ひやー！

もう！ どうしよう？..

そそつかしくて困つちやー！

顔が熱い。

見えなくてよかつたー！

「あの、すみません、どうひらさま・・・？」

「ええと、秋月です。あの、大丈夫？」

うわ。こんなときに。。。

「あの。。。」

「今、『たいへん』って。。。」

ああ・・・。

やつぱり聞いたよね・・・。

「あの、はい、まあ、なんとか。」

「何かやつてる途中だつた?」

う・・・。

途中も途中、ものすゞい途中だよ。

失敗か、まだ失敗していないかの分かれ目なんだもん。

ふう・・・つとため息が出てしまつた。

「紫苑さん? 本当に大丈夫? 僕じや相談にのれない」と?

秋円さんの優しい声を聞いたら気持ちが落ち着いてきて、自然と言葉が出てきた。

「・・・今ね、タルトを作つて。」

「ああ、そだつたんだ。」

秋円さんの声が、ほつとしたような明るい声に変わる。

「それでどうしたの? 火傷でもした?」

優しいよね・・・。こんなに心配してくれるなんて。

「違う。あのね、途中でわからなくなつたりやつて・・・。本と自分

のが同じかどうか、分からぬの。」

「ああ、そうか。」

そんな言葉一つでも、気持ちが安らぐ。  
もう大丈夫。

「すぐに見に行つてあげたいけど、仕事の途中で無理だから・・・。」

「あ・・・」めんなさい、忙しいのに。」

「ああ、大丈夫。休日出勤で来ているだけだし、もつお昼にすると  
こうなんだ。」

お昼? ホントだ!  
もうこんな時間。

あたしつて、やっぱり要領が悪いんだな・・・。

「紫苑さんが見てるのは僕が選んであげた本?」

「あ、うん、そう。」

「どじが分からぬの?」

「生地を作るといひ。バターと砂糖と卵を混ぜてみたんだけじ、本  
の写真と色も混ざり具合も違つみみたいな。」

「ええと・・・そこだと、次は粉を入れると」と云ふ。」

「うん。」

しばらくの沈黙のあと、秋円さんの明るい声がした。

「たぶん、色が違うのは卵の黄身の色とか、何かそういう材料のせいかかもしれないよ。混ざり具合って・・・？」

「“なめらかに”つていうのが分からなくて。自分が作ったのはなんだかボトボトしてゐみたいな感じで。」

「うーん・・・。卵がそのまま残つていなら、粉を入れてみたらどうかな？」

「粉？ 大丈夫かな？」

「もし失敗していたら粉も無駄になっちゃうけど、そのままあきらめちゃうよりはいいんじゃない？」

「ああ・・・、そつか。」

なんだか気持ちが前向きになつてきた。

「わかつた。やってみる。」

「うん、そうだよ。そんなに厳密に本と同じじゃなくとも、なんとなく“こんなもんかな？”つていう感じでやっていいらんよ。」

「それでいいの？」

「うん。失敗したらしたで、次のときにつまんでできればいいんじゃ

ないかな。」

「ううかー。

なにも、今日、完璧にできなくてもいいんだよね！

「やうだねー！ ありがとー、秋月さん。もうひとつしゃってみる。

「よかったです。元気が出たみたいで。」

秋月さんの笑顔が見えるよ。

「うん。ありがとー。」

「じゃあ・・・。」

「あ、待って。何か用事があつたんじゃ・・・？」

「え？ ああ、いいんだ、べつに。ちょっと疲れたから、紫苑さんと話したら元気が出るかと思つて。」

「ああ・・・、それなのに、あたしの方が励ましてもらひちゃって・・・。」

申し訳ありません！

「あははー！ いいんだよー、紫苑さんの役に立てたら嬉しいから。それに、紫苑さんがちょいちょい困つてるときに電話したなんて、まるで僕に特殊能力があるみたいだよね。」

そういえば、秋月さんはタイミングが合ひついたことが多いな。いろんな

なところで。

服がお揃いだつた、なんてこと也有つたし。  
なんだか面白い。

「秋月さんも元気出た？」

「うん、もちろん。じゃあ、今は切るね。時間ができたらまた電話してみるよ。」

「ありがとう。仕事、頑張ってね。」

なんか・・・ほつとした。  
あきらめないで、やってみよ。

秋月さんに言われたよつて次の手順に進んだら・・・「まあいいった  
！まるで奇跡のよう！」

タルトの生地はうまくまとまって、本に載っている次の写真とほぼ  
同じような状態になつた。

本当に、「こんなもんかな？」でいいのかもしれない・・・。

そのあとも、ところどころ不安な部分はあつたものの、秋月さんの  
“こんなもんかな？”といつ言葉を、お守りのように心の中で  
繰り返し続けて。

生地を型に敷き込もうとしたら、何故かぼろぼろして、あちこち欠

けてしまつた。

けど、残つた生地で補強しあやおつー。

クルミを炒るつて・・・まあ、このくらいでいいか！

キャラメルソースのキャラメル色つてどのくらいなの？  
そうだ。きっと、お菓子会社ごとに違うよね？  
じゃあ、あたし的にはこれくらいでいいかな。

というわけで、下焼きしたタルト生地にクルミとキャラメルソースを流し込んでオープンへ。

何分か経つてのぞいたら・・・これって、いい感じじゃない？

型の中で、キャラメルソースがぶくぶく煮立つてる。  
キャラメルの甘い香りが部屋に漂ってきた。

もしかしたら成功してるのかも！

焼き上がつて出てきたタルトは生地の一部に亀裂が入つて中身が染み出でていたけれど、あたしが初めて作ったにしては上出来といえる状態だつた。

それに、なによりもこのくらい！  
絶対に美味しいに違いない。

嬉しい！



## 28 クリスマス・イブの前に（後書き） (略)

キャラメル味のタルトの作り方は、前回のアップルパイと同じく『ニューヨークスタイルのパイとタルト、ケーキの本』(平野顯子著 2008 主婦と生活社)を参考にさせていただきました。

## 29 クリスマス・イブの朝

タルトは大成功・・・だと、自分では思つ。

だつて、美味しいんだもん。

夜、小さく切つて食べてみたら、自分で作ったものなのに、あんまり美味しくてびっくりした。

びっくりしたのは、本を見ただけでは味を想像できなかつたからでもあるんだけど。

でも、美味しかつた。

一口食べて、幸せな気分になつた。  
あたしが作ったものなのに！

朝、秋月さんにあげるために切つたら、昨日よりもキャラメルソースが重く硬くなつてゐる。

一切れ食べてみたら昨日よりもどっしづとして、クッキーのよつこなつたタルト生地と一体感が出て、いい感じになつっていた。

嬉しい。

秋月さん、喜んでくれるかな？

作る途中で心配してもらつたので、できあがつたときに写真を撮つて、お礼のメールと一緒に送つておいた。

でも、なんの目的で作ったのかは内緒。

秋月さんの驚く顔が見たい！

メールに『また明日ね。』と書いておいたら、秋月さんからも『また明日。』と返ってきたから、今日の朝は会えるはず。

かなり甘いので小さめに切った2切れを箱に入れ・・・きれいなリボンでも買っておけばよかつたな。

仕方がないので、可愛めのシールを貼つてみた。

ふと、残ったタルトが皿に入る。

美味しいけど、自分で食べるのはちょっと多い？

美乃里ちゃんと・・・もしかしたら龍之介にも食べてもらおうかな。

とこりどごる厚かつたり薄かつたりする生地だから、切っているとあちこち崩れてしまう。

もともと割っていた部分から裏側にもキャラメルがまわっていて、裏も表もベタベタな場所もある。

それでもどうにか切り分けて、クッキングペーパーとラップに包んで2つの保存容器に入れた。

これで、多少揺れても大丈夫でしょう。

「紫苑さん、おはよう。」

いつもどおり、駅で秋月さんが見つけてくれる。

「おはよう。昨日は本当にありがとうございました。」

まずは昨日のお礼から。

秋月さんが笑顔で「いいえ。」と言ひのを聞きながら、手に持つていた小さい紙袋を差し出す。

「これ、どうだ。」

「え？ なに？」

不思議そつな顔の秋月さん。  
驚く・・・かな？

「昨日のタルト。」

「ああ、電話のこと？ わざわざお礼なんて・・・。」

「違うの。」れ、秋月さんにあげよひつけつて作ってたの。」

「え？」

そのまま、秋月さんは立ち止まってしまった。  
後ろから来た人たちが、迷惑そつな顔であたしたちを避けて行く。

「秋月さん、歩かないと。」

あたしの言葉に2、3度まばたきをして頷くと、一緒に並んで歩き  
出す。

朝の通勤時間帯の歩調に合わせて、少し急ぎで。

「僕に？」

「そう。秋月さん、最近、だいぶ疲れていたみたいだったから。でも、これを作るのに、あたしがまた迷惑かけちゃったけど。」

「いや、迷惑なんて、そんなこと。」

戸惑った表情で、なんとなくも「」も「」と呟いた。  
あたしが差し出してこる袋はこつまでも田代がりつこのまま。

「もしかして、これ、好きじゃなー? サラベ甘いもんね。」

好きじゃないのなら無理に渡せない。

仕方ないから引っこめよう、と思つたとたん。

「あー! もりもり! 」

と囁いて、あたしの手から紙袋をセツヒ取つた。

「ねえ、本当に僕に作ってくれたの?」

紙袋を覗きながら、秋月さんが尋ねる。

「うふ、やう。秋月さん、ずっと仕事が忙しそうだったし、何かとお世話になつてゐるのに、こつも龍之介のつじじや懲にから。」

「ああ・・・せんといひ嬉しいよー。」

なんて嬉しそうな顔!

こんなに喜んでくれるんだつたら、せつと呼べ気付けばよかつた。

「でも、紫苑さん。どうせ渡してくれるんなら、誰もいないといふで渡してくれればよかつたの?」

くすくす笑いながら、秋月さんが囁いた。

「どうして？ 恥ずかしい？」

だけど、朝の通勤時間に、そんな場所はないよね。

違う。

秋用さんがあちゅうにといたずらに子のよくな表情で屈んで

「あんまり嬉しくて、紫苑さんを抱き締めてキスしたい！」

えええええええ？！

今度はあたしの足が止まる。頭がくらくらする。  
あんまりびっくりして、秋月さんの顔をまじまじと見つめてしまつ。  
秋月さんは、相変わらず楽しそうに微笑んで、そんなあたしを見て  
いるだけ。

「あの、もうこいつもつじやなくて。。。。」

「わかってる。気にしないで。でも、嬉しいんだもん。」

それまで言つてもうしたら、あたしも作った甲斐があるナビ・・・。

「じゃあね、紫苑さん！」

立ち止まつてゐるあたしを置いて、軽い足取りで秋月さんは走つて

行く。

その後の姿も楽しそう。スキップしていないのが不思議な気がする。

ああ・・・びっくりした。

あたしが思い描いていたとおり、秋月さんを驚かせることができたけど、自分がもっと驚いてるなんて。

だけだ。

あたし、驚いてはいるけど、意外に落ち着いてる。

しばらく前だつたら、手が震えたり、頭がガンガンしたり、苦しくなつたりしていたと思つけど。

秋月さんのああいうところ、もしかしたら慣れてくれたのかも。

それにしても、どうまで本気で言つてこるのか、よくわからぬいよ。

ビルの入り口の手前で、龍之介が少し前にいるのに気付いた。

こんなことつて、初めてじゃないかな。

ちょうどよかった。

タルトを食べるかどうか訊いてみよう。

「龍之介。おはよっ。」

少し走つて追いついて、あこせつしながら隣に並ぶ。

「ああ、紫苑。おはよっ。」

あれ？

ちょっと元気ない？

まあ、いいや。

「ねえ、龍之介って、すごく甘いものでも平気？ これ、昨日作つたんだけど、食べる？」

ビルに入ったロビーでちょっと横に龍之介を引っ張って来て、バッグに入れてきた入れ物を一つ出す。

フタを開けて、まずは自分で確認。

・・・大丈夫かな。多少崩れてるのはもともとだし。

入れ物を龍之介の方に向けて中を見せると、あたしが何か言つ前に、龍之介がすばやく一つ取つて、ラップをほどこいつとする。

「い、今、食べるの？」

「だつて、平氣かどうか、食べてみないと分からぬじやん。」

「そりやそうだけど・・・。」

みんなが通る場所だし、恥ずかしいんですけど。

仕方なく、タルトに巻いたラップをはずそうとしている龍之介をもつと隅っこまで引っ張つていぐ。

よつやくラップがはずれたと思ったら、ぼろぼろだった生地が折れて、かけらが床に落ちた。

「あららら・・・・。」

放置するわけにもいかず、急いで持つていた入れ物と龍之介のはず

したラップを交換して、落ちたタルトをくるむ。その頭の上から、もぐもぐと龍之介の声がした。

「紫苑。これ、もりいへ。」

「あ、本当？　いいの？」

立ち上がりながら訊いたら、龍之介が指を舐めながらニヤつとした。

「俺、こういうの好き。だいぶ形はぼろぼろだけどな。」

「うん、そりなんだよね。でも、初めて作ったにしては上出来でしょ？」

「うん。美味しい。」

やつたよー！  
美味しつて！

小さくガツツポーズが出た。

「自発的に作ったのか？　紫苑が？」

「うふ。そうだよ。」

すげいでしょ？

「なんかさあ、最近、秋月さんがお疲れ気味だつたから、甘いものでもどうかと思って。」

「優斗？ ジャア、わざ渡してたのは・・・。」

「ああ、見てたの？ これだよ。そばにいたんだつたら、声かけてくれればいいのに。」

秋月さんとも仲良しなのにね？」

龍之介が少しふてくされたような表情であたしを見る。  
そんな顔されても困っちゃうけど？」

ふうふと小さくため息をついてから、龍之介がやっと笑顔になった。

「今夜、石川たちと出かけるんだり？..」

「ああ、うん、そうだよ。美乃里ちゃんと3人で。」

結局、誰も男性からのお誘いはなかつたらしく。  
もしかしたら、あっても断つてるのかもしれないか・・・。

「終わつたら、駅まで迎えに行つてやるから連絡しろ。」

「え？ 迎えに？？」

「こつも送つてやつてるだる？ 今日は一緒にないから。」

「大丈夫だよ。龍之介が一緒じゃない日は、いつも一人で帰つてる  
んだから。」

そんなに過保護にされる必要はないよ。

「何言つてゐんだよ？ 今日は特別の日なんだぞ。変なヤツがつらついてるかも知れないじゃないか。」

え？

「やうかな・・・？」

2年前に男にあとをつられたときの怖さがよみがえる。

「だから、駅まで行つてやる。終わつたら連絡しろ。」

「でも、龍之介、今日は・・・？」

去年までは宴会に出ていたのに。

「誰かとつるんで飲みに行くのも虚しいから、特に予定は入れなかつた。紫苑が終わるころには家に帰つて、車で駅まで行く。」

予定を入れないのはプライドの問題か。

「でも、なんだか申し訳なこよ。」

「ここんだよ、どうせはママなんだから。それに、紫苑に何かあつたひじりするんだっ？」

「変なこと言わないでよ。そつこいつの、本当に怖いよ。」

「遠慮とかしないで絶対に連絡しろよ。待つてるから。」

「うん・・・・、わかった。」

「じゃあな。これ、サンキュー。」

タルトが入った入れ物を振つてみせながら、龍之介が大股で階段へと向かっていく。

また暗い道で変な人にあとをつけられたら・・・怖い！

あんまり甘えちゃ申し訳ないけど、絶対に龍之介に来てもらおう！

頼りにしてるからね！

### 30 クリスマス・イブの酔払い

このメンバーでお酒の会つていつのは無謀だった・・・。

いや、このメンバーでも、今田じゃなければ楽しいのかもしれない。でも、クリスマス・イブなんていう特別の日には無謀だった。絶対。

美乃里ちゃんが選んでくれたお店はお洒落な小ぢんまりしたダイニング・バーで、お酒もお料理も適度な値段で美味しい。

店内は少し落とした照明で、大人っぽいムード。

だけど・・・そういうお店だから、まわりにはカツプルがいっぱい！カツプルじゃないのは、あたしたちのほかにもう一組、カウンターにいる男性の一人連れだけ。もしかしたら、この人たちだって・・・？

「だいたいさあ、男つて勝手すぎるのよ。わかるよねえ、美乃里？」

「本当にそうですよねえ、美歩さん。みんな外見で勝手に人の性格まで決めちゃうんですから。」

「そうそう。あたしなんか、今までどれだけ遊び慣れてるみたいに思われたと思う？　本当はず『』ーく純情なのに。」

「あー！　なんですよ！　わたしは何にもできない顔だけの女だと思われて、やたらとみそっかす扱いされたりとか。本当に腹が

立ちますよ。」

美歩も美乃里ちゃんも、もうかなり出来上がってる。  
どれくらい飲んでたつけ？

メニューのカクテルを片つ端から注文していたように見えたけど・。  
・。

この一人の予想どおり、気が合ったのは事実。

美人と可愛い女の子だから、その外見のために苦労してきたのも事実だろう。

それは分かる。

でも！

なにも今日、ここに爆発しなくても！

美味しいお酒とお料理でいい気分になつて、一人とも声が大きくなつていてる。

だんだんと、周りのテーブルから視線を向けられる回数が増えてきたような気がする。・・・いや、確実に増えてる！  
もしかしたら、彼らに当てるために、美歩も美乃里ちゃんも、わざと声を大きくしているんじゃないだろうか？

しかも二人とも、服装が挑戦的というか・・・。

美歩はワインレッドのシルクのワンピース。

胸元にたっぷりとドレープがとつてあって深く開いている。

スカート丈はひざより少し短いだけだけど、ウエストから腰のラインがくっきりと出るデザインで、カールした黒髪を下ろして、同色のハイヒールもなまめかしい。

美乃里ちゃんは白い、スカートがひらひらしたひざ丈のワンピース。

スカートの裾と襟元が黒いふわふわした毛で縁取つてある可愛いらしいデザインで、白いハイヒールを合わせている。

背中の一一番上に黒いリボンがついていて、ウエストあたりまで下がつていてるその長い先が、動くたびにひらひらする。

髪は毛先が左耳のうしろに下がるようにアップにしてあって、上品な可愛らしさ。

どうもよく似合つてる。

だけど、なんとなく、わざと目立つ服装を選んで来たように見える。今日この日に、周りにいるであろうカップルたちに見せつけるために。

だって、一緒に行くことになつていてるのはあたしだよ？  
そんな格好されたつて、あたしは感心するだけだもの。

それともナンパされる気？

二人の会話を聞いてると、そういうのは嫌だという内容だと思ふんだけど・・・。

ああ・・・、この一人といふと、つづくあたしが場違いな気がする・・・。

あたしだつて、一応、それなりの服装で来たけれど、華やかさが違うし。

「紫苑はいいわよね、龍介くんがいつもついててくれるんだから。

」

うわ。

また始まつた。

「そうですよ。高木さんがうちの課に来るときは、いつも紫苑さんによっかり話しかけて。」

はあ・・・。

今日、何度めだらう？

まだ1時間ちょっととしか経っていないのに・・・。  
いくら普通の友達だって説明しても、一人とも納得してくれないんだもん、困っちゃうよ。

「なんで紫苑が、今、ここにいるのよお。」

そう言いながら、美歩は店員さんを呼び止めて、カクテルを注文した。  
もつやめておいたら・・・と言いたいけど、そんなことを言つたら、  
ますます責められそう。

「・・・誰も誘ってくれなかつたからだよ。」

わざわざ聞いたでしょ？

「秋月さんはどうしたのよ？」

ああ・・・。

新しい話題も危険・・・。

「あ、美歩さん、あたしも秋月さんのことは聞いてます！ 每朝、一緒に通勤しているんですよ。」

「美乃里ちゃん！ あれは偶然なんだってば。」

「紫苑～。一緒に通勤つて、ど～から一緒になの？ まさか家からとか・・・。」

「違うよー。駅で一緒になるだけだよー。変なこと言わないでよ。」

早く話題を変えなくちゃー。」

「美乃里ちゃん、美歩つてす」こんだよ。仕事中にいきなり来たお客様にも誘われたことがあるんだって。」

「美歩さんなら当然ですよねー。」

全然反撃になつてない・・・。

「やうよ。しかも、見た目だけしか見てもられない女じや、白腫にならないじゃないの。美乃里だつて、わかるでしょ」。

「はーー。男にとつて、連れて歩いて白腫できゅうひこうの視点で選ぶから、やうこいつしが起きるんですね。」

白腫されるだけ恵まれてるんじゃないだろうか？

「そりゃ。中身なんでもいいわけ。やうこいつのつて、あたしたちを物扱いしてるよね？」

・・・やうですか。

「やうです！ わたしも大学のときやうつかりしてやうこいつ人と付

き合つてしまつて、あとから気付いて愕然としましたよ。」

「本当? 酷いわね。それでどうしたの?」

「「」うちから捨ててやりました!」

「よくやつたわ、美乃里!」

こんな調子で一人の“見た目が良くて揃をした”話は延々と続き、その合間合間に、あたしへの当てこすりが紛れ込む。あたしももつと酔っ払ってしまえばいいんじやないかと思うのだけれど、二人の状態が目に入ると、飲んでもちつとも酔いが回つて来ない。

きっと、頭の中でブレークがかかつているんだと思つ。

9時近くになつてお店を出たときには、一人の美しい酔っ払いが出来上がつていた。

どうしよう?

この一人、ちゃんと帰れるんだろうか?

あたしとは帰る方向が違うんだけど・・・。

タクシーに乗せた方がいい?

あたしの心配をよそに、美歩と美乃里ちゃんは楽しそうに話したり、

くすくす笑つたりしている。

それだけじゃなくて、まっすぐ立つていられないみたい。

とりあえず駅がある方へ、一人を引き連れて歩き出す・・・と。

「ねえ、きみたち。一緒にもう一軒行かない？」

立ち塞がるように前に並んだ二人の男の人。  
どちらもサラリーマン風のスーツとホール特姿ではあるけれど、髪型  
や表情が、なんとなく遊び慣れた雰囲気。

なんか嫌だ。  
なんとなく怖い。

「すみません。明日も仕事があるので、もう帰らないと……」

とお断りしているあたしの横から、美歩が一步前に出る。

「なによ、あんたたち？　あたしたち、ナンパ男には用がないのよ。

」

美歩、やめて！  
相手にしないでよ！

「ワオ！　威勢のいいお姉さん！　カッコいいなあ。」

「あの、じめんなさい。もう帰りますから。ほら、美歩、美乃里ちゃん、行こう。」

二人連れの横を回り込もうとしたが、ニヤニヤしながらまた行く手  
を塞がれた。

「あと一杯くらいいいじゃん？　クリスマス・イブに女同士でこんなところにいるなんて、実は相手を探してたんじゃないの～？」

うわ。気持ち悪い！

もしそうだとしても、あなたたちは不合格です！

・・・って言ってやりたいけど、そんなことしたら逆効果だよね。  
でも、ここであたしが弱気になつたら、美歩と美乃里ちゃんが・・・  
。

「もう！ 行かないって言つてるじゃないですか！」

美乃里ちゃん？！

「うわー。きみ、怒つた顔もカワイイねえ。」

ああ・・・どうしたらしいの？！

とにかく、相手も酔つ払いなんだから、真面目に相手にする必要な  
いよね？

美歩と美乃里ちゃんの腕に手をかけて、二人連れから引き離そつと  
引つぱると、一人ともよろけながらもついて來た。

・・・けど、一人連れがその後ろから、あきらめずについて來る。

「そんなに警戒しないでよ。」

「一杯だけ付き合ってくれればいいんだからさあ。」

その二人に向かつて美歩があかんべえをする。

もつ・・・。

挑発しないでよ。

それに、この方向に歩いていたら、駅から離れちゃう。

うつかり立ち止まつたのがいけなかつた。

あつという間に一人連れが追いついて、両側から挟むよつて立たれてしまつた。

「さあ、行こ。」

美歩と美乃里ちゃんが腕をとられて引っぱられる。

二人ともあたしに身を寄せて抵抗しているけれど、男たちが諦めなければ行くしかない？

そうだ。

大きな声を出したら……。

「紫苑！ 美歩！」

女性の声がして、駆け寄ってきたのは。

「知佳ちゃん！」

その後ろから、原田さんが。  
助かつた……。

「どうしたの？ 何かトラブル？」

落ち着いた声で原田さんが言つて、その端正な顔立ちでじろりと男たちを見ると、一人ともあつという間に消えてしまった。

「知佳ちゃん、よかつた~~~~~！ 原田さん、ありがと~ござります！」

深々と頭を下げるとい、両隣りの一人がふりつきながら、回じよつて真似をする。

「いいんだけど……、どうしたの？　今日は3人？」

「はい……。」

「そうぞーす　あたしたち、誰にも誘われなかつた女同士で飲みに来たんぞーす。」

「もうぞーす　」

「ぐ。」

原田さんが笑いをこらえながら横を向いた。

「知佳ちゃん、どうしたらいいんだろう？　一人とももうひとつ酔つてるんだよ。あたしがタクシーで送つて行くしかないのかな？」

「でも、美歩とは方向が違うよね？　金子さんは？」

「方面的には同じだけど、もう少し遠く。」

「とりあえず、一人ずつタクシーに乗せちやつたら、あとは自分で帰れるんじゃないの？」

「もうなのかな？」

「えー？　いやです！　一人でタクシーに乗るのは怖い！」

「紫苑。あたし、もう歩くのイヤ。ああ・・・・なんだか気持ち悪い。」

知佳ちゃんと相談している横で、美乃里ちゃんと美歩が自分勝手なことを言い出している。

それを見て、知佳ちゃんはため息をついた。

「あははは！ これじゃあ、紫苑さん一人の手には負えないね。」

原田さん。

笑い、「とじやないんですけど・・・。

「誰か頼める人はいないの？ 龍之介は？」

「今日は用事はないって言つてましたけど・・・。

「ああ、じゃあ、電話してみよつか。」

そういつて、原田さんはさつさと龍之介に電話をかけてくれた。

### 3-1 クリスマス・イブのドライブ

「あ、龍之介？ む前、ヒマなんだって？」

原田さんが携帯で龍之介と話している。

それがあたしたち4人が取り囲んで・・・といつ状態。

美歩と美乃里ちゃんは、今度は原田さんを肴に盛り上がりしている。

「今さ、お前の同僚がたいへんな」とになってる。・・・え？  
知佳じゃないよ。」

あー。

知佳ちゃん、原田さんに『知佳』って呼ばれてるんだ。

知佳ちゃんを見たら目が合って、知佳ちゃんは恥ずかしそうに微笑  
んだ。可愛いなあ。

「紫苑さんと美歩さんと、ええと・・・」

「美乃里でーす！ えへへへ。」

美乃里ちゃんが原田さんの携帯に向かって叫ぶ。

「だつて。じつじつ状態なんだよ。やっぱほかの酔っ払いに絡ま  
れてて。・・・え？ まだよ。俺はドート中。」

すみません・・・。

「ああ、紫苑さんは大丈夫そうだよ。替わらつか。」

差し出された携帯で恐るおそる呼びかける。

「龍之介？」

『何やつてんだよ？』

やつぱり怒ってる？

「『めん。一人が飲みすぎちゃって、一人で帰れるのかどうかわからぬの。どうじょうづく。』

『タクシーは？』

「美乃里ちゃんは一人でタクシーに乗るのは嫌だって言うし、美歩は気持ちが悪いって……。あたしが一緒に乗つて行けばいいのかな？」

『一人を送つていいくのか？ 時間も金もかかりすぎるぞ。』

それは厳しい……。

でも、今の状態じゃ、仕方ないかも。

電話の向こうから、龍之介のため息が聞こえた。

『そー、K駅だつけ？』

「……うん。」

『じゃあ、一人を連れてM駅まで来い。4駆くらいなら移動できるだろう？ そこから俺が3人とも車で送つてやるから。』

「え、そんな！ それじゃ悪いよー！」

「どうしたの？ なあに？」

横から美歩が携帯を持つ手を引っぱる。

「もしもし〜。龍之介くん？」

取り戻そうと思つても、美歩の力が意外に強い。  
酔っ払いの馬鹿力なの？ セつきの気持ちが悪いってこいつのはおせ  
居？

「うん。・・・うん。わかつた。紫苑と美乃里と一緒にM駅に行く  
よ。お迎えようしね〜ん」

「りゅ、龍之介？」

ようやく携帯を取り戻して、呼びかける。

『もつ決まったから。紫苑、M駅まで頑張れよ。』

「ホントにやめんー」

『いいよ。M駅はタクシー乗り場の横に送迎スペースがあるから、  
そこで。じゃあな。』

本当に、「やめん！」

K駅の改札口までは、原田さんと知佳ちゃんがついてきてくれた。そのあいだ、美歩と美乃里ちゃんは上機嫌。

「龍之介くんが送ってくれるんだってー。」

「まるで紫苑さんみたいですねえー。」

・・・そんなにあたしのこじ、羨ましかった?

「紫苑。頑張つて。」

知佳ちゃんが励ましてくれる。

「せつや、龍之介にもせつ言われたよ。」

相変わらずくすくす笑つて千鳥足の一人を女性専用車へと追い立てるように乗せて、4つ田の駅、M駅へ。

タクシー乗り場・・・の隣

何台か停まっている車の中に、龍之介の小型車はいない。

「まだみたいだね。ちょっと待・・・あ、来たかな?」

ロータリーに入ってきた黒っぽい小型車が近付いてきて、運転席の龍之介が見えた。

前に止まった車に向かつて、美歩と美乃里ちゃんがきやあきやあと手を振る。

「紫苑が最後だから奥に乗れ。あとの一人はどうでもいいぞ。」

美乃里ちゃんが美歩に助手席を譲り、運転席の後ろに座つたあとの隣に美乃里ちゃんが乗り込む。

「しゅつぱーつ！」

美歩が自分の住所をカーナビにセット。駅の近くは多少混んでいたけれど、それ以外はノンストップで進む。

美歩が車のステレオにセットした曲を、美歩と美乃里ちゃんが熱唱する。車の中はまるでカラオケボックス。

あたしはそれを笑いながら聞いているけど、本当は龍之介に申し訳なくて、心の中でひたすら謝つている。

龍之介はまったく気にする様子もなく、一人を見て笑つているけれど。

美歩を送り届けたあと、美乃里ちゃんがナビと道案内のために助手席に移つた。

しばらく3人で話しているうちに、気付いたら美乃里ちゃんはすやすやと眠つている。

あれほど羨ましがつていたのにね・・・。

予定地の近くで美乃里ちゃんを起し、ようやく家の前で下ろしたときには、時計はすでに11時に近かつた。

「迷惑かけちゃって」めんね。」

しょんぼりしてこらあたしに、龍之介はバックミラー越しに笑った。

「いいよ。あの一人があんなに酔っ払った姿を見る機会なんて、そ  
うやうないだらうからな。」

「ほんとだよね。一緒にいくつて決まつたときには、一人が『気が合  
いそつ』って言つてたんだけど、本当に盛り上がりがつちやつてさあ。」

「紫苑は？」

「二人とも、見た目が良すぎて損をした話で盛り上がりがつたから、  
あたしが出る幕はなかつたよ。」

わははは・・・と龍之介が笑う。

「それにね、二人ともお店の中でも服装で目立つてるし、だんだん  
声が大きくなつてくるしで、気が気じやなくて、飲んでも全然酔わ  
なかつた。」

「そうか。たいへんだったな。絡まれたつて？」

「うん。お店を出たところで、一人連れにね。相手がしつこくて困  
つてるとこに、ちょうど知佳ちゃんと原田さんが通りかかつて助  
けてもらつたの。」

「たいへんだったな。」

「まあね。」

かなりドキドキものだつたな・・・。

「・・・」、「？」

窓の外に、キラキラしている景色が見える。

「ああ、ちょっと海の方にまわってみた。」

「ふうん。きれいだね。」

「うん。海の手前に大きな工場があるんだよ。あれは工場の明かり。」

「え。こんな夜なのに。」

建物なのか、太い煙突なのかよく分からぬけど、小さい明かりがたくさん点いている。ところどころに赤い光も。もっと前方には高い建物がいくつかあって、そのてっぺんに赤い光が点滅している。

暗い空。

暗い海。

暗い車の中。

聞こえるのはエンジンの音だけ。

「・・・龍之介。」

「ん？」

「ありがと。」

それしか言葉が見つからなかつた。

「うふ。」

龍之介も余計なことは言わなかつた。

途中のコンビニで缶コーヒーと肉まんを買つて一休み。  
お店の前に立つたまま、ほかほかの肉まんを食べる。  
パートのポケットに入れた缶コーヒーが温かい。

もづくいぶん遅かつたけれど、コンビニは明るくて、こんな時間で  
もクリスマスケーキを売つている。

お客さんも意外に多い。

やつぱりクリスマス・イブだから？

・・・そうか。

今日はクリスマス・イブだ。

クリスマス・イブに龍之介と一緒にいる。

予定外のドライブで、きれいな景色を見て。

もともと駅まで迎えに来てもらうことになつていただけれど。

「龍之介。あたし、龍之介に何も用意してなかつた。」

「何が？」

「クリスマスプレゼント。いろいろお世話になつてるの。」

「今朝、手作りのお菓子をもひつただ。」

「あれはプレゼントとは違つも。」

あんなまめのタルトじや申し訳ない。

「んー・・・。じゃあ、ソレ。」

やつぱりなんだ龍之介が、自分の頬をトントンと指差す。

それって・・・“ほっぺにチコッ” つてこと？

「やだな、龍之介ー。やつこのはちよんと相手を選ばないとい。」

まつたく、ふざけっぱかり！  
子どもみたい！

可笑しくなつて笑つてしまつ。

そんなあたしに、龍之介は笑いながらヘッドロックをかけてきた。

「苦しいー。降参、降参。」

ホントに子どもみたい！

龍之介の「着いただ。」といつ声でハッとした。あたし、眠つてた？

「「」あんー、送つてもうらつてゐるのに寝ちゃうなんてー。」

申し訳ない・・・。

よだれとか垂れていないだろつか・・・？

「いいよ。ちやんと歩けるか？」

龍之介、責めないんだ・・・。

こんなふうに気遣ってくれるなんて、ちやんと女の子扱いされている?

うわ。

変なこと考えちゃった!

なんだか、焦っちゃうよ。

慌てて車を降りると、全開にした運転席の窓から身を乗り出して、龍之介が紙袋を差し出す。

「これ、今朝もらったお菓子の入れ物。美味しかった。サンキュー。」

そんなに素直に褒められたら照れくさくな・・・。

何も言えずに領いて受け取ると、ふと、運転席のデジタル時計が目に入った。

〔 12：00 〕

日付が変わる。

クリスマスの朝。

咄嗟に屈んで、龍之介の頬に唇で触れる。

「じゃあね、龍之介。メリー・クリスマス。」

急いでひと言残し、マンションのガラスのドアを通り抜ける。胸がドキドキして、顔を上げることができないまま。

エレベーターの前でせりと振り向いたら、龍之介が手を振った。それを見て、あたしも。

部屋に帰って、すぐにお風呂をセット。

コートはハンガーへ、携帯をバッグから出して、明日は何を着て行こうかな・・・？

・・・・・。

洋服ダンスの扉に頭をもたせかけてため息をつく。

キビキビ動いてみても、実は何も考えていない。

さつきの自分の行動を考えないために、体を動かしているだけ。

でも、考えても分からぬ・・・。

ダイニングテーブルに置いた紙袋。

タルトを持って行った入れ物・・・洗わないよね。

美乃里ちゃんも、通りかかった係長も褒めてくれたタルト・・・よかつた。

キッキンへ持つて行きながらフタと本体を両手でつかんで一気に開けると。

「うわ?..!」

・・・なに?! なんか飛び出した!

龍之介! どんないたずらよ?!

びくびくしながら床を見たら・・・花束?

短く切ったピンク色のガーベラとチューリップがレースのリボンで結ばれて。

小さなカードがその近くに落ちている。

『Thank You and Merry Christmas  
! 龍之介』

いかにも龍之介らしい金釘流の文字が並ぶカード。

「くふふ。」

思わず笑いがもれた。

龍之介つてば。

いつたい、どんな顔して花なんて買つたんだろう？

でも、ありがとう。

お礼は “ほっぺに・・・。” で、ちょうどよかったです？

龍之介。

きみにそんなスタンンドプレーができるとは思わなかつた！  
ちよつと見直したよ。

朝、ちよつぴり強引に紫苑を迎えて行くことを約束させたといひが、  
まあ、いかにも龍之介らしい方法だと思つた。  
優斗だつたらきっと、「クリスマス・イブと一緒に過ごしたい。」  
つて、はつきり言つただろうけど。

龍之介はやつぱり慎重過ぎるね。

まあ、そのひと言が一人の仲を壊してしまうかもしけないって心配  
する気持ちはわかるよ。

そもそも紫苑が人を好きになることを怖がつてることを知つてい  
るしね。

でも、あんまり慎重過ぎて、タイミングを逃してしまつてしまつとも  
あるんだよ。

・・・だけど。

それだけじゃなくて。

龍之介は超照れ屋さんだね。

もし誰かにそう言われても、絶対に認めないで、“紫苑を不安に  
させないため”って言つのかな？

その慎重さと照れ屋さんの組み合せだと、あの優斗に対抗するにはよほどの決意が必要だよね。

だけど、あの入れ物に花束を入れて返してくるなんて、けつこうの気障だと思つよ。

今のところ、龍之介と優斗、どちらが優勢かはよくわからない。積極的で、素直に自分の気持ちを口に出してしまう優斗の方が、一歩リードしてるかもって思つてた。

軽いデートもしてると、優斗といふときの方が、紫苑はよく笑つてる。

でも・・・。

龍之介は回数が少ないけど、紫苑を驚かせるようなことをするね。

紫苑。

ゆっくりでいいからね。

あわてないで、ちゃんと確かめながら進むんだよ。

龍之介も優斗も、紫苑を急かしたりしないから。

二人とも、紫苑のことを一番に考えてくれるから。

いつも見守っているよ。

僕はいつも、紫苑のそばにいるよ。

### 33 クリスマスでも仕事です

寝不足だ・・・。

昨夜は帰るのが遅かつたし、そのついでに・・・あれこれ考え過ぎてしまつて、なかなか眠れなかつた。

あれこれ。

あんなことや、こんなこと。

秋月さんのこと。

美歩や美乃里ちゃんの言葉。

それから、龍之介のほっぺに・・・といつ自分の衝動的ともいえる行動。

結局、考へても答えは出なかつた。

そのうち、真由の『成り行きに任せてみたら』とこう言葉がふつと浮かんできいて、急に落ち着いた。

・・・と思つたら、朝だつた。

朝の忙しい時間に悩んでいる暇はない！

昨夜の疑問が頭に浮かんだ途端に、自分の中では結論が出た。

“ほっぺ”は“お酒のせい”だつたんだ。

美歩と美乃里ちゃんに氣を取られていたときは醉わなかつたけど、

実際には飲んでいたもの。

龍之介に送つてもらつて安心して、あそひで一気に酔いが回つたに違ひない。

その証拠に、今はこんなに冷静。  
お酒の影響つてす”いね。

今日、龍之介に、もう一度よくお礼を言わなくへや。

「よひ、紫苑。」

龍之介？

乗り換え駅のホーム。

気付くと隣に龍之介がいた。

「おはよひ。」

黒いトレンチコートに黒いスーツ、黒い手袋、黒いバッグ・・・黒ずくめの龍之介がニヤリと笑つてゐる。

昨夜のことを思い出して、一瞬、鼓動の間が空いたような気がしたけれど、その笑い顔を見たら、なんだか安心した。

「おはよひ。昨日はどうもありがとうございました。」

丁寧に頭を下げるお礼。

「本当にごめんな。あたしが一人を押さえられなくて、あんなに長距離をまわつてもういうことになつちゃつて。」

ああ、そうだ。

「それから、お花もありがとう。びっくりしちゃった。」

ホームに電車が入つて来て、人波に乗つて乗り込む。

「そうか？」

「うん。」

混んではいるけれど動けないほどじやなく、龍之介と並んで通路に場所を確保。

距離が近いのは仕方ないが、通勤電車なんだかい。……でも、ちよつと恥ずかしいかも。

「空っぽだと思つて、いつやつて、両手で一気にフタを開けたら、中から飛び出してきてね。思わず悲鳴をあげちゃつたよ。」

龍之介がくすくす笑う。

「いかにも紫苑らしい。」

「そう?」

「ガサツつていうか……。」

「ぱははは。」

「やういえば、今日はびつしたの? いつもはむつと早い電車つて

「言つてなかつた？」

「寝坊した。」

あ。

「『』めん。昨日、遅くなつちやつたもんね。」

「いじよ、べつに。聞こひうりんだから。」

「うさ。ホントにありがとうね。」

龍之介がまたニヤリと笑い、話題は次へ。

「27日・・・むつあさつてだな、朝の4時半じる迎えに行へからな。」

「あ、スキーのこと？ 4時半？ そんなに早く？」

起きあがれんだろうか？

「向こうで午前中から滑りたいからな。真鍋さんたちと途中で合流する予定だよ。」

「じゃあ、今日と明日で荷造りしないことね。」

「わかった。龍之介の車は、あたしのほかにね？」

「わづ。で、畠中へ寝るよ。」

「わかった。龍之介の車は、あたしのほかにね？」

「嶋田さんと竹田を途中で拾つて行く。ちょっと狭いかもしれないけど我慢してくれ。真鍋さんが金子さんと榎原さんを迎えて行くところなつてる。」

ふつと、せうか。

「隙間に落ちるなよ。」

降りるとき龍之介に言われた。

電車とホームの間のこと?  
いくらなんでも・・・いえ、実は毎日、かなりびくびくものなんだ  
けどね。  
びくしてわかったのかな?

「あれ? 龍之介?」

改札の手前で、いつもの秋月さんの声。  
でも、今田は龍之介と会つたことが不本意だと顔が苦げに見えるよう  
で可笑しい。

「よつ。」

龍之介のあいだのよつなものには返事をせず、じこじこと笑いかけてくる秋月さん。

「紫苑さん、おはよつ。」

「おはよー。」

秋月さんが龍之介とは反対の隣に並ぶ。

あ。

もしかして、こういう状態を“両手に花”と言つのではない。  
龍之介って意外にかつこいいし、秋月さんはカワイイ系。  
周りから嫉妬のまなざしを向けられていたりして！

改札口を抜けながら、さつげなく周囲を見回してみる。

・・・みんな忙しそうだな。年末だもんね。  
つまんない。

「紫苑さん、タルト美味しかったよ。ありがとう。」

「あ、ああ、本当？ よかった。」

「あのタルトって、食べると心が和むよねえ。」

うーん。

秋月さんの笑顔も心が和むなあ・・・。

「たしかにつまかった。紫苑にしては上出来だったよな。」

「龍之介？」

秋月さんが眉間にしわを寄せて龍之介を見た。そのあと、問い合わせ  
るようになたしを。

龍之介は知らん顔。

「え・・・えと、食べきれないから、つりの職場と龍之介にあげたの。」

「ふうん。」

一瞬、不満そうな顔をしたけれど、秋月さんはすぐに機嫌を直して言った。

「でも、僕のためにつくってくれたんだよね？ ついでじゃなくて。」

「まつたく、もう。

そんなこと云いだわるなんて、笑っちゃう。

「はい、そうですよ。」

「じゃあ、いいや。」

満足そうな顔。

「ふん。」

龍之介は不満そうな顔。

面白いなあ・・・。

一人の様子を見比べて密かに笑っていたら、秋月さんが龍之介をチラッと見た。

また何か・・・？

「せりいえば、紫苑さん。次のアップルパイはいつ作るの？」

その話題？！

けつこう爆弾な気がするけど？！

背中がヒヤッとして、額には汗が。。。

「アップルパイ？」

龍之介が秋月さんじやなくて、あたしに問い合わせる。

ああ、もう一

一人でできとうに話し合って決めてくれたらいいのに！

「ひ、次・・・はね、まだ決めてないよ。あの、・・・年末年始は忙しいから。」

龍之介の視線には気付かないふり。

「せり。次の試作品も楽しみにしてるよ。」

秋月さんも、龍之介のことは無視することに決めたらしい。

「うん・・・。」

顔を上げられない。

はじめっから、全部ほんとのことを言つておけばよかつた！

「龍之介くん！」

後ろから声がしたと同時に、女の子が一人・・・美歩と美乃里ちゃん。

走つて追いかけて来たらしい。一人とも息が切れている。

たぶん、昨夜のお礼でも言いに来たんだろう。

それにもしても、なんてタイミング良く出てきてくれたんだろう…。

「おはよー、紫苑、秋月さん。」

「おはよー!」ぞこます。」

二人はあたしたちにも声をかけてから、そろつて龍之介に向かって頭を下げた。

「「私のつはお世話になりました!」」

「ああ・・・べつにいいよ。」

「そんなことない。本当に申し訳ないことじちやつて。」

困った顔をして歩き出した龍之介に一人が並ぶ。  
あたしは秋月さんと並んでその前を歩く。

「何かあつたの?」

秋月さんの小声の質問で、昨日の一人を思い出して笑ってしまった。

「昨日ね、あたしとあの一人で食事に行つたんだけど、」

「ああ、わかったよ。」

「わいでね、あの一人が飲み過ぎちゃって、最終的に、龍之介を呼んで、送つてもいいことになっちゃったの。」

「え？ タクシーで送るとかじゃなくって？」

「うふ。まあ、こうこうあってね。原田さんにも助けてもらつたんだよ。偶然に会つて。」

「諒了？」

「わいなの。原田さんは知佳ちゃんとトーントー中だつたんだけじね。ああ、」めんなさい。あたしまは「だから。続させまた」

勤め先のビルの前で、こつものとおつ、手を振るひつゝ。

「あ、紫苑さん。今日、お昼の予定はある？」

早口で尋ねられて、その勢いで押されて首を横に振る。

「じゃあ、一緒にどうし？ タルトのお礼。」

「お礼なんて、」

「と、僕の息抜き。」

息抜き・・・。

「ううのうう、お毎もコンビニで買って仕事をしながらだったか

ら、クリスマスくらいには職場から出たいなと思つて。「

「ああ・・・、うそ、やつこり」となら。あたしとでいいの、かな  
?」

「うそ。紫苑さんといふと楽しいから。」

ああ、この笑顔で言われると、断れないよね・・・。  
それに、あたしが秋月さんの役に立てるなら嬉しい。

「じゃあ、息抜き用の楽しい話を考えておくね。」

「ありがと。じゃあ、お風呂に入りで。何かあつたらメールするか  
う。じゃあね!」

そうだ。

美歩たちは・・・? 後ろにはいない?

ビルに向かうと、ロビーで美歩と美乃里ちゃんに手を振つて階段を  
上つて行く龍之介の後ろ姿が見えた。いつの間にか追い越されてた  
んだ・・・。

二人はそのまま立ち止まって、どうやらあたしを待つてくれている  
らしい。

「紫苑~。昨日は迷惑かけちゃって、ごめんね!」

「紫苑さん。調子に乗り過ぎてしまつて、すみませんでした・・・。

」

ロビーに入ったところで駆け寄られて、美歩には抱きつかれ、美乃

里ちゃんは平謝り。

「うん、大丈夫だよ。ちょっとびっくりしたけど。」

少しは覚悟もしていたし……。

「一人とも、ちゃんと覚えてるんだ？」

「ちやんとじゃないんだけど、まあ、かなりね。」

美歩が舌を出しながら言った。

その隣で美乃里ちゃんが神妙な顔をして頷く。

「あのときはどうなるかと思つたけど、今になつてみると、面白かつたよ。ふふ。まあ、無事だつたから言えるんだけど。」

一人とも、あんなに愚痴り屋だつたなんてね。

「知佳ちゃんにも謝つて……、あ、知佳ちゃん。」

ロッカー室の前で、出てきた知佳ちゃんを見つけた。

「昨日は」「めんね~。」

口々に謝るあたしたち3人に、知佳ちゃんはまるでマドンナのよくな微笑み。

「いいのよ。やけ酒を飲みたくないこともあるわよね。」

なんていうか、 “幸せにつぱい” な感じ？

ほつとした顔でロッカー室に入つて行った一人と離れて、知佳ちゃんに身を寄せて訊いてみる。

「原田さんと、あれからどうだった?」

「やだ、紫苑! ちやんと帰つたわよー。」

「え?」

あたし、そんなこと訊いてないよ? !  
こつちが赤面しちゃうじゃないの・・・。

「す」「一く楽しかったの。幸せなんだもーん。」

「やつ・・・。知佳ちゃんだけでも幸せでよかつたよ。」

「ありがと、紫苑。」

うふふ、と笑つてゐる知佳ちゃんは、まるでふわふわと宙に浮いて  
いるように見える。

お友達が幸せな姿つて、いいものだね・・・。

「紫苑もちやーんと幸せになれるわよ。じゃあね~」

踊るよつな足取りで自分の職場へ向かう知佳ちゃんは、まるで光り  
輝いているよつに見えた。



美乃里ちゃんは「口酔いだつた。

朝は龍介やあたしに謝らなくちゃと思つて頑張つていたようだけど、職場の机についたとたん、両方のこめかみをグーで押さえつけてくる。

机の上にはペットボトルのスポーツドリンクが2本。

「頭が痛くて、のびが渴くんです・・・。」

よく見ると、皿の下にクマができているみたい。

「だいぶ飲んでたもんね。」

「いえ、あれだけじゃなくて・・・。」

美乃里ちゃんが辛そうに訴える。

「昨日、帰つたら、ちょうど姉がデートから帰つたところだ・・・。のうけ話を聞かされながら、ワインに付き合わされて・・・。」

あの時間から?

それじゃあ、辛いかもね。

「一口酔いがこんなにつらいなんて・・・。」

情けない顔でため息をついている。  
それでもやっぱり可愛らしいけど。

「昨日はどうだった?」

隣の課の竹田くんが、通りすがりに美乃里ちゃんに声をかけた。

「…………」

ぼんやりと竹田くんを見上げる美乃里ちゃん。  
答える元気もないらしい。

問い合わせるようにこちらを向いた竹田くんに、美乃里ちゃんの机の上のペットボトルを指し示す。

「え? もしかして一田酔い? 美乃里ちゃんが?」

驚いた竹田くんの意外に大きな声に、美乃里ちゃんが慌てて立ち上がる。

「ちつ、違います、違います! 一田酔いなんて、そんな……痛  
い…………」

みんなには知られまいとしていきなり動いたのがいけなかつたのか、

すぐに頭を抱えて椅子に座り込む。

課内の視線を逆に集める結果になつてるし。

「だいぶ酷そうだね。」

向かいの席の春山さんがくすくす笑う。

「すみません。あたしも一緒にいたんですけど。」

「谷村さんせいじやないよ。もう大人なんだから、自分で気を付  
けないとね。」

「はい・・・。」

美乃里ちゃんがしょんぼりと返事をした。

「「」あなたに弱いとは思いませんでした・・・。」

そうじやなくて、飲んだ量がすごかつたんだってば！

廊下で行き会つた美歩は元気だった。

「ちょっとひょっと」と言いながら、あたしをトイレに引っ張っ  
て行く。

トイレの中で周囲を見回す様子がなんとなく怖い・・・。

「紫苑。さつきは美乃里がいたから言わなかつたけど、あなた、龍  
之介くんと外で会つてるでしょ？」「

え？

なんていきなり龍之介の話題？

それに、“外で”つて・・・？

「外でつて、飲み会の帰りとは意味が違う？」

「 もう！ 何をとぼけてるのよ？！ それ以外のことは…」

・・・あ…

「ええと、うふ。この前、一回だけ会ったよ。」

この前だけじゃなく、ゆうべの“ほっぺに…”も思い出しつけた。

困っちゃうな。

もしかして、あたし、顔が赤くなつてる？

こんな反応したら、美歩に勘違いされちゃうかも…。

“勘違い”でいいんだよね…？

「 やつぱり。」

美歩。

もしかして怒つてる…？

「どうして分かつたの？」

「きのうの夜、紫苑は龍之介くんがどんな車で来るか知つてたみたいだから。」

「 あ。」

そうだった。

あのときは必死だったから。

「よ、よく気が付いたね。だいぶ酔つ払つてたみたいなの。」

「今朝、思い出して気が付いたの。紫苑つてば、それでも龍之介くんとは普通の友達って言つの？」

「美歩……。」

そんなこと聞われても……。

あたしと龍之介はそういう付き合い方をしてきたんだよ。それ以外に、なんて説明したらいいの？

困り果てて美歩の顔を見ていたら、美歩は大きなため息をついた。

「じめん、紫苑。」

「美歩が謝る」とはないけど……。」

美歩がむびしそうにあたしを見た。  
そして。

「違うの。」

違う?  
なにが?

「あたしね、龍之介くんの」と、ちょっと本気だったの。

「美歩。」

「だから、紫苑に焼かもう焼こう。」

「あの、あたし……。」

「それで、ちよつと紫苑に意地悪なことを書つてみたの。」

美歩……。

「でも、ちよつこいや。」

え？

「もともとあんまり望みはなかつたんだし、そのうえ昨日、あんなじいじいを見せちやつたからね。」

えへへ、と肩をすくめてみせる美歩。

「あなたことじいじで、龍之介は美歩のこと嫌いになつたりしないと思ひよ。」

「ふー、ちよつこいやないの。」

「ちよつこいや。」

「そり。あたしじやダメなのよ。要するに、ちよつこいや。紫苑とは関係なく、ね。」

あたしとは関係なく。

「もし紫苑がいなくても、龍之介くんはあたしを選ばないよ、ちよつ

「 」

「…………なの……？」

美歩……強いね。

「でも、今日のお昼は龍之介くんを借りるからね。」

美歩つてば。

「“借りる”って、べつにあたしの所有物じゃないよ。せつと、龍之介も文句言つよ。」

「え？ まあ、せつこうとしておきましたよ。」

「こや、せつこうひととのものだから。」

美歩が笑う。

その笑い方はやつぱり綺麗で華やか。

「ランチ？」

「わ。美乃里と二人で、お祝びにランチをおくるって約束したの、今朝。」

ああ、なるほど。

「美乃里ちゃん、ものすごいこと口酔いだよ。」

「え？ 本当？」

「通勤の間は我慢してたみたいだけど、机に座つたら頭痛がひどいみたいで頭抱えてた。それにペットボトルを2本持つて来てて。」

「だらしないなあ。これから鍛えてあげなくちゃ。」

「さのう、帰つてからまた飲んだりじこよ。」

美歩が呆れた顔をする。

「でも、さつと美歩に鍛えられたら酒豪になるかもね。」

二人で笑い合つて、楽しい気分で手を振る。

龍之介とあたしつて、本当にどういう関係なんだろう・・・？

あ、そうだ。

「美歩ー。」

追いかけて囁く。

「ねえ、昨日のこと、秋月さんにも話していい？」

「秋月さん？」

「今日、一緒にお昼を食べるの。仕事で疲れてるって言つから、楽しく話をあげようと思つて。」

「一人でランチ？ いいの？」

心配そうな顔。

「1対1でいいのかっここと、だよね？」

「だめ、なのかな？ 秋月さんはいつも『仮にしないで』って言つから。」

それに、お休みの日に一緒に出かけてるよ。

「もう・・・まあ、秋月さんがいつ言つないうここのかもね。でも、ゆうべの話をしたいわけ？」

「うん。面白いから。一応、許可をとらうかと思つて。」

「もう・・・いいよ、べつ。だって、原田さんだつてその場にいたんだもん。紫苑が話さなくとも、龍之介くんとか原田さんから聞いちゃう可能性があるでしょ？」

ああ、そつか。

「うん、ありがとう。じゃあね。」

秋月さん、きっとたくさん笑つてくれるね！

だけど・・・。

あたし、龍之介と自分のこと、もつともく考えなくちゃいけないのかな・・・。



### 35 クリスマスのハンバーグ焼くのは

お昼休みに急いで待ち合せ場所に行くと、ちょうど秋月さんもやつて來た。

「今日はなにがなんでも出ようと思つて頑張ったよ。ああ、やっぱり休憩中に外に出るのはこよねべ。」

やつ言いながら、気持ち良さをやつに伸びをする。

「同僚に訊いて、美味しいランチの店を予約したんだ。この先にあるホテルの2階。」

「もしかして、よく雑誌に載ってるお店？」

「そうかも知れない。ビーフシチューのランチが有名なんだって。予約でそれを頼んじゃつたけど、大丈夫？」

「うん。」

ちょっと高いお店かも。

まあ、クリスマスだし、いいか。

「何軒か教えてもらつたんだけど、その中ではここしか空いてなかつたんだよ。」

お店に入りながら秋月さんが言つ。

そうだろうな。

入り口の黒板には『限定ランチ 2・500円』。  
値段が高いから空いてたんだと思う。

店内はテーブル同士の間が広くとつてあって、他人の話し声が気にならない。

本物の木を使ったクリスマスツリーには赤と金を基調にした飾り。テーブルクロスも赤に白を重ねて、クリスマスらしい色使い。

「ランチだとお酒が飲めないのが残念だね。」

「お酒を飲むって言えばね、昨日、」

ふと、秋月さんが、あたしの肩越しに入り口の方に視線を移した。そして、につこり笑つて片手を少し上げて合図。

「誰か知ってる人があった?」

「あ、振り向かないで。」

「あ。  
面倒な人・・・かな?」

「僕の友人なんだけど・・・紫苑さんは知らない方がいいよ。」

「知り合いにならないほうがいい人?  
そんなに変なお友達もいるのか・・・。」

それにしちゃ、秋月さんは楽しそうに笑ってるなあ。

オルゴールバー ジヨンの楽しげなクリスマスのメロディが流れる店内で、情報どおり絶品のビーフシチューをいただく。  
なんて贅沢なランチ！

秋月さんの優しい笑顔ときりりとした明るい声の会話も和やかで心地いい。

昨夜の酔っ払い騒ぎも、秋月さんと話していると、微笑ましく感じる。

龍之介とじゅ、じつはいかないね。

・・・って、何故、龍之介と比べてる？

「やつだ。紫苑さんにプレゼント。」

食後のコーヒーを飲みながら、秋月さんがスーツのポケットから取り出した小さめの白い紙の袋。この袋だと、和菓子を想像しちゃうけど・・・ふわふわしてる？

「ありがと。開けていい？」

「もちろん、どうれ。」

ここにこじて嬉しそう。

留められていない袋の口を開けて覗いてみると。

3つも入ってる・・・。

「おけり？」

テーブルに並べてみると。

『身代り御守』、『厄除御守』、『交通安全御守』？

「紫苑ちゃん、もひすぐスキーだよね？ 怪我しないよ！」

うわ・・・。

なんてよく氣が付く人なんだから。

「ありがと。嬉しい。でも、3つも〜。

「やべ。仕事で外出したとき、お寺とか神社の前を通りと買いたくなっちゃって。」

ん？

ってことは、裏は・・・全部違う！

そんなにいつも氣にかけてくれて・・・？

「あの・・・、どうもありがと。」

「いいえ。スキー、楽しんでおいでね。」

「うさ。・・・あたしは何も用意していないんだけど。『めんなさい。』

」

「あ、いこんだよ。氣にしないで。それに、昨日、タルトをもらつたよ。」

「ちよつとだけだよ。」

」

「でも、作るの大変だったよね？　せつこつのは置いたものとは違うから。・・・そりそり戻るつか。」

12時50分。

お昼休みはあつと/or お昼休みはあつという間だ。

お店を出ると、秋月さんが会計で席札を出すと、店員さんが「あ  
りがとうございました。」と頭を下げた。

・・・それで終わり？

「お会計は・・・？」

「先に済ませたよ。」

いつの間に？

すぐここスマートだね。

秋月さんて、本当に何でも行き届いてる気がする。

でも。

「あの、秋月さん、あたしの分を・・・。」

お店を出ながら支払いを申し出ると、秋月さんはこつもの笑顔で答  
えた。

「今日は僕のおじつ。」

「いえ、でも、それじゃ申し訳なことよ。」

「うーん、高いんだし。

「うーん・・・、紫苑さん、気になる?」

返事の代わりに頷く。

「じゃあ、千円だけもいらおつかな。そのくらいなら、おじいちゃんてくれる?」

残り1,500円。

そのくらいなら・・・まあ、いいのかな?  
あんまり意固地になるのも失礼な気がするし・・・。

「はい。では千円。」と駆走をまどした。

頭を下げながら千円札を差し出す。

「何やつてんだよ。」

わっ?! なに?!

振り向いたら・・・龍之介?

その後ろから美歩と美乃里ちゃんが急ぎ足でやってきて、両側から腕を掴まれた。

「ほら紫苑、お化粧直さないとね。早く行こう。秋月さん、失礼します。龍之介くん、お先に。」

「あ、うん。秋月さん、」と駆走をまどした。

「うふ、またねー。」

「いやかに手を振る秋月さんとふて腐れた顔をした龍之介を残して、美歩と美乃里ちゃんに引きずられるように職場への道を走了った。

「あんなどこねで」「アミスしちゃうなんて、ホントに焦つた。」

洗面所の鏡の前で口紅を塗りながら、美歩がしみじみと呟く。

「お詫びだからと思つてちょっと高いお店にしたら、そこは紫苑たちがいるんだもの。」

「本当ですよ~。お店に入ったときに高木さんがお一人に気付いて、足が止まっちゃって。」

さつきのレストランに、一人も龍之介を連れて行つたのだった。今日になつてから予約ができるようなお店は限られているから。

「全然気付かなかつた。」

あたしが言つと、美歩が呆れた顔でうなずいた。

「それは、お店を出たあの紫苑の様子を見て分かつた。でも、秋月さんは気付いてたんだよ。あたしたちがお店に入ったとき、龍之介くんに手を振つたんだから。」

あのときかー！

振り向いていれば……。  
いや。

振り向かなくてよかつたのかも。

「秋月さんが“見ないほうがいい”、みたいに言つから、てつきり顔を覚えられたりしたら困るような人なのかなと思った……。」「

実際に上手い言い回しをしたよね。

ものすゞーく秋月さんらしい感じがするけど。

まるで、龍之介に“あかんべえ”をしていくような、子供もつぽい感じ。

相変わらずそんなふうに、龍之介に対抗意識を燃やしてゐんだから。

「“顔を覚えられたら困る人”って、紫苑さん、素直に信じたんですね。」

美乃里ちゃんが感心してる。

「だつて……。」

「秋月さんは、紫苑のそういう素直なところがいいのかもねー。」

「美歩ー。」

。 そんな風に言わると……本当にそつなかも知れないけど……。

あ。

秋月さんのことこじらに普通に考えられるなんて、ずいぶん慣れ  
てきたんだなあ。

「高木さんはもう、ずーっと落ち着かなくて。」

「そうなの。うつかり紫苑たちが見える方に龍之介くんを座らせてしまってね。」

「わたしたちとお話ししても、紫苑さんの方ばっかり気にしてて。」

「そう。それでしかめつ面しちゃって。ねえ？　あたしたち、気が気じゃなかつたわよ。」

美歩と美乃里ちゃんが顔を見合させて額き合つ。

「その話、誇張していない？　でなければ、二人の勝手な解釈が混じつてるとか。」

絶対にそうだ。

「そんなことあつませんよ！　ねえ、美歩さん？」

「そうよ、紫苑。ウソじゃないもん。」

・・・まあ、たしかに最近、ちょっと優しいかも・・・ん？  
でも、あくまでも“ちょっと”だよ！

「あーあ。いいですねえ、紫苑さん。一人の男性に想われて。」

「まだ、そう決まつたわけじゃ・・・。」

「いや、一人はかなり確実な感じではあるけど……。  
あ。

ほんとうに、秋月さんのことには慣れてきたんだなあ……。

「あ、もう時間ですよ。」

腕時計を見た美乃里ちゃんのひと言で、大急ぎでトマレから出る。

そういえば、あれから龍之介と秋月さんはどんな会話をしたんだろう?  
う?

・・・知らない方がいいか。

### 36 クリスマスに出かけよう

隣の課に龍之介が来ている。

仕事中は普通にしているけれど、体が大きいから目立つ。声も大きい。

お昼休みのこと あたしと秋月さんのことよりも、美歩たちから聞いた龍之介の態度 を、自分でどう片付けたらいいのか迷っているあたしとしては、龍之介とは顔を合わせにくい。年末で仕事が忙しいってこともあるし、気付かないふりをしていう・・・と思ったのに、龍之介がこっちに来る。どうか、あたしに用事じやありませんよついでに

「紫苑。ちょっと。」

ああ・・・。

「なに?..」

座つたままくると椅子を回して、龍之介を見上げる。  
ここにだつたら、龍之介だつて言いがかりをつけたりできないはず。

「ちょっと、いい?」

そう言つて、廊下の方を視線で示されてしまった。

今までこんなことなかつたのに。

美乃里ちゃんが気を遣つてている様子が感じられて、このままでは無

理か、とあきらめた。

龍之介のあとひいて行きながら、何を言われるのかびべびくしてしまつ。まるで、先生に呼び出された中学生みたい？  
・・・けど、あたし、何も悪いことしてないよね？

「紫苑、今日、飲みに行こ。」

「は？」

お昼のことと何か言われるのではないかと警戒していたから、違うことを言われて、一瞬まじついた。

「今日の夜、予定あるか？」

「明日は定時に帰りたいから、今日のしつけ少し残って仕事しようかと・・・。」

「じゃあ、そのあと。俺も残業するから、終わったら連絡しぃ。」

「・・・なんで急に？」

あたしの問いに、龍之介が視線を逸らす。

「・・・ちょっと。飲みたい気分だから。」

・・・普通だ。

当たり前の答え。

なーんだ。

心配して揃しちゃった。

そうだよね。

龍之介は、昨日みたいな日に出かけられなかつたんだもんね。

「いいよ。行こう。」

あたしの返事に龍之介はほつとした顔。

「その様子だと、何か嫌なことでもあつたんでしょう？」仕事で失敗した？

「一ヤニヤしながら言いつと、龍之介も一ヤツと笑つた。

「わかるか？」

「わかるよ。」

もつ3年近くの付き合いなんだから。

「たぶん7時過ぎには出られると思う。」

「わかった。じゃあな。」

龍之介が階段を駆け上がつて行く。

いつも仲がいい真鍋さんにも言えないこともあるんだね。

二人で飲みに行くのは初めてだけど、あたしと龍之介は友達だもん。

今までそういうことがなかつたことの方が不思議なんじゃない？

席に戻ると美乃里ちゃんが心配そうにしていて、一応、「龍之介と飲みに行くの。」と話しておいた。

それを聞いても、美乃里ちゃんは相変わらず心配そう。もしかしたら、あたしが龍之介からワソチのことで何か言われるんじゃないかと思つてゐるかも。

龍之介は、そんなこと全然覚えてないみたいだつたのにね。

7時過ぎ。

そろそろ終わるとメールをしたら、龍之介からあたしのいる階のエレベーター前で待つという返事。少し急いで仕度をして、廊下の角を曲がると、エレベーターの前にもう龍之介がいた。  
朝と同じ黒づくめの服装で、エレベーターの横にある大きな窓から暗い景色をながめて。

一瞬前までは元気に動いていた足が、その後ろ姿が目にに入ったために止まる。

言おうとした「お待たせ。」といつ言葉が、口の中で行き場を失つて、ほん、と消えてしまった。

なんか、恥ずかしいな。

うそ?  
・・・あれ?

あたしが?  
龍之介に?

龍之介が振り向く。

リラックスしたいつもの笑顔で。

どうじよひへ。

緊張して来ちゃった。

なんだかドキドキする・・・。

龍之介の後ろの窓ガラスには、暗い外の景色の中に、キャメル色のコートを着たあたしが映ってる。

その距離では、自分がどんな表情をしているかはよくわからない。

「お疲れ。行くか。」

かけられた言葉にこくんと頷く。

どうか、声が出ないことに気付かれませんよ!「へーどうか、顔が赤くなつていませんよ!」

自信のないちよこまか歩きで龍之介の隣に並んだけれど、どうにも恥ずかしくて顔を上げることができない。

どうして?

相手は龍之介だよ?!

今までにも帰りに一緒になったことは何度もあったよ。ショッキング、帰りに送つてもうつてゐるよ。

でも。

こんなふうに待ち合わせてつて……初めてなんだもん。なんだか、いつもと違つよ……。

困つたよ。

ドス。

うわー！

「照れてんじゃねえよ。」

肘で押されて、ちょっとよろける。

驚いて龍之介を見たら、一ヤツと笑つた龍之介と目が合つた。……と、思つたら逸らされた。

・・・もしかし、龍之介もちょっと照れてる・

なんだか、ちょっとだけ安心した。

「ローン」と音がして、エレベーターが到着。扉が開くと、先客が3人。上方の階に入っている会社の社員さんだろうか。

乗つたら、今度は隣に立つた龍之介と肩が触れているのが気になつ

てしまつ。

けど、離れたら、 “龍之介のこと”を意識しています” って言つてゐるみたいだよね？ それともやつぱり近過ぎる？ 離れたほうがいい？ いや、やつぱり……。

そんなことを考へてゐる間に、エレベーターはたちまち一階に。

「ふう・・・・」

気付かれないように深呼吸。

たつたこれだけで緊張してしまつなんて、 いつたい今日のあたしはどうひじわつたんだね？

通用口の守衛さんにあこがれながら外に出たら、 冷たい空気が気持ち良かつた。

頭が冷える。 落ち着く。

隣を歩く龍之介を見上げてみる。  
就職してからずっと仲良しだった龍之介。  
安心して一緒にいられるお友達。

・・・やつ。

誰が何を言つても、 龍之介はあたしの大変な友達だ。  
ずっと、 ゆーっと・・・。

「なんだよ？」

視線に気付いた？  
もしかして、 また照れてる？

「龍之介といふと安心だなあ、と思つて。」

「安心？」

「うん。龍之介と一緒にいれば……きのうみみたいに変な人に絡まれたりすることなんか絶対にないもんね。」

ちょっとだけ、話をすり替えて。

だって……本当のことを持つのは照れくさい。

「俺は魔除けか。」

「うん、そう。怖い顔が役に立つてくれて、本当に有難いよ。」

「ふん。どうせ優斗みたいな顔じゃないよ。」

秋月さん？

龍之介ったら、秋月さんの外見に対してもコンプレックスでも持つてゐるわけ？  
知らなかつた！

「龍之介、秋月さんのこと、気になるんだ？」

可笑しい。

龍之介と秋月さんは、まったく違うのに。

「ふん。」

拗ねた顔をして前を向いている龍之介。  
あらら・・・。

「ねえ？」

横から顔を覗くよつと見上げて。

「龍之介は秋月さんとは違うの。」龍之介はかっこいって、あたし、言わなかつたっけ？

なだめるよつと、龍之介がひらうとあたしを見た。  
でも、すぐに向ひを向いてしまつ。

・・・もひ。

自分で秋月さんの話題を出しておいて、自分で拗ねちゃうなんて。  
困つたもんだ！

駅の入り口で、テーブルを並べてケーキやアクセサリーを売つてい  
る人たちがいる。

その前を通りながら、最後のテーブルの一つが田に留まつた。

「ねえ、ちょっと待つて。」

どんどん歩いて行きそつになつてゐる龍之介の腕に手をかけて引き  
留める。

「なんだよ？」

テーブルに並んだ革製の動物たち。

その中の一つが龍之介にそつくりだ。

「これ。」

うす茶色で、背中と尻尾と鼻の先がこげ茶色のショパンード。

店番のお姉さんにことわって手にとつてながめてみる。

立体的に作つてあって、きりりとした凜々しい立ち姿がかっこいい。  
赤い首輪から鎖でキー ホルダーの金属の輪につながっている。

「・・・欲しいのか?」

あ。

あたしがおねだりしてるとと思つた?

そうじやない。

逆だよ。

「違う。あたしが買うの。」

くすくす笑いながらお姉さんにお金を払い、値札をはずしてもらつ。可愛らしい紙袋に入れてもらつたキー ホルダーを受け取つて、改札口に向かつて歩き出す。

龍之介、まだ拗ねてるのかな?

そうつと横からのぞいて見ても、無表情でよくわからない。  
でも、“無表情”つてこと自体が、機嫌が悪い証拠じゃないだ  
るつか?

「つゆーつーの一す一け?」

改札口を抜けたところで立ち塞がるよつと立て、ちょっとふざかって呼んでみる。

「・・・なに？」

「これ。クリスマスプレゼント。」

さつきの紙袋を差し出すと、龍之介が困ったよつた顔をしてあたしを見た。

でも、ちょっと嬉しそう？

いきなり嬉しい顔をするのが恥ずかしいから、困った顔をしてみせているだけだね、きっと。

「いやらない？」

「・・・こる。」

そう言つて、紙袋を受け取つた。

「それね、龍之介にさつき！」

「・・・犬？」

キー・ホルダーをぶらぶらさせて左右から覗き込むよつとに見たあと、疑り深い目をあたしに向ける。

何か面白いことを言つた方がいいのかな？ ・・・つづく、違うね。今日はクリスマスだもの。

「龍之介ってシェパードのイメージがあるよ。強くて、きつとし

てて、でも優しい感じ。」

褒め言葉の大盤振る舞いだよ。  
これで機嫌を直してくれる?

「・・・ふん。」

また横を向いたやうの?..

「・・・サンキュー。」

まつたく。  
世話が焼けるよね?..

### 37 クリスマスの夜に行く店は

「ちょっと汚い店でもいいか？」

そう言つて龍之介が連れて行つてくれたのは、乗り換えて使う駅から7、8分歩いた裏通りにある小さな小料理屋・・・って言つんだろうか？

入り口の看板には『月うさぎ』。かわいらしげな名前。

「大学時代にバイトしてた店なんだ。」

へえ。

こういうお店でバイトか。  
ちょっと似合つてゐかも。

のれんをぐぐつて引き戸を開けると、左側のカウンターに沿つて席が8つほど、通路を挟んで右側の座敷に4つのテーブルが縦に並んでいる。

席は半分くらい埋まつていて、お客さんは30~50代くらいのサラリーマン風な人ばかり。女性は2人?

「いらっしゃい！ あれ？ 龍之介？」

「信一さん、こんちは。」

カウンターの中には藍染めの服と帽子の板前さんらしき若い男の人。龍之介の口調だと何才か年上みたいだけど、こんなに若くてお店を切り盛りしてるなんて、すごいな。

「あひ、龍ちやん… いらっしゃい。」

奥からお盆に料理を運んで出て来たのは、朱色の和服に紺の襷をかけた、ふつくりした優しげな女性。  
お母さんくらいの年代かな?  
じかんも龍之介と仲良しかり。

「千代子さん、こんばんは。」

「クリスマスなのに、いつの店なんか…あひ、お嬢さん連れなの?」

あ!  
あたしもあこせつくなへやー!

「え・・・と、こんばんは。」

慌てて頭を下げる。

隣で龍之介があたしのことを説明しようと口を開けてこぬを聞きながら。

「あ、ええと、同じ会社の…・・谷村、さん。」

やだな。

龍之介に “谷村さん” なんて言われたの、何年振り?  
ものすごく変な感じ!  
また恥ずかしくなつたやつ。

「こひしやー。龍ちやん、こつものとおり、カウンターでここの

?

千代子さん（と呼ぶように）本人に言われた。）の言葉につなぎいて、リラックスした様子でコートを脱ぎ始める龍之介。本当に常連さんなんだ・・・。

「紫苑、コート。」

声をかけられてあわてて脱いだコートとマフラーを、龍之介がさつさと持つて行つてハンガーに掛けてくれた。

お店は初めてでどうしたらしいのかを尋ねて

カウンター席のまん中あたりに並んで座ると、千代子さんかおしほりと一緒にビールとグラスを出してくれて、

「今日はクリスマスだから、1本サービスなの。」

と微笑む。

「みなさん、こんなお店じゃなくて、もつとあれいで豪勢なところに行かれるでしょう？ そんなときこそ、わざわざいひに足を運んでいただいたお礼なの。ほほほ。」

ついでいうのは、きっと  
といひこいつのことを言つんだらうな。

お店はたしかに古い感じだけど、きちんと整った雰囲気が気持ちいい。

千代子さんも板前の信一さんも、親しみやすい人たちで。

「千代子さん。俺たち会社から直接来たんです。腹減つてゐるから、早くできるものがいいんですけど。」

龍之介が千代子さんと相談しながら料理と“いつもの”冷酒を注文し、お酒に詳しくないあたしは、よくわからないときに頼むことにしている梅酒をお願いする。

「クリスマスなのに残業か？忙しいんだな。」

カウンターの中でテキパキと手を動かしながら、信一さんが龍之介に話しかける。

龍之介がビールを2つのグラスに注ぎながらそれに答えて。

「今年は仕事納めが早いから。」

乾杯。

いただきます。

「やうか。それでデートなのにこんな店しかないってわけだな。」

「デート？！」

あやうく吹き出しそうになつたビールを思いつきり飲み込んだ。

・・・う。胸が痛い・・・。

比喩じやなく、リアルに。

塊が食道を通り抜けて行く・・・。

「し・・・、信一さん、違います。ここは、」

「まあまあ、いいから。龍之介が女性を連れてくるなんて、初めてだもんなん。」

「いや、べつに、その、」

「ひ・ひ・・苦しい。

早く通り抜けて・・・。

「あら、龍ちゃん。連れの女性に興味がないなんて言ひのは失礼よ。ねえ?」

お酒とつみれ汁をお盆に載せて来た千代子さんが、あたしに向かってこいつする。

「はあ・・・。」

苦しかった・・・。

よつやく痛みが治まって、ため息とも返事とも言えるよつな声でつなづく。

龍之介の様子をうかがうと、困った顔。

今日はこんな顔ばかりしてゐるね。せつかく一緒に来たのに。ショウガがないな。

「失礼だつて、龍之介。今日はあたしのこと、たくさん褒めなさいよ。」

あたしの言葉に、龍之介が目を見開く。

「どうして驚くの?」

だつて、あたしたちつて、いつもお互に遠慮なく言ひ合ってきた  
じゃない？

そりやあ、最近はちよつとだけ、いつもと違つことがあるけど。

「お。はきはきしたお嬢さんだねえ。」

信一さんが笑つ。

「“はきはきした”なんて、信一さん、こいつの場合、気が強い  
だけなんですから。」「

「ほら、それが失礼なの。」

あたしの指摘に千代子さんと信一さんが楽しそうに笑い、龍之介は  
複雑な顔をした。

龍之介。

そんな顔しないで、楽しく過ごんやつよ。

今日はクリスマスなんだから。

お料理はどれも美味しい。  
イワシのダシと生姜が効いたつみれ汁。  
すり身から全部自家製という、揚げたてのさつま揚げ。  
焼きたてでふわふわの厚焼き卵。  
ぶりの照り焼き。野菜の串揚げ。海老だらの葛餡がけ。生姜の混  
ぜご飯。

一品出でぐるたびに、美味しさに感嘆の声を上げてしまつ。

信一さんは千代子さんが、それを聞いてにこにこする。  
千代子さんは信一さんはお母さんなのだそうだ。

「俺がバイトしていたころは親父さんが仕切って、信一さんはよ  
その店に修行に出てたんだよ。」

龍之介が教えてくれた。

「2年前に親父さんが急に亡くなって、信一さんがあとを継いだん  
だ。」

「まだ未熟者だけどね。」

信一さんは恥ずかしそうに笑った。

「ねえ。龍之介もああいつ格好でカウンターにいたの？」

見た感じ、似合いそうだけど。

「まあか！ それは親父さんだけだよ。俺は向いの端で皿洗つた  
りテーブル片付けたりしてただけ。」

そりやそうか。

食べ物に合わせてお酒もすすむ。

梅酒を2杯飲んだあと、リストに並んだ名前が楽しくて、いつもは  
飲まない焼酎の飲み比べのセットを頼んでみた。  
面白かったので2セット目を頼もうとしたら、

「平氣か？」

と心配そうに龍之介が訊く。

「大丈夫だよ、さつきのも美味しかったし。苦手な味だったら、龍之介に飲んでもいいから。」

と答えると、

「飲み過ぎじゃないかって訊いてるんだよ。」

と呆れた顔をする。

「大丈夫。」

「どうしてそんなこと言うのかな?  
お酒を飲むってこんなに楽しいよ。」

それなのに、龍之介は疑わしそうな顔。

もう一

「だって、龍之介が送ってくれるもん。」

「龍ちゃんが送ってくれるなら安心ねえ。」

カウンターから千代子さんが会の手を入れてくれる。

「そうなんです。龍之介がいれば、いつも安全に。」

「俺はセキュリティ・サービスか?」

「うーん・・・セキュリティつて言つより、番犬？　あ、ねえ、さつきの見せて。」

「え？」

「せ、せ、わきあげたやつ。」

龍之介がバッグから小さな紙袋を出す。

革製のショパードは、やっぱり龍之介にそっくり！

「千代子さん、これ、龍之介にそっくりだと思いませんか？」

「あ、ほんとね。ふふ。」

「せ、せ、龍之介にあげたんですけど、返しても、もうつかないかなあ・・・。」

「どうして？　プレゼントじゃなーの？」

「番犬として持つてこようかと思つて。」

「紫苑。」

「なに？」

「それは俺がもうつけておく。」

「どうして？」

「首輪に鎖がつっこじるやの犬を紫苑に持たれてるのは、何となくイヤだ。」

「ふ。  
くくく。

カウンターの中で千代子さんと信一さんが笑いを噛み殺していく。

「えー。すこしく効果がありそつなのにて。龍之介のケチ。」

「紫苑には俺がちゃんとつっこじるからこいんだよ。」

うーん。

「わかった。よろしくお願ひしますよ、高木セキュリティ・サービスさん。」

「了解。」

「ほんとに仲良じやんねえ。」

千代子さんがここにいると、龍之介とあたしはお酒を渡してくれる。

「そうなんです！ 龍之介とあたしは仲良しなんですよ かんぱーい。」

カウンターの中で笑っている千代子さんと信一さんと、せつま揚げをもう一皿注文したら、龍之介がため息をついた。

「龍之介。もしかして、お金の心配してるの？」

「はあ？」

「あたしが飲んだり食べたりし過ぎだつて思つてるんでしょ、う？」

「違うよ。」

「いや、その顔は心配してん顔だ。」

「・・・紫苑。やっぱり飲み過ぎだ。」

「ほら、やっぱりお金の心配してん。大丈夫だよ、あたし、ちゃん  
とお金持つて来たもん。」

「俺の話、通じてないな。」

「そんなことないもーん。」

「あれ？ 龍ちゃん？」

やつて来た顔の赤いおじさまたち3人は、ざつやらつ軒田の人たち  
らしい。

「あ、沼田さん。お久しぶりです。」

「おー。なんだ、龍ちゃんか。」

「」んちば。」

3人とも龍之介の知り合い？

昔の話をしていることは、龍之介のバイト時代からのお姉さんつてことだよね？

うーん、無視して食べたり飲んだりしているのも悪いかなあ。

「あれえ、こちらはの人は？」

「龍ちゃんの彼女？」

「ああ！ クリスマスだもんなん。」

あーらり。

やつぱつわうなつちやうふんだねえ。

「いや、あの、」

龍之介つてば。

酔っ払いのおじさまたちに、真面目に説明しようとしても無駄だよ。それとも、そんなに嫌なの？

・・・それは許せない気がする。

「こんばんはー。初めまして。」

こいやかこじあことつ。

酔っ払いのおじさまたちには、こいつの感じが一番受けがいい。

「・・・紫苑？」

龍之介がうるたえる。

「へーーーん、頭を下げたら、ちょっとびっくりする。

隣で龍之介があたしを支えようと身構えた。

もしかしたら、あたしもちょっと酔っ払いかな？

「いやあ、可愛いねえ。」

「お邪魔したりや悪いから、おじさんたちはあつに行くな。」

「バイバイ、龍ちゃん。」

おじさんたちに応えて手を振ってカウンターに向き直ると、龍之介がまた困ったような顔であたしを見ている。  
まったくもつ。

「どうしてそんな顔してるの？　あたしが彼女って言われるのがそんなにイヤなわけ？」

脅す調子で小声で言いつと、龍之介がまばたきをして動き出した。

「い、いや、そんなこと……ないナゾ。」

「さう？　どうせ説明しても信じてくれないよ。千代子さんたちだつてそうだよ。面倒だから、誤解されたままでもいいじゃない？」

「・・・紫苑がかまわないなら。」

素直だね。

あたし、よっぽど怖い顔してた？

素直な龍之介なんて、めったに見られないよね！

おもしろいー。

「いいよ。今日だけ龍之介の彼女になつてあげる~」

「・・・せっかくだから。」

ほり、龍之介。

笑つてないで、飲もうよ。

### 38 クリスマスの「遊び

「ああ、美味しかった！」「うれしかったです。」

お店の前で千代子さんがお礼を言つと、千代子さんは例の綺麗な声で笑つた。

「ほほほ。またいらしてね。」

「はい。またわづめ揚げを食べにきます。」

「ええ。紫苑ちゃんには特別にサービスしますからね。」

「はー。」

答えながら足がふりつく。

うーん・・・。やっぱり飲み過ぎなの？

龍之介につかまつてしまつてもやられちゃうんだナビ？

「龍ちゃん。ちやんとお送りするのよ。オオカミになっちゃダメよ。」

「

千代子さんが龍之介と話している。

・・・オオカミ。

「龍之介。犬よりオオカミの方が強そつだよ。そっちの方がいいん

じゃない？」

「あーあー。言葉が古かったかしら？ 茜にお嬢さんは通じないみたいね。ほほほほ。」

千代子さんが笑い、龍之介は今日はもう何度田かといつ呆れた顔をした。

・・・どうして？

でも、千代子さんが笑ってるのには、面白いんだよね？  
じゃあ、いいや！

電車の中で吊り革につかまつてもゆらゆらが止まらない。

そうか。

吊り革がゆらゆらしてるからだ。

しっかり動かないもの・・・隣にいるじゃない、龍之介が。

片手は吊り革につかまつたまま、バッグを肩にかけて、龍之介の左腕に後ろから手を通してつかまつてみる。

「どうした？」

頭の上から龍之介の声。

「吊り革がゆらゆらするから。」

・・・うん、動かない。

これなら大丈夫。

“安全で安心”。

何かのキャッチフレーズみたい。

「ふふふ。」

楽しくなつて前を向いたら、窓に腕を組んだあたしと龍之介の姿が映つてる。

あーあ。

これじゃあ、恋人同士つて思われても仕方ないね。

そうだ。

あたし、今日は龍之介の彼女なんだっけ。  
じゃあ、これでいいんだ！

ちょっととすり寄つてみると、龍之介がこっちを向いた。

「紫苑。」

また困つた顔？

背伸びをして龍之介にささやく。

「今日は彼女だもん。いいんだよ、これで。」

ふふふ、と笑う横で、龍之介が小さくため息をついてくる。

もつ。

そんな態度、失礼だ！

駅からの道はいつもと同じ。

人も車も通らない道は、ふらふら歩いても危なくない。

龍之介から離れてくるつと一回り。

楽しい

龍之介は片手をポケットに突っ込んで、ゆっくつと歩いている。黒づくめの服装は、夜の景色の中でもそこだけくつわつと浮かび上がる。

「真っ黒な、龍之介。」

口に出したら可笑しくなつて、自分で吹き出してしまう。

「なんだよ？」

「なんでもない。」

龍之介には教えないよーだ。

右側の小さな公園。

道に沿つて低いブロックで囲まれた花壇がある。周りには・・・誰もいないね。

「よこしょっと。」

花壇の端のブロックに乗る。

ずっと前からやりたかった。このブロックの上を、向こうまで歩くの。

「紫苑？」

龍之介が気付いてそばまで来た。  
心配？ 呆れてる？

「大丈夫。」

笑顔で答えて歩き出す。・・・けど、2歩めでぐらり。

「わ。」

サッと差し出された龍之介の右手につかまって、また一步。そのま  
ま最後まで。

「やつた！」

飛び降りようとしたら龍之介がもう片方の手も差し出してくれた。  
そっちにもつかまって、ふわりと着地・・・あれ？ 視界が真っ暗。  
何も見えない。

顔に当たつてるのは・・・ボタン？ もしかしたら龍之介のコート？

なんで、こんなに近くに？

おかしいな？

手につかまつていたはずなのに？

あたしの手はからっぽで、龍之介の手は・・・あたしの背中・・・？

・・・んん？

なんか、これって、もしかして?  
あらり・・・、じりょり?

イヤつていうわけじゃない・・・けど。  
むしろ、あつたかくてほつとするし。

そうだよね。

龍之介はセキュリティ・サービスだもん。  
あたしを守るのが役目なんだから、ほつとした当たり前だ。  
でも・・・。

「龍之介？」

そつと呼んでみる。

「「めん、紫苑・・・。俺も飲み過ぎた。ちょっとつかまらせで。」

そうか。

飲み過ぎか。

つかまってるだけか。

でも、ハスキーな声がいつもよりかすれで・・・ちょっとセクシー  
かも。

・・・うわ。まずい。

そんなこと考えたら、ドキドキして来ちゃった。  
ど、どうじょう?

龍之介に伝わっちゃうかな?

そりやあ、今日は・・・今日は龍之介の彼女、なんだけど、だつて

それは・・・、それは・・・。

「あの、」

「紫苑。」

見上げたら、目が合つた。

こんなに近い。

龍之介の腕の中で、龍之介をみつめてる。  
まるでほんとうの恋人同士みたいに？

龍之介・・・?

「紫苑。もし俺が・・・」

もし龍之介が・・・なに？

「もし・・・なんだ？ 足元が・・・？」

足元？

そういうえば、なんだか柔らかく押されてるような・・・。

「ねこ！――」

ねこ・・・猫？

「んにゃあ。」

あ、猫だ。

白い猫。

片耳と尻尾の先が黒い。

あたしのブーツにすり寄りながら、ぐるぐると足元をまわってる。

あれ？

龍之介？

「紫苑つ！ 猫つ！ 僕、猫はダメつ！ 特に夜はつ！」

5メートルくらい離れて、龍之介が小声で叫んでいた。

あらら。

可愛いのこ。

「ほら、怖いって。しつしつ。」

追い払うと、猫は公園の植え込みの中へと振り返りながらもぐつていき、龍之介がそろりそろりと戻つて来た。

「早く離れよう。」

龍之介がチラチラと猫の行方を確認しながら言つ。

「はいはい。」

ガサ。

肩にかけていたバッグが揺れて、コートのポケットで音がした。

あれ?  
なんだっけ?

ポケットから出したのは・・・白い紙袋。

「あ。これ。」

「なんだ?」

龍之介が覗き込む。

「お昼に秋月さんからもひつたの。」

「優斗から?」

眉間にしわを寄せて警戒した顔。

「うん。御守り。スキーで怪我しないようになって。ほら、身代わり  
と、厄除けと、交通安全。」

お昼休みに急いでて、机に突っ込んだんだっけ。

「厄除け・・・。」

「全部違う場所で買つてきてくれたんだよ。いい人だよねー。」

「マタタビが入ってるんじゃないだろうな?」

「え? マタタビ?」

「いや。 . . 効果が高そうだって言つたんだ。」

「そうかな . . . 。ああ！ 龍之介、たいへん！」

「何が？」

「スキーの荷物、これから詰めなくちゃ！」

ため息をつく龍之介。

「やつぱり優斗が呪いを . . . そつか。じゃあ、さつとど帰ひつ。」

さつきのはお酒のせい。  
ゆづべのあたしも同じ。

一気に酔いがさめた気分で龍之介と並んで歩く。  
街灯の下を過ぎるたび、だんだん短くなつた一人の影が向きを変え  
て伸び始めて . . . を繰り返す。

・・・ そうだ。

「龍之介。」

「なんだ？」

「今日、分かったことがあるの。」

「なに?」

「あのね、あたし最近、友達から『龍之介とは本当にただの友達なの?』って言われてたの。」

「・・・うん。」

「でね、いやって送つてももらつたりしたらいけないんじゃないかなって思つたりしたの。」

「紫苑。それは俺の考えでやつてることで、紫苑が

「うん、分かつてゐる。」

「なら、そんなこと気にするな。」

「うん、ありがと。あたしも分かつたの。」

分かつて、決めたの。

「ほかの人の言葉で、龍之介とあたしの関係が変わつたりするのは変だつて。ほかの人が何て言つたって、龍之介とあたしの関係は、龍之介とあたしが決めるんだって。ね、そうでしょう?」

龍之介が笑う。

「そりだ。俺と紫苑の問題だ。」

よかつた。

あたしも笑顔、だよね?

「これからもよろしくね。」

「 もちろん。」

龍之介が手を伸ばして・・・あたしの髪をぐしゃぐしゃにした。いつもなら文句を言いつといるだけだ、今日は笑つて許してあげた。

マンションの前で別れるとき、ポケットの御守りの入った袋がガサガサと音を立て、秋月さんを思い出した。

「ねえ、龍之介。秋月さんて、大学のときはどんな人だった？」

「優斗？」

龍之介が不満そうな顔をする。

「なんで、今？」

「え？ 思い出したから。」

ダメなの？

「・・・・優斗は、何でも思つたことを黙つていられないヤツだった。」

「何でも思つたこと・・・。」

独り言とかもそれなんだね。  
じゃあ、あれも・・・?

「紫苑。」

「あ、はー。」

「優斗が口に出すのは、ほんとうに細かいことだな。あこひせ  
ウソを言えるような性格じやない。」

龍之介。

そんなに真剣に囁ひのへ。

「うん。わかった。」

ふざけてるわけじやないんだね。

あの優しさも、言葉も、全部本物なんだね。

でも・・・。

今は決められない。

自分の気持ちがよくわからない。

だから、もうしばらく待つてください。

「あー、荷物詰めなくちゃー。」

「お、そうだな。早く行け。」

「うん、ありがと。また明日ね。おやすみなさい。」

手を振つて、玄関のガラス扉へ。

2つのドアを抜けてエレベーターの前で振り返る。

バイバイ、気を付けてね。

今日は・・・楽しかった。  
ありがとう、龍之介。  
また行こうね。

「12月26日、金曜日。

今年の仕事は今日で終わり。

年明けも、例年は4日から仕事だけど、今回は1月4日が日曜日で当たっているから、年末年始で9連休。こんなに長い休暇はめったにない。すごく嬉しい！

秋月さんに会いつのめ、じょりくはお休み。  
だから、

「紫苑さん、明日からの準備で忙しいのは分かってるけど、今日、夕飯食べに行こいつよ！」

と、頼まれるように言われたら、断れなかつた。

「年末年始の予定は？」

秋月さんがサラダをフォークでつつきながら尋ねる。  
早く帰らなくちゃいけないあたしのために、秋月さんは駅前のバス  
タ屋を選んでくれた。

「ええと、明日から29日まではスキーでしょ。次の日から実家に帰つてお正月の支度の手伝い。年明けは2日か3日に戻つて来ようと思つてるの。」

「忙しいね。じゃあ、いっただけに床つたら初詣に行こうよ。」

「初詣か。そうだね。」

「そうそう。年末は龍之介と出かけるんだから、お正月は僕が優先。

」

秋月さんたら、また龍之介と張り合つもつだ。ナゾ、楽しそう。

「秋月さん。」

「なに?」

いつものカワイイ笑顔。

こつやつて、秋月さんは自分の気持ちを真つ直ぐに伝えてくれる。あたしはそれを見ないよにしていたけれど、もう、そんなことはやめようと思つ。

「あたし、まだ自分の気持ちがよく分からなくて、何も決められない。秋月さんの気持ちに応えることができるかどうか分からない。それでもいいの・・・かな?」

秋月さんの笑顔がもつと・・・静かでいたわるような微笑みに変わる。

「紫苑さん。正直に言つてくれてありがとう。僕はそれでいいよ。」

「何も約束はできなくても?」

「うん。構わない。今は紫苑さんが僕のことを友達だつて思つて、

一緒に出かけるのもいいなって思ってくれるだけでも十分。だつて、まだ会つてからか用ちょっととだよ。うーん・・・そり考えると、僕の方が変?」

「え? いえ、そんなことないけど。」

「あはは。前から言つてるよね、『気にしないで』って。僕はこういう性格だから、たまにそれをプレッシャーに感じる人もいるつて分かつてる。でも、紫苑さんは、」

「あたしだつてびつくりしたよ。でも、秋月さんはいい人だから。」

秋月さんがまたにっこりした。

「せうやつひ、僕全部を見ようとしてくれる。そして、僕に対して自分の正直な気持ちを伝えてくれた。・・・内緒だけど、」

秋月さんがすっと身を乗り出したので、つられてあたしも顔を寄せる。

「ますます紫苑さんのことが好きになっちゃつたよ。」

秋月さん?!

どこが、誰に内緒なの?!

驚いて何も言えないあたしを見て、秋月さんが笑つてゐる。

「あはははー。紫苑さんのせうこいつは、ほんとうに可愛いやつよねえ。」

もう・・・やだ！恥ずかしい！  
絶対、顔が赤くなってる！

「あ、でも、一つだけ約束して。」

「な・・・何を？」

真面目な顔。

やつぱり何か？

ちょっと怖い。

そんなに都合よくはいかないかないよね・・・。

「お正月は僕と初詣に行くって。」

は？

初詣？

「そんなこと？ もうー、何を言われるのかと黙つて緊張しちゃつたよ！」

「あはははー、OK？」

「もちろん。それはOKです。」

「約束だよ。龍之介より先に、僕と会つて。」

「え？ やつこいつ意味なの？」

「やつだよ。」

「うん・・・わかった。」

もしかしたら秋月さんって、あたしのことよりも、龍之介と張り合うことが楽しいんじゃないだろうか・・・?

「あ、そうだ、もう一つ。」

「なあに?」

「僕のことを重荷に感じたら、遠慮なくことわってほしい。紫苑さんが僕のせいでつらかたりするのは悲しいから。」

「秋月さん・・・。」

「やだ。涙が・・・。」

秋月さんの優しい笑顔が、涙で揺れている。  
こぼれないように、元気で慌ててまばたきを繰り返す。

「うん・・・、わかった。」

秋月さん。

ほんとうにありがと。

12月27日。

メールの着信音で目が覚めた。

・・・・4時23分？！ うそ？！ 一度寝した？！

お迎えは4時半って言つてたよね？！

メール？ 龍之介？

『今から出る。』

まづい！

とつあえずトイレ！

最後に詰めるもの、なんだっけ？

充電器。ドライヤー。化粧品。それから・・・・？

ああ・・・顔を洗わなくちや。・・・うわ、寝ぐせが！ やだ、も

う！

もう4時半？

着いてる？ 前のとおせ5分くらいで来たんだから。

ちょっと見てみよう。

来てたら、とにかく起きあがむ合図だけでも。

急いでベランダに出て・・・寒い！ って、パジャマで裸足だった  
よー

まあ、暗いし、じつせ肩から上しか見えないよね？

・・・いた。

まだ暗い道路に、屋根の上にスキー板を積んだ小型車。

ああ、ごめん、龍之介！

と思つたら、運転席の窓が開いて、頭を出した龍之介が上を見上げ

た。

(「めんー」)

身振りで伝えて、急いで引っ込む。  
着替え着替え・・・。

必要最低限の身支度で、とにかく忘れちゃいけない荷物を確認して  
部屋を出たのは4時40分。  
寝ぐせはスキー用に買った帽子をかぶつて「まかすこと」とした。  
起きだから15分ちょっとで出られたなんて、自分でもすごいと思  
う。

キャリーバッグを引いてエレベーターを降りたあたしを見て、龍之  
介が車から出でてくる。

「おはよう。お待たせして」「めんなさい。」

申し訳なくて小さな声で言つと、龍之介はキャリーバッグに手をか  
けながら「やっと笑つた。

「何時に起きたんだよ?」

「・・・龍之介のメールが来たとき。」

「ええ? つこいつおじやないか。それでパジャマ姿だったんだな。

」

後ろの荷台を開けてバッグを積み込みながら、龍之介が呆れた顔を

する。

「あ、わかった？ 暗くて見えないと思つたの！」

「部屋の光でわかったよ。写真に撮らつとしたらいやべに引つ込んでやつて……。」

「当たり前でしょー……龍之介、朝ご飯は？ 途中で買つ？」

「そのつもつだけど。もしかして、腹減つてんのか？」

龍之介が運転席に乗り込むと同時に、あたしはそのままの後ろの席へ。

「うん。昨日、夕飯が早かつたら。」

「わかった。全員そろつてからコンビニに寄のつもつだつたけど、最初のコンビニで朝めしを仕入れよ。」

「ありがと。」

出発したとたんに、龍之介の携帯が鳴る。

龍之介が運転席のドアポケットに入っていた携帯をちらりと見て、肩越しに差し出しながら言った。

「紫苑、出で。真鍋さんかい。」

鳴り続ける音に焦りながら応答ボタンを押す。

「もしもし。」

あれ？ いのあと、何で言つたらいいのかな？

「ええと、龍之介の携帯です。」

ワハハ、と龍之介が笑つた。

電話の向こうでも、同じような笑い声。

『紫苑ちやん？ もう出発したんだね。』

ああ・・・笑われた。朝から。

「はい。おはようございます。」

寝坊はすみし、変なこと言つて、ダメだよね・・・。  
秋月さん、よくあたしのこと気に入ってくれたよね。

『俺は今から家を出るといろなんだ。高木にそいつを貰ってくれる？』

「はい。」

『あと、高速に乗れそうな時間がわかつたら連絡をくれるよついて。最初のパーキングエリアで合流する予定だから。』

「わかりました。」

『じゃあ、またあとで。』

『はい。領を付けていらしてくださいな。』

『あつがと。』

電話を切つて顔を上げると、バックミラーで龍之介と田が合つた。

「紫苑、真鍋さんには優しいんだな。」

「え？」

なんでこきなりそんなんこと？

「わかった？」

そんなこじやべつはないけど・・・。

「わかった。」

そうなのか・・・。

「真鍋さんて、優しいもんね。」

廊下で会つとこつも爽やかに声をかけてくれるし、いろんなことをよく気付いてくれる。

美乃里ちゃんを名前で呼ぶことだけで、うまく収めてくれたし。そういう真鍋さんと話してると、いつも優しい気持ちになるのも。

・・・・?

そういうえば、返事がない。

あ。

もしかして、また拗ねてるの？

龍之介って、どれだけ「ノンパレックスのかたまりなんだろ?」今まで全然気付かなかつた。

車のスピードが落ちて、前を見た。「ノンパレックスに入ると、不機嫌になりながらも、ちゃんとこのことを覚えててくれる。龍之介のこと、信用して、頼りにしてるのにね。」

駐車場に車を入れてこの途中で、真鍋さんからの電話を受ける。

「わかった。」

ひと言で終わる? そんなに拗ねてるの?  
もう一  
それほどでもあるまい? じやなこでしょ? つ?

「 もうここよ、龍之介。」

「え? 何が?」

ブレーキをかけてエンジンを切り、運転席と助手席の間から龍之介が振り向く。

「あたし、龍之介にスキーを教えてもらひのやめる。」

「なんで?」

「だって、やつやつすくべ不機嫌になるんだもん。無理だよ。」

「無理?」

「だって、きつと無理だもん。できないとすぐ元に怒るに決まってる。」

「

「そんなことないよ。」

「絶対そつなるー。だから、教えてくれなくていいー。」

「紫苑。」

「一人でスクールに入つて教わるからーのー。」

しゃべつているうちに気持ちが昂つてきて、自分で泣きやつになってしまつ。

初めはそんなつもりじゃなかつたのに。

日の出前で、まだ暗いのが有難い。

シートに寄りかかり、顔を見られないように外を向いて、口をあゆつと結び、深呼吸。

「紫苑・・・、ごめん・・・。」

今じつ反省しても遅いよ。

急に笑えるわけないじゃない。

「龍之介なんて嫌い。」

あ。

「紫苑。」

「龍之介、悲しい声？」

違う。

「『』めん！　違うの、龍之介。』めん。」

両手で口を覆つても、すでに出てた言葉は消せない。

「『』めん・・・、あたし、そんなつもりじゃなくて・・・。」

「紫苑。わかつてゐる。俺が悪かった。』めん。」

龍之介が右手を伸ばして、あたしの頬に触れる。  
大きくて温かい手。

「もう不機嫌になつたりしないから、一緒に練習しよう。な？」

そつと視線を上げたら、心配そうな龍之介が見えた。

「クン、とうなづく。

それからおずおずと笑つて。

「お腹空いた。朝『』はん、買おう。」

龍之介も笑つてうなづいた。

「ンビーに入りながら、一つ心に誓つた。

もう絶対に“嫌い”なんて言葉は使わない。

相手と一緒に自分も傷つけるほど嫌な言葉だったなんて。



まつたく。

龍之介もしょうがないね。

半分は紫苑に甘えたくて、わざと拗ねてるんだから。  
あんなふうに紫苑が怒ったのは、ちよつとよかつたと思つよ、僕は。

でも、龍之介が焼きもちやいてることに、紫苑は全然気付かないな  
んて。

紫苑もほんとうにしようがないね。

まあ、龍之介が何も言わないんだから、仕方ないか。

ああ、そういうば、言いかけたんだっけ。あの夜。  
残念だったね。

あ、念のために言つておくけど、僕は猫をけしかけたりしてないよ。  
あれは偶然。

僕は紫苑が幸せになればいいんだから、その邪魔はしない。  
もしかしたら、ほんとうに優斗の呪いかもよ・・・。

・・・・・

ねえ、あなた、紫苑ちゃんの恋風でしょ！？

誰？

ああ・・・、さみ、何日か前から紫苑の会社にいるね。

わつ。わたし、レーナ。弘晃・・・真鍋弘晃の恋風。  
ひろあき

真鍋さんの？  
じゃあ・・・。

弘晃はよく耐えてこると懶り。とてもつらいのよ。

そうだね。

あなたは・・・、

僕はコウ。

コウは紫苑ちゃんとどちらと一緒にこられるの？

もう一〇年以上になるよ。

一〇年以上？ じゃあ・・・コウもつらいひと、ある？

・・・そうだね。

紫苑と別れることを思つとつらいよ。

それに、見ていろことしかできなこととも。

やつぱつやうなの・・・。

仕方ないよ、僕たちの運命だから。

それに、紫苑が楽しそうなときは、見ている僕も樂しいよ。

そうね。でも……。

でも？

わたし、弘晃にはなるべく早く相手を見つけてあげたいの。

そんなに急ぐの？

だって、あまりにもつらそうなんだもの。

でも、レイナはまだ……。

そうよ。わたし、4日前に生まれたばかり。

なのに？

弘晃は4日前に決定的に愛する人を失ってしまったんだけれど、最初からずっと、その恋は悲しかったの。

ずっと……。

だから、なるべく早く癒やしてあげたいの。悲しい期間が長すぎるから。

うん。そうなのか。

でね、紫苑ちゃんを第一候補に考えてるの。

え？ 紫苑を？

紫苑は今・・・。

わかつてゐる。弘晃以外の幸せになれる相手は見分けられなければ、観察していたから。候補者は2人、ね？

そうだよ。

そのどちらかを紫苑は選ぶと思つよ。

でも、弘晃とだって、幸せになれるでしょう。

それはそうだけど・・・。

試してはいない。

うん・・・。

僕は龍之介を選んだから。

真鍋さんだつて、紫苑以外にもいるはずじゃないか。

いるわよ。たとえば美乃里ちゃん。

美乃里ちゃん？

彼女なら申し分ないよね？

一緒にここに来てるし。

さうね。でも、わたしはできれば恋風がついている人を選びたいの。

恋風がついている人？

そう。悲しい恋をしたことがある人。そういう人の方が、きっと優しいでしょうから。

優しい・・・。

それに、紫苑ちゃんには、どこか人を和ませる雰囲気があるから。可愛らしい人よね？

それはそうだけど。

ユウ。紫苑ちゃんが幸せになれるなら、今の候補者以外だつてかまわないでしよう？

・・・紫苑がその人を愛するようになるなら。

だから、この旅行中に試させてもらひ。

もう決めてるんだね。

ええ。

わかった。邪魔はしない。  
でも、手伝いもしないよ。

わかった。見ててね。

レイナ。

きみは焦つてるんだ。

僕みたいになることが怖いから。

・・・うまく行く可能性は、もちろんある。

真鍋さんはいい人だし。

だけどね、レイナ。

きみは分かっていない！

僕たちの力はとても小さいつてこと。

きっかけを作ることはできるけれど、心を動かすことはできない一つのこと。

きっかけを作つても、うまくいかないことがどれほど多いのか。

まだ生まれたばかりじゃ仕方ないけど・・・。

それに、龍之介が紫苑から田を離さないよ。  
しかも、紫苑は鈍いから、きっと難しいと思うよ。



#### 41 スキーは滑るもの

スキーにするか、スノーボードにするかと訊かれて、迷つた末、スキーを選んだ。

両足が一つの板に固定されているスノーボードよりも、スキーの方が普通に動けそうだから。

それに一応、ほんの少しだけど経験があるから。

スキーのセットを借りるといふから、龍之介がずっと面倒を見てくれた。

スキーブーツを履いただけでヨロヨロしているあたしは、建物から外に出るたつた5段の階段さえも、手すりにつかまって降りるしかない。

龍之介は自分のとあたしのと、一人分の板とストックを担いで、のしのしと歩いて行く。

年末の休みに入ったスキー場は混んでいて、おいて行かれて迷子になつたら大変だ。龍之介の服装を頭に叩き込んでおかないと。ウェアは黒に茶色と白が少し。カーキ色のヘッドバンド。・・・背が高いから、どこにいても目立つかな？

もしかしたら、あたしが見つけてもらえないかも？

こんな普通の水色とグレイの組み合わせじゃなくて、もっと派手な色にすればよかつた？

雪の方が多い歩きやすいと気付いて、龍之介に追いつくために走ろうとしたら、深くなっていた雪にずぼっと踏み込んでしまい、

ますます遅れてしまった。

板をはいて立つたところで龍之介が尋ねる。

「紫苑。スキーはどのくらい知っている？」

“できる？”と詫かない龍之介は正しく。

「ええと、斜面に対しても板を垂直にすると、滑らない。」

「うそ。」

「あとは、立つときは山の下側にある足で体重をかけておく。」

「うそ。」

「それだけ。」

「ああ……そうか。基本中の基本、だな。」

うんうん。  
大事なことだよ。

「だけど、それだと、立つてみるとしかできないよな？」

「やうだね。」

「じゃあ、止まり方を教える。」

「止まり方……？」

滑れないのに?」

「止まり方を知つてれば、滑つて怖くなつたら止まれるだろ?」

「なるほどー。」

“止まり方” さくも、あたしには長い道のつだといふことを、やのあとに知ることになつた。

「ひわこひわこひわこひわい! 動くよ、ほりー。止まりなー!」

ほとんど傾斜がないように見えたのに、スキー板をちょっとずらしてだけで、ずるずると滑りだしてしまつ。

龍之介があたしの板の前に立つて止めてくれながら大きな声で笑う。

「ははははー。紫苑。すじこへつぴり腰だぞー。怖いからつて体重を後ろにかけちゃだめなんだ。板がどんどん滑っちゃうから。」

「そんなこと言つたつてー!」

予想外の動きをするから怖いんだよ・・・。

「わかった。ちょっと移動しよう。歩け・・・そうもないかい? いや、歩け! ほり、斜面に垂直になつてー!」

うわーん。

厳しいよ、龍之介。

歩くつて言つたつて、靴も板も重い！

片足を前に出すと、残りの足が後ろに滑る。

歩いている動作はしているのに、前に進まない！

ほんの5メートルくらい移動するのに大汗をかいた。息も切れた。

「いいか？ 初心者の止まり方は、まずこの形、 “ハ” の字だ。

」

龍之介があたしと向かい合つて、板の後ろ側を大きく開いてみせる。

どれどれ、あたしも・・・重い！

足をバタンバタンと踏み替えながら、なんとか板の後ろ側を外向きに。

「もつと大きく開けないのか？」

「これで精一杯だけぞ？！」

「ふん。脚が短いんだな。」

「余計なお世話だよ！」

何度も練習してポーズができたら、今度は緩やかな斜面に移動して、  
また止まる練習。

「いいか。下側の足にしつかり乗つかってれば、上側の板を動かしても大丈夫だから。」

」

理屈はわかるけど、体がそのどおりには動かない。

斜面の下に向ひてすると、ずらした板が勝手に進み始める。

「龍之介っ！ 滑つかやつよー。ほら、だめ……。」

“ どすん！ と思いつきつ後に転んで、気付いたら、目の前には青い空が広がっていた。

ああ・・・いい天気。

「大丈夫か？」

声と同時に視界に龍之介の顔があらわれて、それに「うん」と頷き返す。

雪の上って、転んでも痛くないんだ・・・。

だけど。

転ぶと、起き上がるのに一苦労。

“ 体重を前に” っていうのも、なかなかできない。

うつかりするとすぐにスピードが出る。スピードが出ると、板に上体がついて行けなくて転ぶ。

龍之介は常にすぐそばに付き添つて、支えてくれたり、つかまらせてくれたりしている。

根気のいい先生で、怒らないし、投げ出さないで教えてくれた。  
怒らないどころか、上機嫌だ。

あたしのみつともない姿を見るのがそんなに面白いのか、優越感に浸れて嬉しいのか。

「OK、紫苑。今度はここまで真っ直ぐ滑って来い。」

最初は下を向くこともできなかつたあたしが、どうにかストックをつつかい棒にしながら斜面に立てるようになると、龍之介はあたしから離れても大丈夫だと判断したらしく。

横歩きで龍之介が指示する場所まで登り、ストックを突きながら、板をハの字になるようにずりすりと下向きになる。

そこで顔を上げたら、手を振っている龍之介が見えた。

ええと。

板は後ろを開いてるね。・・・で。

膝を曲げる。

体重は前の内側。

滑つて行く先を見る。

龍之介はあそ。

10メートルもないような距離が、ものすごく長く見える。

よし。

少しだけ踏ん張る力を緩めると、ズズズ・・・と“ハ”的字型にした板が動き出す。

やった！

「この速さなら大丈夫！」

ズズズズズズ・・・と、かたつむりのスピードで、板が緩やかな斜面を滑つて行く。

滑つてるよ！

一人で！

すごい！

頭の中は板の角度を同じ状態に保つことと、体重のことで精一杯。視線は板の先にぐぎ付け。

でも、滑つてる。

「紫苑！ ブレーク！」

しばらく集中して滑つたところで龍之介の声が聞こえて顔を上げたら、2、3メートル先に龍之介が見える。

「わっ？！」

姿勢を変えたせいか、気が緩んだせいか、板のコントロールが利かなくなつて、いきなりスピードが！

「わ、わ、わ、だめ！」

「紫苑！」

止まらない！ 避けられない！

どすん！！

・・・止まつた？

頭はじこにもぶつからなかつた。  
つまり、転ばなかつた？

「くふう。あはははは！」

頭の上で龍之介の笑い声が聞こえる。

「あはははは！」

田を開けてみたら、あたしの田の前には大笑いしている龍之介の顔  
と、その背景に青い空・・・？

空が正面に見えるつてことは、あたしは仰向けになつてゐて」と。  
でも、背中は雪の上じゃない。  
どうなつてゐの？

「紫苑。ほり、立て。」

背中から持ち上げられる感覚。

・・・じことせ。

もしかして、ぶら下がつてゐる？！

龍之介に支えられて？

つまり、あたしは龍之介の股を半分ぐぐるような状態で、仰向けに抱えられてるわけ……？  
かつこ悪い！

急いで板を体重が乗せられる場所まで動かそうとするけど、焦れば焦るほど、板がすべて逃げてしまう。

龍之介が大笑いしながら、両手であたしを「どうこじょ。」と持ち上げてくれて、そのタイミングに合わせてなんとか立ち上がる。

しつかり立てたところで深呼吸をしたら、龍之介がまた大きな声で笑った。

「紫苑。やつたな。」

満足そうな顔をした龍之介が、肩をギュッと……。

「危ないよ、龍之介！ バランスが崩れたら……うわわー！」

「おつとー！」

転ぶ！ ……と思った……けど、転ばなかつた。

お腹のところに龍之介の腕があつて、夢中でそれにつかまっていた。背中……といふか、ウェアの首の後ろを持ち上げられているような感じもする。

猫……？

「大丈夫だ。ちゃんと見てるから。」

「うん……」

態勢を戻すのにまた暴れてしまい、龍之介が大笑いする。そんなに笑わなくても……。

でもね、スキーッつけッこう楽しいみたい。

龍之介はあたしに「どうにか止まり方を教え込み、昼食までには横歩きで斜面を登り、“ボーゲンでなんとなくカーブしながら滑る”といつとこここまでレベルアップさせてくれた。

2時間少しでここまでできたのは、まさに龍之介の努力のたまものだと思う。ほんとうに頭が下がる。

「よし。午後はリフトで上に行つてみよう。」

みんなで食べた昼食のあと、龍之介がいきなり宣言。

うそ？

あんな斜面だよ？

あの人混みだよ？

絶対に無理だと思つ！

「さりゃくらいでできれば、初心者のコースならちゃんと降りられるよ。歩いて登つて滑る練習をするよりも、リフトで登つてコースを滑つて来る方が、長い距離を練習できるから楽だぞ。」

そんな龍之介の理屈に、たしかにそうかなとうなづいた。

でも。

問題はコースだけではなくて、リフトもだつた！

まず、そこまで歩くのが大変！

龍之介みたいに滑るように歩ければいいんだけど・・・。龍之介の板つて、あたしのよりも軽いんじゃないだろうか？

乗り場の列に並んだら、乗り口に向かって少し傾斜していた。  
超初心者のあたしは、大きくハの字に開いてストップする方法しか知らない。

でも、リフト乗り場は混雑していて、板を開いたりするような場所はない。  
ストックを前に向けて突いてブレー キ代わりにしようと思つても、板はずるずると前へ進む・・・。

ああ・・・、前の人に乗っちゃつてゐよ。『めんなさい。

「龍之介、どうしたら・・・あれ？」

龍之介、どこ？ この隣の人、だれ？

「紫苑。」

後方から龍之介の声が。

振り向くと、はしに寄れと手で合図している。了解。

『了解』って言つたつて・・・難しい！ 板が重い！

周囲の人にペコペコ謝りながら、必死で横に抜け出す。

あたしを助けてくれる人は龍之介しかいないと想つと、ほかの人の冷たい眼差しも構つてなんかいられない。

「紫苑が止まらないでどんどん行けやうから。」

「そんなこと言われても、ここが坂になつてて止まれないんだよ。ブレーキかけられなこし。ずるずる滑つて、ほかの人の板に乗つちやつたよ。」

ぶつぶつ言しながらも、龍之介に一つひとつ指示され、支えられながら、どつにカリフトで上までたどり着く。

長いゲレンデを上からのぞき込んだら、ものすゝに急斜面に見えて足がすくんだ。

初心者用のコースだけだ、上に中級用のコースがあつて、そつちから降りてくる人たちと合流することになる。

うしろからやってくるスピードの速い人たちが怖い。近付いて来る音でさえ。

それでも、来てしまつたら滑つて行くしかない。

龍之介に従つて、比較的緩やかな斜面を選んでのろのろと滑る。何度もバランスを崩して転ぶ。

でも。

転んだら起きればいい。

龍之介がちゃんとついてくれるんだかい。

そう思つたらだんだん気持ちに余裕が出てきて、2回までは一度転んだだけで、そのコースを滑りきることができた。

嬉しくて、龍之介と顔を見合させて大笑いした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9926x/>

---

風が吹いたら恋をしよう。

2011年12月5日20時51分発行